提督業再開しました

刻の風

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
上官を力の限りぶん殴ったら僻地に飛ばされた、あいつまじ許さんぞ

目次

鎮守府改革編

提督再開できそうです 1
提督業先行き不明 4
提督業は苦戦中 11
提督業のクッキング 16
提督業は中間管理職 23
閑話～～～それぞれの邂逅～～～ 25

艦隊大演習編

提督業の案件電文 28
提督業の艦隊編成 33
提督業の工廠視察 38
提督業の艦隊演習 42
提督業の艦隊演習ー2 47
提督業のお引越し 52
提督業の鹵獲艦 57
提督業の事後処理 61
提督業の矛盾点 66
提督業の酔っ払い 71
提督業の案件電文 76
提督業の作戦会議 81
提督業の夜のお仕事 84
提督業の行方不明 88
提督業の泥濘 94
提督業の艦隊指導 99

提督業の復活祝い　104
提督業の大晦日　108
提督業のお正月明け　112
提督業の地雷除去《甲》　116
提督業の地雷除去《乙》　120
提督業の極秘交渉　123
提督業の留学艦　126
提督業の歓迎会（上）　130
提督業の事前準備　134
泊地事変編
雑音　137
回想　139
事変　146
蜂起　150
紡ぎ　153
駐留　155
篝火　158
開戦　161
追い剥ぎ　164
外話
提督業のクリスマス　167
提督業のクリスマス甲　173

鎮守府改革編
提督再開できそうです

何故今俺はここにいる…思い出せない…何故だか思い出そうとすると頭が痛くなる…ああ、そうだ、元帥に呼ばれたんだ、どんな会話してただろうか…ノックをした後…

？「失礼します、御用に預かり参上した次第でございます」

元帥「まぁまぁ、そう畏まるな、話し辛い、」

？「お言葉に甘えて敬語を外させていただきます、所で話というのは？」

元帥「何故そう身構える？私が君に無茶を言ったことはあったかね？」

？「ええ、新型の輸送方法とか言って妖精さんの運転する艦爆数十機に紐で縛らせて人を上空２００ｍに命綱無しで送り出してくれたり、品種改良された牛肉と言って深海棲艦の肉を食べさせられたり、とにかく無茶苦茶やらされましたよ」

元帥「あっはっは、そんなこともあったな、だが新城君、今日は朗報だ、君の新規配属先が決まった」

新城と呼ばれた男はその知らせに目を見開いた

新城「今回はどんな無茶苦茶ですか？まさか最前基地とか言って深海に新規建設された鎮守府に配属とかはないですよね？」

元帥「まさか、そんなことは流石にない、君の配属先はリンガ泊地に決まった、まぁ…頑張りたまえ、後、君の前勤めていた呉鎮守府だが、後続が決まった、まさか君がぶん殴った相手とは」

新城と呼ばれた男が転属になった理由、それは階級が上の提督をぶん殴ったのだ、艦娘をまるで人のように扱っていないという理由で上官であるはずの人間を殴ったのだ、当然お咎めはあり、つい先程まで憲兵の詰所にいた

新城「待ってください元帥閣下、どうか、どうかそれだけはおやめ下さい！それではあいつは、佐伯の野郎は艦娘に報復をしかねません

！」
元帥「…もう遅い、既に着任は済んでいる、諦めろ！憲兵、こいつをさっさと運び出せ！」
憲兵ｓ「「は、」」
新城「そんなぁ！どうか！どうかお考え直しをぉ！」オラ、コイ！
ソッソンナ　　イイカラッサッサトコイヤ！
どれくらい時間が過ぎただろうか…気がつけばリンガ泊地と呼ばれる場所についていた、船から降りて建物を見ると見た目はお世辞にも綺麗とは言えない見た目だ、所々で海軍の象徴ともいえる赤煉瓦は崩れ落ち、鉄筋が剥き出しになっている、２００ペア分の不幸型姉妹に相当するであろう負のオーラを発しているその建物は心無しか廃墟にすら見えた
憲兵１「前の鎮守府で何があったかは知らないがもう忘れろ、艦娘は兵器で人権は無い、お前は高い給金を貰ってのうのうと老後の心配でもしてればいいんだ、せいぜい達者で頑張れ」
そう言うといそいそと船に戻り本土へ向けて帰ってしまった
新城「何て職場だ、ブラックにも程があるぞ…転職も考えるべきかなぁ…」
等と考えながら歩いていると鎮守府の入り口に着いた、はめ込まれたガラスは薄汚れ、中の光を鈍く通すだけで人影を映さない
新城「ええ…大丈夫かよここ…既に全滅して誰もいない所に置き去り、とか無いよな？」
そう思いながらドアに手を伸ばした、開かない、何故だ？錆び付いているのか？いや、そんなことはない、じゃあ何故、考えても埒が開かないと判断した新城は引いてダメなら…もっと引くことにした、するとどうだ、少し開いた、だが1瞬でしまった、なら今度は、と思いっきり体当たりしてドアをこじ開けた、凄まじい音を立ててドアが開いた、…両開きのドアだったらしい、だが何故…と、考えていると顔面に何かが飛んできた、ティッシュ箱だ
？「アンタが今日着任する予定の新しいクソ提督ね、まずは自己紹介、私は曙、あんまり馴れ馴れしくしないでよね！」

新城「…君相撲やっｔ」
曙「やってない！1回死ねば!?」
新城「冗談だよ、いかにも今日着任した提督だが…l
曙「なに？何か言いたそうね」
新城「ああ、何というかその、随分と雰囲気のある外装だったな、と」
曙「仕方ないのよ、こんな僻地に有る泊地は予算がろくに出ないのよ、何度も電文で打診したけど1度も返信は来ないわ」
新城「…そうか、もう一つ質問だがここには君のほかに艦娘はいるのか？」
曙「勿論よ、いくらなんでもそれは舐め過ぎね」
新城「その割には君の他に見えないが」
曙「もうみんな講堂に集まってるわよ、アンタの到着が遅いから秘書艦たる私が見に来たんじゃないの」
新城「…チェンジで…」
曙「アンタいい度胸してるわね！そこに立ってなさい、連装砲をお見舞いしてあげるから」
新城「あ、講堂はあっちかな？」ソソクサ
曙「あ、こら、逃げるな！」
ここかな？そこには小学校に体育館を思わせる建物が建っていた、ドアノブに手をかけ、いざ中に足を踏み出した

提督業先行き不明

重々しい雰囲気を携えたその建物に、新城は足を踏み入れた、どこか寂しげな雰囲気を漂わせたドアノブに、ゆっくりと、だが確実に、力を入れた…

新城（ここが講堂か？第一印象は明るい方がいいか…よし、これで行こう！）

新城ガラッ「やぁ諸君！初めまして！今日ここに着任した新城という者だ！宜しく頼む！まずはお互いの事を理解しあいｔｌ」

「「キャーーーー！」」

けたたましい悲鳴と共に個性豊かな罵声が浴びせられる

「変態！」

「覗き魔！」

「痴漢！」

「童貞！」

「社会不適合者！」

「伊級もどき！」

…おい、最後の伊級もどきは何だ伊級もどきは、そう、入渠ドッグだった…中には２人の艦娘が入っていた、俊速でドアを閉めると同時にバケツがドアに直撃した、表面が少し凹んだかと思うと、数分後、中から先程の少女が現れた、眼帯をつけた少女が口を開く

？「お前が新しい司令官か？さっきはとんだご挨拶をしてもらったなぁ…！」ゴゴゴ

強い怒気を孕んだ口調に反応してもう片方の少女も口を開き出した

？「天龍ちゃん～？落ち着いて～？こんな変態でも一応上官だよ～？」

新城「本当に済まなかった！この大きさだからつい講堂かと思ってつい！」

天龍と呼ばれた少女は口を開く

「変態はみんなそういうんだよ！後で憲兵呼んでやるからな！龍田

も後で一緒に来い！」
龍田と呼ばれた少女は少し困ったような顔をして
「天龍ちゃん？でもこの人のこの様子だと本当に知らなかったみたいだよ～？」
天龍「そんな訳あるかよ！」
龍田「でも今日着任したばかりだから建物を全部知っている方が怪しいけどな～？」
天龍「まぁ…龍田が言うならそれで…だぁぁぁ！わかったよ！今回だけは許してやるよ、だけど次はねぇからな？」
新城（チョロ…）
龍田「で、提督は今講堂に向かってるの～？講堂なら突き当たりを右に行った所だよ～」
新城「お、すまない、感謝する、お前達も一緒に来てくれないか？」
龍田「遠慮しておくわ～、後でゆっくり向かいますので～、ね？天龍ちゃん？」
天龍「お　おう」
すると、背後から誰かが近寄って来た、
曙「ここにいやがったのねクソ提督！あんまり手間かかせんな！」
新城「ひどくない？ぼのたん」
曙「なによそのぼのたんって呼び方！」
新城「何となく？」
曙「何となくで人の渾名付けるなこのクソ提督！」
新城「いいじゃん俺達の仲なんだし」
曙「普通会って15分の相手に渾名付けないわよ！っていうか何でアンタがここにいるのよ」
新城「まぁ…ちょっとな」
曙「まさかアンタ、天龍さんと龍田さんに手ェ出してないでしょうねぇ!?」
龍田「えっと～、提督ったらいきなりお風呂に入ってきて仲良くしようって～」
新城「え!?っちょ!?龍田さん!?」

龍田「うふふふ～♪」
曙「アンタねぇ、人が必死こいて探してる時にアンタは猿みたいに盛ってたって訳ね！っこのクソ提督！まぁもう時間もないし行くわよ！３０分も過ぎてるのに！」
新城「あ！本当だ！忘れてｔ…いやなんでもなすまない龍田さん、天龍さん、後で執務室に来てくれないか」
龍田「了解致しました～」
天龍「ったくしょうがねぇなぁ」
新城「ありがとう感謝する」
曙「なにぼさっとしてんのよ！行くわよ！」ゲシゲシ
新城「お前蹴らなくてよくね⁉」
～～～講堂前～～～
曙「ほら、中で艦娘が待ってるから！さっさと行きなさい！」
新城「へいへい」
新城は意を決してドアを開け、壇上に上がった、赤いカーペットが敷いてあり、その上に、重厚さと威厳を醸し出す演台が置かれていた、艦娘達は数十名程で、右方に特殊艦から潜水艦、駆逐艦、軽巡、重巡、空母、戦艦となるように艦種ごとに縦整列で並んでいた、新城はマイクを外し、声を発した
新城「え～、遅れてしまい非常に申し訳ない、少し事情があってな、本日付でー」
新城が言葉を紡ごうとした次の瞬間、ドンッと人が倒れる音がした、講堂内にざわめきが広がる、急いで壇上から降り、駆け寄ると１人の駆逐艦が倒れていた、長い黒髪と碇の形をしたバッチをつけた黒い帽子が特長的な駆逐艦だ
「暁⁉」
「大丈夫⁉」
「衛生兵呼んで！」
暁と呼ばれた少女は苦しそうに短く「ハッハッハッハ」と息をしている、見れば酷い怪我である、頭に包帯を巻きそのお腹からは服の上まで血が滲んでいる、周りを見渡すと暁のような状態の艦娘は少なく

ない、
新城「おい！大丈夫か!?しっかりしろ!?なんで怪我なんかしてるんだ！ドッグはあるだろう！他のみんなもだ！」
すると1人の駆逐艦がこちらを睨みつけながらこう言った
？「何を言っているの!?駆逐艦と軽巡にドッグに入る権利ある訳ないじゃない！ただただ戦艦や空母の盾になって死んでいくだけよ！」
「ちょっ、なに言ってるの!?雷！そんなこと言ったらあなた！」
雷「出てって！提督なんか要らない！貴方達が居るからお姉ちゃんは…お姉ちゃんは！」
どうなっている？何故この駆逐艦達は怪我をしているんだ？艦娘はドッグに入り治療を受けることで欠損すら治すことができる、なのに何故怪我を？まさか、いやありえない、だがそうとしか思えない、この駆逐艦が言っていたことが事実ならここの前の提督のしていたことはー
新城「悪いがそれは出来ない、前任から引継ぎこそ出来なかったが今日から俺がここの責任者であり最高指導者だからな」
雷「出てってって言ってるの！どうせ貴方も同じよ！前の提督と変わらないわ！又重量艦を守る盾にするんでしょ!?」
新城「そんな事はない」
雷「早く命令してよ！速いか遅いかの違いなんだから！今すぐ海域に出て犬死にして来いって！」
新城「だから！俺はそんなこと命令しない！それよりお前も酷い怪我だろ！ドッグ行って来い！」
なんで？なんでこの男は駆逐艦如きをドッグに入れようとする？戦術的価値も薄く精精盾になることしかできない私達を何で治そうとする？これまでの提督は誰も彼も駆逐艦を見殺しにし、気に入らないと暴力を振るった、来る日も来る日も仲間の数が減っていく、だがいなくなる事はない、又建造で作ればいいのだ、換えはいくらでも効く、低燃費のでこき使える主力の盾、それが駆逐艦のはず、もう何度仲間が消え、そっくりおんなじ艦娘が建造されただろう、今居る姉妹艦も私以外もう何回も沈んでる、いや、私も沈んでるのかもしれない、

私は誰？私は何？男が近づいてくる、逃げちゃだめよ、それが仲間を守る方法なんだから…

雷は目を閉じ、やってくる衝撃に備えた、だがいつまでもくるはずの衝撃はこない、だが、代わりに、温もりを感じた、何故？数秒逡巡した後、雷は目を開けた、雷は目を見開いた、周囲のどよめきが消えた、男が雷を抱きしめていた、強く、強く、だが決して痛くないように優しく、

雷「何よ！離しなさいよ！」

新城「いやだ」

雷「離しなさいって言ってるでしょ!?」

新城「君の過去に何があったか、君達をみて大体は理解できた、」

雷「ならもうほっといてよ！」

新城「いやだ、僕は人間だ、君達と使命を分かち合う事はできない、だけど、悲しみを分かち合い、共に手を取り合い前に進む事はできる！」

その言葉を聞いた瞬間、雷は感じた、この男は違うかもしれない、今度こそ、今度こそ信じてもいいのかもしれないと、何故だろう、目から水が出る、何で？分からない、でもきっとこれは悲しんでるんじゃない、喜んでるんだ

新城「おい！お前大丈夫か!?傷が痛むのか!?」

雷「違うわ提督、痛くないの、ただね？嬉しかったの、やっと、やっと駆逐艦を人として見てくれる人が現れて、非礼を詫びるわ！私は暁型３番艦の雷よ！司令官、私を頼ってくれてもいいのよ？」

新城「そうか、いい名前だな、力強い雷を感じる、では鎮守府全艦娘に記念すべき第一号の指令を下す！小破以上の艦は大破を優先して入渠せよ！尚、艦種での優越は無い！全員行って来い！」

艦娘一同「「了解致しました！」」ゾロゾロ

新城「さて、無傷の艦娘達だな、大体半分くらいか、そのままでいい、なんなら座ってくれても構わない！俺の名前は新城誠、本日付けでリンガ泊地の提督となった、宜しく頼む！では、無傷の艦娘にも指令を出す！心して聞け！」

艦娘一同「「ゴクリ」」イキヲノム
新城「全員鎮守府内の掃除だ！寮とドッグを中心に行ってくれ！」
艦娘一同「「え？」」
新城「今の話を聞いて想像はついた、どうせ来賓の目に着くつところだけは綺麗で後はボロッボロなんだろ？俺も手伝うから早めに終わらすぞ！」
艦娘一同「「了解致しました！」」ゾロゾロ
新城「あ、あと曙は少し残ってくれ！」
曙「ほいー？何よクソ提督！私もさっさと掃除に加わりたいんだけど」
新城「何で現状を話さなかった？」
曙「だって言うより見たほうがわかりやすいでしょ？」
新城「だが…まぁいい、それより一つ聞いていいか？」
曙「何よ？」
新城「前任はどこに行った？」
曙「知らないわよあんな奴のこと、何でも話によれば戦果を認められたとかで呉鎮守府勤務になったそうよ」
新城「な!?まさかその提督の名前は佐伯と言わなかったか!?」
曙「そうよ？よく知ってるじゃないクソ提督のくせに」
新城「ああそうだよ、呉は俺の元いた鎮守府で佐伯は俺が左遷される理由になった男だ！」
曙「え？何で？」
新城「言うに事欠いてあの野郎は艦娘に人権はない、出世の道具何てほざきやがったからな、1発ぶん殴った」
曙「え？クソ提督は少佐よね？あいつは大佐だったから…まさか上官をぶん殴ったの？」
新城「そうだが…あんまり言うてくれるな…」
曙「あはははははっっはwはぁぁぁ、お腹痛いわぁｗｗｗ」ケラケラ
新城「あんまり笑うなよ！」
曙「でも何で艦娘のためなんかに？」

新城「艦娘も人間のようなもんだろ？だからそいつが許せなかった」
曙「～ッそういうところがクソなのよ！このクソ提督！」ボソッ
新城「ん？お前顔赤いけどどうした？」
曙「なんでもないわよ！このクソ提督！」ゲシゲシ
新城「蹴るなよ！じゃあ俺らも手伝いに行くか、」
曙「わかったわよ、アンタ執務は？」
新城「徹夜で何とか」
曙「嫌いじゃないわ、そういうの、この曙さんがついてるわ！手伝ってあげるから精精頑張んなさい！」

提督業は苦戦中

～～～1時間が経過～～～

天龍「天龍型1番艦天龍、同じく天龍型2番艦龍田、呼ばれたからきてやったぜぇ」

龍田「っもう、天龍ちゃんったら～、ちゃんとあいさつしなきゃだめだよ～」

新城「え？お前ら今なんて言った？」

天龍「？俺今何か変なこと言ったか？」

新城「天龍型って・・・」

龍田「それがなにか～？」

新城「龍田型じゃなくて？」

天龍「あ？」ギロッ

龍田「っぷ」クスクス

新城「え？違った？なんか・・・その・・・雰囲気や言動からてっきり龍田が姉かと思ってた」

天龍「この屈辱絶対忘れねぇ・・・！」

龍田「あはは～、天龍ちゃんがお姉ちゃんだから～、次からは気をつけてね～？」

新城「すまなかった、まぁそれは置いておいて本題に移ろう、雷が言うには軽巡と駆逐艦の入渠は認められていなかったそうだがお前らは何故入渠を？」

天龍「・・・」

龍田「天龍ちゃんはこの話には触れたくないみたいだけど～、大切なことだからはなすね～？」

天龍「・・・おう、」

龍田「艦娘は戦闘行動をとる際特殊な艤装を使うわよね～？その艤装を動かすのにも資材が必要なの～、他にも装備を開発したり新しい艦娘を迎え入れるのにも、だけど、資材は無尽蔵に出てくるわけじゃないわ～？じゃあどうやって資材を手に入れるの～？」

新城「・・・遠征か・・・」

龍田「ご名答～、私と天龍ちゃんはそれぞれ水雷戦隊を率いて遠征任務に出るのがお仕事だったの～、でもそこが重要なの～」
新城「じゃあなんで」
龍田「遠征には時間が決められているでしょう？だけどそれはあくまでデータ上の計算時間、最高の条件で達成された場合を想定しているから、それに間に合わせるために敵の居る海域に足を踏み入れたりして時間短縮してるの～、だから当然戦闘にもなるわけで中破や大破もする、だからその治療よ～？」
新城「それはわかった、だが・・・それだけだと天龍の落ち込みの理由がわかんないんだが・・・」
龍田「…遠征でも多少は経験値が手に入るの～、だからいきなり実戦に出す前に遠征に出して練度を少し上げておくの…敵の主力に対峙する前に盾が全滅したらだめでしょ？」
新城「…まさか！」
龍田「そう、つまり、私たちは間接的にとはいえ前任の提督のお手伝いをしていたことになってしまうの、私はなるべく情が出ないように接していたけど…天龍ちゃんは…みんなとても大切にしてた、まるで家族のように、だから…実戦に送り出すときにいつも見送っていたわ～、帰ってくる時も全員帰って来てるか、何時間も待ってた…でも、ただの1度も全員揃って帰って来た事はなかったわ～、だから天龍ちゃんは自分の事をすっごい責めてるの…もっと自分があいつらの練度を上げてやれていたら、航海の途中で逃していたら、ってね？」
新城「そうか…辛い事を聞いたな…天龍、もう下がってもいいぞ」
天龍「…くねぇよ…」
龍田「天龍ちゃん～？」
新城「天龍？」
天龍「辛くねぇよ！俺なんて！綺麗な未来を夢見て、希望にあふれた戦後を夢見た純粋な目で練度が上がる度に嬉しそうに俺に報告して来やがったあいつらを思うと辛くなんてねぇ！突然の出撃で盾代わりに使われて、夢を砕かれたあいつらの方が辛いはずだろ！」
新城「天龍…」

天龍「あいつらは俺が殺したも同然だ…提督、俺にここに居る資格なんてない、俺を解体してくれ…」
龍田「天龍ちゃん!?」
新城「…ならあいつらに直接聞いてみるか？」
天龍「え？」
新城「いやか？」
天龍「いや！いやじゃねぇ！」
龍田「天龍ちゃん～？無理はしなくていいんだよ～？」
天龍「無理じゃねぇよ、俺がもう1度あいつらに向き合えるかもしれないいい機会だ、だけど、資格が無いって言われたら俺を解体してくれ…」
龍田「わかったわ～、天龍ちゃんの覚悟がそこまでなら、私も付き合うよ～？」
天龍「本気か？」
龍田「うん～、天龍ちゃん、私達、逝くときは一緒だよ～？」
天龍「…わかったよ、提督、頼んだぜ…」
新城「おう、じゃあ駆逐艦達呼んでくるから、そこのクローゼットにでも隠れててくれ、」
天＆龍「わかった（わ～、）」
～～～数十分経過～～～
コンコン
新城「はいどうぞー」
雷「駆逐艦雷、以下3名、およびにあずかりさんじょうひましたー！」
暁「ちょっと雷！なんで1番艦の私が「以下」なのよ！」
？1「雷ちゃんちょっと噛んでたのです」
？2「うん、だけどそれも雷らしいよ」
雷「ちょっとなによそれー!?」
新城「お！雷、よくきてくれた、それに他のみんなもよく来てくれた！そっちの黒い髪の子は先程倒れた子か？もう様子はよくなったのか？」

暁「暁型1番艦の暁よ！一人前のレディーとしてあつかってよね！」
新城「元気があるようで俺も嬉しいよ、そちらの2人は？」
電「暁型4番艦電なのです！どうかよろしくお願いします」ペコ
響「暁型2番艦響だよ、その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるんだ」
新城「ほえー、よろしく頼むよ、暁型はこの4人だけでいいのか？」
暁「そうね、ここに居るので全員よ！」
新城「じゃあみんなに一つ質問してもいいか？」
雷「もちろんよ！どんな質問にもこたえてみせるわ！」
新城「それじゃあ聞くけど、天龍と龍田がこの鎮守府にいるな？」
暁「いるわね、で？その2人がどうかしたわけ？」
新城「君たちは天龍と龍田は好きか？」
一同「もちろん（だ）（わ）（なのです）」
新城「理由を聞かせてくれるか？」
暁「今の私達がいるのは天龍さん達のおかげだから！確かに仲間は少なくなっちゃったけど、今でも多くの仲間がいるわ！それって天龍さん達が練度を少しでも高く上げてくれたおかげよ！」
電「なのです！」
暁「ちょっと怖いところはあるけど、それも全部私達のためを思ってのことだから、天龍さん達を嫌いに何てなれないわ！むしろ私達が何か恩返しをしたいくらいよ！」
クローゼット、ガタガタ　ヒックヒック
一同「？」
新城「おっと！もうこんな時間か、お昼ご飯食作るの手伝ってくれないか？」
電「艦娘がご飯何て食べていいの？」
新城「勿論だ！美味いの期待しておけ～」
一同「はい！（なのです）」
新城「じゃあ先に食堂に行っててくれ、すぐに追いつくから」
一同「了解しました（なのです）！」

ゾロゾロ
新城「さて、行ったか…お前らもうでてきていいぞ！」
クローゼット：ガチャ
新城「おう！お前その顔どうした！」
天龍「ふぇ!?」
龍田「天龍ちゃんは涙もろいから～」
新城「そういうお前も涙出掛けてるぞ～」
龍田「そこは気づかなくていいから～」
新城「わかったか？お前達はこの鎮守府になくてはならない存在だ」
天龍「ああ、俺はあいつらをもっと一人前の艦娘にして見せる！ビッシバッシしごいてやるぜ！」
龍田「ん～、少しは優しくね～？」
新城「ではリンガ泊地提督として、お前らに下す最初の任務だ、俺とあいつらの料理を手伝ってくれ」
天龍「おう！軽巡天龍、出撃するぜぇ！」
龍田「出撃します、刻む食材はどこかしら～？」
新城「じゃあ行くか、何気あいつらだけだと不安なんだよなぁ…」
天龍「行くかぁ…」
新城「待て天龍、お前顔拭いてからいけ～、涙で顔が台無しだ」
天龍「ふぇ!?」ビクゥ
新＆龍（なにこの可愛い生き物）

提督業のクッキング

～～～廊下～～～

新城「ん～、お前ら数ヶ月間資材補給意外何も食べてなかったんだよな？」

天龍「そうだけど…それがどうかしたか？」

新城「ならあんまり重い物はやめておいた方がいいか」

龍田「そうしてもらえるとありがたいな～」

～～～厨房～～～

曙「やっと来たのね、遅いのよ！このクソ提督！」

新城「お！ここに居たかぼのたん！」

曙「ぼのたんゆーなー！」

電「曙ちゃん、すごく嬉しそうなのです！」

曙「うっ嬉しくなんてないし！」

響「ぼのたん…、うん、いい呼び名だね、今度から私もそう呼ばせてもらうよ」

雷＆暁「「私達もそう呼ぶわ！ぼのたん！」」

曙「うううぅなんでこうなるのよぉ…」

天龍「ぼのたんかぁ…悪くないんじゃねぇの？」

龍田「私も気に入ったわ～♪」ケラケラ

曙「天龍さん達まで～！やめてくださいよぉ！」

天＆龍「「いやだ（ね）（わ～）」」

曙「そっそんなぁ…」

新城「そんなに落ち込むなって！ぼ　の　た　ん　！」

曙「アンタのせいでしょーが！ぼのたんゆーなー！こら！そこ笑うなー！」ギャーギャー

新城「冗談も程々にして料理始めるぞ～、」

曙「急に冷静になるなー！」

暁「で？なにを作るの？」

新城「うん、お腹の負担を重くしたくないからお粥だ」

電「了解したのです！」

雷「私がすっごい美味しいお粥を作ってみせるわ！」
響「了解、響、調理に入る」
曙「まぁクソ提督にしてはまともな選択ね！」
？「ええ、艦娘達の体調を最優先した素晴らしい選択です」
曙「あ、間宮さん！」
新城「間宮さん？」
間宮「初めまして提督、給料艦間宮です、」ニコ
龍田「間宮さんはここの厨房の責任者なの～、料理の腕は抜群よ～」
電「とっても美味しいのです！」
新城「間宮か、よろしく頼む、早速で申し訳ないがお粥を作るの手伝ってくれないか？1
間宮「勿論です！その為にここに居ますんで！前任はお料理をさせてくれませんでしたが…久しぶりですが頑張ります！」
新城「…ああ、よろしく頼むよ、前任の時の分も頑張ってもらうから覚悟しておけよ！」
間宮「望む所です！」フンス！
新城「じゃあまず俺と天龍姉妹で米を研ぐぞ、ザルに米を投入して水をかけ続けながら米をかき混ぜるんだ、研ぎ汁が透明になるまでやるのがいいが…人数分は無理だから大体で頼む、暁達は間宮さんに教わりながら研ぎ終わった米を煮てくれ」
一同「「了解（なのです！）（したわ！）（しました～）」」
～～～1時間後～～～
天龍「ヤットオワッタ…テガ…イテェ」
新城「天龍…お前片言になってるぞ」
龍田「久しぶりに疲れたな～」
間宮「お疲れ様です！あとはお任せください！」
暁「暁の出番ね！見てなさい！」
響「暁、厨房で暴れるとあぶない」
暁「きっ気をつけるわよ！もう、ぷんすこ！」プンプン
曙「精精期待してなさい！このクソ提督！」
新城「おう、期待して待ってるぞ、じゃあ俺達は掃除の手伝いして

くるわ」
天龍「え!?オレもかよ！」
龍田「天龍ちゃん～？働かざる者食うべからず、よ～？」
天龍「オレはもう十分働いたっての！」
新＆龍「「はいはーい、曳航曳航～」」グイグイ
天龍「ちょっおい！押すなよぉ！」ジタバタジタバタ
雷「うふふ、司令官達楽しそうね！」
曙「ええ…アンタあれが楽しそうに見えるの？私にはただ天龍さんが連行されていったようにしか見えないんだけど…」
電「とっても楽しそうなのです！」
響「うん、すごく楽しそうだ」
曙「まぁアンタ達がいいならそれでいいけど…」
間宮「さて！皆さん、お粥作り始めますよ～」
一同「はーい」
～～～艦娘寮～～～
新城「じゃあまずは駆逐艦寮から行くか」
天龍「まぁ人数も１番多いし妥当だろうなぁ」
龍田「駆逐艦寮はお部屋多いけどどこから行くの～？」
新城「１号室から順番だな、」
天龍「じゃあこっちだな」
新城「お前別艦種の寮なのによくわかるな～」スゲー
天龍「おう！オレは駆逐艦共と一緒にいる事が多かったからなぁ、せめてあいつらを少しでも笑わせてやりたくてよ…」
龍田「うふふ～、天龍ちゃんは仲間思いのお姉さんだから～♪」
天龍「茶化すなよ龍田！」
新城「お、００１、ここか、」
天龍「おう、ここだぜ」
新城「じゃあお前らは別々に分かれて００２と００３の手伝いをしてきてくれ」
天＆龍「了解（した）（しました～）」
新城（見た目は少しボロいアパートだが…中はどうだか）

新城コンコン「提督の新城だ、掃除を手伝いに来た、入るぞ～」
？「え!?司令官さん!?すっすぐに参ります！」ドタバタ
？「えっと吹雪型1番艦吹雪です！出撃でしょうか！」ガチャ
新城「あ、いや、掃除を手伝いに来た、何かやることはあるか？」
吹雪「いえ、部屋の掃除ならすでに姉妹艦と一緒に終わらせました！」
新城「え？いやいやいや、いくらなんでもこんな早く終わらないだろ？」
吹雪「でも終わってしまいましたし…」
新城「…悪いが少し上がらせて貰うぞ」
吹雪「えっと…狭い所ですが、どうぞ」
新城　オジャマシマース
嘘だろ？ありえない、綺麗すぎる、サッパリしている、これではすぐに終わるはずだ、私物どころか家具や寝具すらない、あるのは小さな一つのちゃぶ台と部屋の隅に置かれた着替えのみだ
新城「お前ここに住んでたのか？」
吹雪「はい、姉妹艦2人とこの部屋で暮してます」
新城「ベッドや他の家具は？」
吹雪「ありません、前の司令官さんの時に解体されて資材になりました」
新城「…お前らはどこで寝てるんだ？」
吹雪「床で雑魚寝してます」
新城「寒くないのか？」
吹雪「寒いです、ですが言ったところで変わるんですか？」
何を言ってるんだろう私、こんなこと言ったって殴られて、罵られて終わりなのに…暁ちゃん達は前までの司令官とは違う、信じられる、って言ってたけど信じられない、信じたくないのかもしれない、もう2度と裏切られたくない、信じて裏切られるんだったら信じない方がいい、
新城「ちょっと待ってろ、」ドタバタ
どこに行ったんだろう、でももうそれもどうでもいい、どうせ今回

も同じなんだから
新城「お待たせ、ベッドには及ばないがこいつを使ってくれ、倉庫で埃かぶって眠ってたが床で直寝よりはマシなはずだ」
吹雪「え？」
新城「どうした？もしかして使い方わからんかった？」
吹雪「えっと…その」
新城「ここのジッパーを開けて足から突っ込むだけだから誰でも1人でできるぞ」
吹雪「違うんです、使い方がわからなかったんじゃなくて、なんで駆逐艦なんかのためにそこまでしてくださるんですか？」
新城「それはどういう？」
吹雪「なんで駆逐艦如きの為に提督が走り回ってるんですか!?なんで駆逐艦如きを心配されるんですか!?」
新城「え？理由は特にないけど？」
吹雪「は？」
新城「俺はここにいるみんなと末長く一緒に居たいからな、それだけだよ、駆逐艦も戦艦も関係ない、仲間だろ？それ以上の存在にはなれてもそれ以下にはなれない、いや、俺がさせない、」
なんだろうこの人は、こんな司令官今まで来た事がなかった、作戦の役に立てない駆逐艦を心配したり、ましてや駆逐艦のために走り回る司令官もいなかった…今度の司令官さんは…本当に違うって、信じてもいいのかもしれない、何故だろう、今まで感じた事のない感情が胸の奥から湧き上がってくる、暖かい、ゆっくりとゆっくりと私の心を溶かしてくれる…今度の司令官の下でなら、この戦いを終わらせられるかもしれない、終戦にみんなと一緒にたどり着けるかもしれない、信じてもいいんだ、この人は
吹雪「すみません司令官、私すっごい失礼な事言ってました、」
新城「気にするなよ、俺をクソ呼ばわりする艦娘もいるんだし、」
吹雪「特型駆逐艦、吹雪型1番艦吹雪、司令官、宜しくお願いします！」
新城「おう！じゃあ他の部屋の様子を見てきてくれないか？」

吹雪「了解しました！」イッキマスヨ～
～～～数分後～～～
ガチャ
龍田「提督～、駆逐艦寮の掃除終わりました～、」
新城「こんなに早いって事は…他もこんな感じだったのか？」
天龍「ああ、あいつら…こんな所で暮してたんだって再認識させられたよ…」
新城「聞くが戦艦寮や空母寮、重巡寮は快適なのか？」
天龍「ああ、勿論だ、軽巡や駆逐艦、潜水艦はゴミみたいな扱いをしやがった癖に戦艦や空母、重巡には一端の扱いしやがってたんだ！」
新城「駆逐艦達と戦艦達の仲は険悪か？」
天龍「いや？寧ろ仲はいいぜ」
新城「なら俺に考えがある」
龍田「どういう考えかしら～？」
新城「駆逐艦達を重巡以上の艦娘寮に部屋替えさせる」
天龍「なっ!?」
龍田「っぷ」クスクス
新城「悪くないだろ、そこそこの広さはありそうだし、それに仲は悪くないんだろ？」
天龍「まぁそうだけどよ」
新城「ならいいじゃん」
龍田（やっぱりこの提督面白いわ～♪）
ガチャ　シレーカン！クチクカンフブキタダイマモドリマシター！
新城「お、お帰り、そっちの２人は？」
吹雪「ルームメイトで妹の白雪と深雪です！宜しくしお願いします！」
新城「白雪に深雪か、いい名前だな、これから宜しく頼む」
白＆深「宜しくお願いします（よー）！」
吹雪「あれ？何で天龍さん達がここに？」

新城「ああ、天龍達には他の部屋の掃除を手伝ってもらってたんだ」
天龍「おう！お前らは？」
吹雪「司令官さんに頼まれて他の部屋を見てきました」
新城「どうだった？」
吹雪「…ほとんどの部屋は私達とおんなじでした」
新城「そうか…悪い、少し席を外す」
天龍「何しに行くんだよ」
新城「ちょっと鎮守府内放送を入れる」
一同「？」

提督業は中間管理職

ピンポンパンポーン

提督「掃除中に失礼する、鎮守府内全艦娘に向けて放送する、駆逐艦、軽巡、潜水艦、以下の寮に住む者は所属する隊の重巡以上の艦娘の部屋に転入せよ、繰り返す、駆逐艦、軽巡、潜水艦は所属する隊の重巡以上の艦娘の部屋に入居せよ」

艦娘達「えええええ!?」

〜〜〜戦艦寮にて〜〜〜

？「っし！これで駆逐艦を…ふひひひひ」

？「ちょっと長門？何気持ちの悪い笑み浮かべてるのよ」

長門「なっ何でもない！私はこの事を提督に確認をとってくる！」

？「なら私は迎えに行ってくるわ」

長門「ならば一緒に行かないか？陸奥」

陸奥「いいけど…提督は？」

長門「こっちの方が大事だ」

〜〜〜空母寮にて〜〜〜

？「私達はあの子達に辛い思いをさせてしまっていた…私達はいいけれど…あの子達は大丈夫かしら」

？「加賀さん、それをいう資格は私達にはないわ…だからせめて…これからは少しでもあの子達に笑ってもらえるように頑張りましょう…」

加賀「そうね…私はあの子達を迎えに行くわ、赤城さんは？」

赤城「加賀さんが行くのなら私も一緒に行くわ、」

加賀「では早速いきましょう」

〜〜〜重巡寮にて〜〜〜

？「あの…私達がまだあの子達と接してもいいんでしょうか…」

？「羽黒…仕方ないとは言え私達の所為で多くの駆逐艦を沈めてしまったのも事実、彼女達に敬意を示し、これからで謝意を示すしかない、」

羽黒「そうですね…でもどうやって」

？「迎えに行こう、まずはそれからだ」
羽黒「そうですね、那智姉さん、行きますか」
那智「ああ、暖かく迎えよう、小さく、だが誰よりも勇敢な戦士達を」
～～～駆逐艦寮にて～～～
吹雪「司令官！一体さっきのはなんですか!?」
新城「いや？言った通りだけど？」
吹雪「なんで…私達は寝袋で十分ですよ！」
新城「お前達は戦艦達は嫌いか？」
吹雪「いいえ…でもなんで…」
新城「戦艦達もきっと同じだ、責任も感じてるだろう、だから、彼女達にチャンスを与えてあげて欲しい」
吹雪「チャンス…ですか？」
新城「ああ…あいつらが、またお前達と笑えるようになるチャンスだ、駄目か？」
吹雪「そんな！駄目だなんて…でも…みんなで笑って過ごせるのなら…そんな未来があるのなら見てみたいです！」
天龍「しかしオレたち軽巡までいいのかよ」
新城「ああ、軽巡もどうせこういう有様だろう？」
天龍「まぁそうだけどよ…」
新城「それに、向こうだって思う所はあるはずだ、じっくりと腹ん中割って話してこい！」
天龍「そうだな！…あいつらと久しぶりにまともに向き合ってやるか！」
ザワザワガヤガヤ
新城「お、来たみたいだぞ、行ってやれ」
吹雪「…はい！司令官、何から何までありがとうございました！」
ガチャガチャ
新城「ふぅ、もうこんな時間か…厨房に戻るかなっと！」
～～～鎮守府改革編終了～～～

閑話～～～それぞれの邂逅～～～

～～～とある戦艦の場合～～～

長門「雪風！迎えに来たぞ！」

雪風「！長門さん…雪風なんかが行っていいんでしょうか…」

長門「勿論だ、寧ろこっちがそれを言わねばならない…」

雪風「そんな！長門さんは悪くないです！悪いのは前のしれぇです！」

長門「それでも我々のせいで多くの駆逐艦や軽巡を…」

雪風「これには雪風は何も言えませんが…みんなきっと悲しんで欲しくはないとおもいます！」

長門「？」

雪風「もし雪風だったら、悲しんでもらうより前進してほしいですから！1日でも早くこの戦いを終わらせて欲しい、きっとみんなそう思ってくれてますよ」

長門「お前達は…見た目こそ幼いが我等より聡いのかもしれないな…」

雪風「さとい？」

長門「何でもない、さぁ、行こう雪風、今陸奥が時津風を迎えに行っている、」

雪風「時津風ちゃんもですか！雪風、感激です！」

～～～とある1航戦たちの場合～～～

加賀　コンコン「失礼するわ、舞風さん、浜風さん、野分さん、」ガチャ

浜＆舞＆野「！」ケイレイ

赤城「そんなに畏まらないで下さい、もう前の提督とは違います」

浜風「どういった御用でしょうか？」

加賀「迎えに来たわ、先程の放送を聞いていたでしょう」

野分「…でも…加賀さん達にご迷惑はおかけできません…」

赤城「私達は仲間であり、それ以下でもそれ以上でもないわ、私達は皆対等な仲間です、互いに敬意は払っても無闇に遠慮する仲ではな

いはずよ」
浜風「でも…それじゃ赤城さん達のお部屋が狭くなってしまいませんか？
加賀「私達２人では広すぎるもの、多少狭いくらいが丁度いいわ、」
舞風「浜風ちゃん、野分ちゃん、お世話になろうよ」
浜＆野「「え？」」
舞風「この機会を逃したら多分もうずっと互いを理解する機会は来ないよ？」
浜＆野「…」コクン
浜風「では、お言葉に甘えてお世話にならせていただきます！」
赤城「上々ね♪」
加賀「では行きましょうか、私達の部屋に」
浜＆野＆舞「は（ー）い！」
～～～とある重巡姉妹の場合～～～
羽黒「あの～、陽炎ちゃん？不知火ちゃん？失礼しますよ～？」コンコン
陽炎「これは！羽黒さん！それに他の妙高型の方々まで！どうされました!?」
那智「迎えにきた、一緒に私達の部屋に行こう」
陽炎「私はいいんですが…その…不知火の方がちょっと…」
不知火「今まで貴方方のために何人も仲間を失ないました…提督の指示とはいえ何故そこまで簡単に顔向け出来るんですか？」ギロッ
陽炎「ちょ！不知火！貴方なんて事言ってんの！」
那智「…」スッ
陽炎「ちょっと那智さん!?何やってるんですか！頭あげてくださいよ！」
不知火「その謝罪は何なんですか？」
那智「今すぐ私ができる事はこれくらいしかない…悔しいことにな…だが、これからで、これからの誠意と敬意で表そう…どうか…もう１度我等にチャンスをくれないだろうか…この通りだ！」
羽黒「不知火さん…我達も責任を感じているの…もっと前の提督に

抗っていれば…明確に否定すれば何かが変わったのかもしれない、というふうに…私もこの通り…」スッ

不知火「…そこまで…言うのなら…分かりました、行きましょう」

陽炎「じゃあ…不束者ですが２人纏めて、宜しくお願いします！」

那智「ああ…こちらこそ宜しく頼む！」

羽黒「じゃあ行きましょうか、部屋で温かいココアでも飲みましょう」

那智「では行くか！」

陽＆不「はい」

艦隊大演習編
提督業の案件電文

新城「鎮守府全艦娘に放送する、食堂に食事を用意してある、早い者勝ちだ、艦種は関係ないから好きに食べてくれ、以上」
浜風「え！ごはん!?」
舞風「ごはんってあのごはんのことだよね！」
野分「当たり前じゃない…でも…補給以外で摂取何かをするの久しぶりかも」
舞風「加賀さん！赤城さん！一緒にいきまｓｈ…!?!?!?」
加＆赤「「ふふふふふっふふふ」」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
舞風「なんか怖いんですけど…」
浜風「きっ気のせいよ…きっと…多分」
野分「まっまあ行きましょう？無くなってたら嫌ですし、ってあれ？加賀さんと赤城さんは？」
舞風「なんか…すごい勢いで走って行った」
野分「ええええ!?」
浜風「とりあえず後に続きましょうか、では、行きましょう」
～～～厨房にて～～～
雷「私達がつくったのよ！味わって食べなきゃだめよ！」
電「なのです！」
暁「頑張ったら疲れちゃった」
響「うん、流石に少し疲れたな」
天龍「凄え！お前らが作ったのかよ！」
龍田「上手ねぇこのお粥」
暁「でしょ！間宮さんに教えてもらいながらつくったのよ！」
龍田「あらあら～、それは楽しみね～」ニコニコ
間宮『いえ、私なんて、暁さん達の頑張りのお陰です」
天龍「しっかしやるなぁ、オレがやったらお粥がお焦げになりそうだぜ」

那智「水分量の多いお粥をお焦げだと!?貴様どれだけ料理下手だ？」
天龍「うっせえ！んな事関係ねぇよ！」
羽黒「まぁまぁ落ち着いて下さい！今は美味しいお粥を食べましょう？ね？」
那智「そうだな、すまなかった」
天龍「おう、こっちも悪かったよ」
那智「すまない、今のは羽黒に言ったんだ」
天龍　ムキー!!
龍田「うふふふふ～受け取ったなら行きましょう？天龍ちゃん、後ろですごいオーラを感じるから～」
天龍　「おーら？」ナンノコッチャ
龍田「良いからいいから～」グイグイ
天龍「おっおい！押すなよ」ギャーギャー
赤城「ご飯何て久しぶりね加賀さん」
加賀「そうね…どうやら駆逐艦の子達が作ったらしいわ」
赤城「それは楽しみですね…次があれば私達も手伝いませんか？」
加賀「それはいい案ですね、後で提督に進言しましょう」
赤城「でもまずは…」
加賀「はい、このお粥を隅々まで味わい尽くしましょう」
長門「そうだな！駆逐艦が折角作ったのだ！残してガッカリさせる訳にはいかんしな！」
赤城「あら…長門さん」
加賀「…また面倒な人が…」ボソッ
長門「加賀、今何か言ったか？」キョトン
加賀「いえ、何も」
長門「ではいただくとしよう！」アーン　モッキュモッキュ　ゴッキュン
長門「素晴らしい！この米を研いだ駆逐艦は天才だな！」キラキラ
赤城「加賀さん…伝えるべきでしょうか…」ヒソヒソ
加賀「ええ、でも…伝えづらいですね…」ヒソヒソ

雷「長門さんったらそんな幸せそうな顔してどうしたの？そんなに雷達が作ったお粥美味しかった？」
長門「ああ、これは仕込みがいいのだろう、これはどの駆逐艦が研いだんだ？」ニコニコ
雷「司令官よ？」
長門「なっ!?」サァァァァァ
赤城「あ、あの～、長門さん？」
加賀「？」
長門「」ブツブツブツブツ
赤城「なんかもう放っておきましょうか」
加賀「ですね、どうせ陸奥さん達が迎えに来るでしょう」
長門「」ブツブツブツブツ
～～～執務室～～～
新城「ぼのたんは食堂に戻らなくて良かったのか？」
曙「クソ提督が執務室に籠もってるのに秘書艦の私だけが席を外す訳にはいかないでしょ」
新城「そうか、ならお前の為にもさっさと終わらせて食堂に行くか」
曙「当たり前よ！クソ提督」
ジリンジリン
曙「何かしら、電話が鳴ってるわね」
新城「そうだな、ん？この番号は大本営だぞ？」
曙「また何か面倒事だったら承知しないわよ」
新城（俺に言われてもなぁ…）
新城「すまないが少し席を外してくれ」
曙「はいはい」ガチャ　パタン
新城「はいもしもし、こちら海軍所属リンガ泊地提督の新城ですが」
元帥「新城君、元気にしているかね」
新城「これは！元帥閣下、これはこれは、どう言ったご用件で？」
元帥「近々海軍の極秘作戦が実施される事は分かっているだろう？」
新城「ええ、ＭＩ諸島の奪還でしたね」

元帥「そうだ、しかしそこで問題が発生した」
新城「問題？それはどのような？」
元帥「単刀直入に言おう、主力艦隊に所属が予定されていた艦娘達が演習中に敵機動大隊の襲撃を受け、壊滅した」
新城「壊滅!?練度は抜群だったはずでは!?」
元帥「ああ、だが壊滅してしまったのだよ、1部の艦娘を除いてな、」
新城「1部？」
元帥「ああ、君が指導していた呉鎮守府から出向して来た艦娘は信じ難いことに無傷だった」
新城「あいつらですか、確か呉からは翔鶴と瑞鶴が行ってましたよね？」
元帥「その通り、だが本題はこれではない」
新城「え？違うんですか？」
元帥「これだけならわざわざ元帥である私自ら電話などしないさ」
新城「はぁ」
元帥「消費した艦娘の補充を行う為に各鎮守府、泊地から1艦隊を出し合い鎮守府対抗の演習を行ってもらう事になった、そこで優秀な成績を残した艦隊、艦娘を補充に当てることを決定した」
新城「…本気ですか？」
元帥「ああ、尚、いかなる理由があろうと不参加は認められない、最善を尽くせ」
元帥「それともう一つ」
新城「まだ何か？」
元帥「そこで収集された艦娘達は新城君、君が指導することが決定した」
新城「ふぇ!?」
元帥「流石に配置変更して数日のベテラン提督の訓練の成果、な訳はないだろう、作戦での結果次第で呉鎮守府に返り咲く事もできるだろう、君の健闘を祈る」
新城「了解致しました」
プツン

新城「え、えらい事になったなぁおい！」ドラドタ
～～～食堂～～～
ドタドタ　ガチャ　バタン
新城「全艦娘はそろってるな!?」
ザワザワ
ピンポンパンポーン
新城「落ち着いて聞いてほしい、今海軍のお偉い方は極秘作戦を実施しようとしている、しかし、投入予定であった艦隊が敵機動大隊の襲撃を受け壊滅した」
新城「各鎮守府、泊地から1機動部隊を出し合い大演習を行う事になった、詳しい事は追って連絡する、航空母艦達は食事後すぐに執務室まで来てくれ、うちの泊地から出すメンバーを決定する、随伴艦は2日後、鎮守府内演習を行い軽巡と駆逐艦の中から決定する」
新城「別働艦隊と支援艦隊も必要らしいがそれは大本営で用意してくれるらしい、では一旦失礼する」
プツン
加賀「赤城さん、大丈夫？」
赤城「大丈夫、と言いたいですが少し厳しいですね…加賀さんは？」
加賀「私も…少々厳しいです」
赤城「今度こそ…一航戦の力を示す機会と思いましょう…過去に打ち勝ち、自分自身に打ち勝つ為に」
加賀「ええ…そうね…行きますか。」
赤城「ええ、行きましょう、提督が待ってます」

提督業の艦隊編成

新城「航空艦のみんなに集まって貰ったのは他でもない、先程放送した内容についてだ、主力となる空母機動部隊を選出する事になった、皆の意見を聞きたい」

？「提督さん、一つ聞いてもええか？」

新城「君は…龍驤だったか、どうぞ、なんでも言ってくれ」

龍驤「それじゃあ聞くけど、出撃する海域はどこや？」

新城「…ＭＩ方面だ、」

龍驤「…ほな、うちの正規空母さん達は無理やな…」

新城「赤城と加賀のことか？」

龍驤「そうや、あの２人はミッドウェー海域にはちょっち因縁があってなぁ…、今回は堪忍してやってえな」

新城「そうなのか？なら無理強いはしないが…しかし軽空母だけで選出するのも問題だぞ」

龍驤「せやけど、うちの泊地には赤城、加賀の他にはうちを含めて軽空母しかおらんのや、今から建造しても練度が間に合わへんしなぁ…」

赤城「提督、龍驤さん…私と加賀さんなら既に決心は付いています、私達一航戦をお出しになってください、」

新城「しかし…無理はしなくていいんだぞ？それに軽空母も優秀な娘達が多そうだし」

龍驤「そうや！アンタらにもしもの事があったら…」

加賀「心配してくれてありがとう、龍驤さん、提督、でも大丈夫よ」

赤城「提督、私達はその因縁を超えて、自分に勝ちたいんです、かつて自分が沈んだ海域で…その時の自分に打ち勝ちたい…」

加賀「ええ、それに心配される程弱くないわ、大本営選定の連合機動部隊が弱かっただけ…私達なら、敵機動大隊なんて鎧袖一触よ」

新城「ふむ…」

龍驤「…提督、どうするんや？」

新城「本当に無理はしていないんだな？」

赤城「はい」
新城「辛い事になると思うが本当にいいんだな？」
加賀「勿論よ」
新城「…分かった、お前達がそう言う以上本気で勝ちにいかないとな」
赤城「え？それはどう言う…」
龍驤「本当はな、提督さんは練度の低い軽空母を出してわざと演習の段階で負けようとしてはったんよ」
新城「誰も沈んで欲しくないからな…、セコい真似をしようとしていた…すまない、この通りだ…だがこうなった以上、俺も腹を括った、全力でお前達を応援しよう！」
赤城「いいえ、提督、お考え直しいただきありがとうございます、提督の名に、泊地の名に恥じぬ一航戦の力をお見せします！」
新城「ああ、頼んだぞ…」
赤＆加賀「了解致しました」ケイレイ
新城「それとなんだが、大本営選定艦隊の生き残りがこの泊地にやって来る、空母だ、仲良くしてやってくれ」
赤城「そうなんですね…その空母のお名前は？」
新城「瑞鶴と翔鶴というらしい」
赤城「あ…」
龍驤「おう…」
加賀「ツチ！」ゴゴゴゴゴゴ
新城「か、加賀さん～？　、ドウサレマシタカ～？」オソルオソル
加賀「いえ、なんでもないわ」ゴゴゴゴゴゴ
新城「オカオガコワイデスヨー」
加賀「なんでもないわ」
新城「いやでも」
加賀「なんでもないと言っているでしょう」ギロッ
赤城「まっまあとにかく！まだ準備はありますから！話に戻りましょう」
加賀「そうですね」

新城（ナイス赤城）
赤城（いえいえ、でもこれからはお気をつけて）
新城「次の話に移るが、随伴艦についてだ、意見があれば何でもいいから言ってほしい」
？「それだったら意見が有るぜ」
？「こっこら隼鷹、提督にそんな口の聞き方ないでしょう！」
隼鷹「へいへい、分かったよ、飛鷹さんは怖い怖い♪」
飛鷹「何よその口の聞き方！」ムー！
隼鷹「そうむくれるなってw」
新城「あのー、そろそろ意見というのを伺ってもいいか？」
隼鷹「すまないねぇ、で、その随伴艦なんだがさ、ちょいと変更した方が良いと思ってなぁ」
新城「というのは？」
隼鷹「うちの泊地は重量艦はそれなりに育ってるけどさ…軽巡や駆逐艦は全然育ってないんだよ…な？前があんな事だっただろ？」
新城「…そうだったな、すまない、つい前いた所の調子でやっちまった、」
隼鷹「それはいいけどさ、随伴艦は戦艦と重巡から選抜するわけだろ？誰を選抜するのさ」
新城「そうさなぁ…みんなは推薦とかはないか？」
赤城「戦艦でしたら長門さん、陸奥さん、重巡なら…那智さんと足柄さんですね」
新城「ああ、さっき名簿で見たメンツだな…だが足柄は遠征中だろ？」
赤城「無線封鎖はしていないので連絡は取れます、提督が着任したことも無線で連絡をしましたので」
新城「なら無線を通して伝えてくれ、他に推薦が有る者はいないか？」
加賀「いいえ」
龍驤「ないで」
飛鷹「いいえ」

隼鷹「言おうと思った奴言われたしなぁ」
新城「なら決定でいいか？鎮守府内放送入れないとな…あ…」マッサオー
赤城「提督？」
加賀「？」
新城「工廠整備してなかった…」
赤城「ああ、それなら大丈夫かと」
新城「え？」
龍驤「ああ、あいつがおるからなぁ」
新城「あいつ？」
加賀「明石さんです、工廠艦としてこの泊地に在籍してるわ」
新城「そいつが工廠を整備してるのか？」
赤城「はい」
隼鷹「ちょいと変わり者だけど悪い奴じゃないし仕事はやる奴だから大丈夫だと思うよ」
新城「変わり者？（ちょっと心配になったな）」
赤城「ちょっと…というかかなり」
新城「え…」
赤城「たまに洒落にならない物を作るんです、任務外で」
新城「例えば？」
加賀「艦娘に搭載できる核融合炉とか1本の魚雷から３０本の魚雷が飛び出すクラスター魚雷とか超重力砲とかビームサーベルとか」
新城「おいおいおいおいおい！最後の２つはオーバーテクノロジーじゃないのか!?」
加賀「ええ、でも明石さんですから」
飛鷹「そうね、明石さんだから普通ね、寧ろ甘いわね」
新城「…」
赤城「提督？」
新城「いや、なんでもない、もう解散してもいいぞ」
赤城「はあ？」
新城「お疲れさん！」

一同「失礼します」ケイレイ
新城「おう、」
新城「ぼのたん！そこにいるんだろ？」クローゼット
曙「うっさい！ぼのたんゆーな！てかなんで判ったのよ」
新城「直感？」
曙「アンタ本当に人間？」
新城「勿論だ、話を聞いていたなら話が早い、一緒に工廠に来てくれ」
曙「はあ？場所は分かるんだし1人で行けばいいじゃない」
新城「なんか…さっきの話聞いてたら不安になってきてな…」
曙「それはアンタの勝手でしょ!?なんでアンタに付いて行かなくちゃならないのよ！」
新城「執務室で盗み聞きなんて軍法会議もんだぞ？」
曙「うぐぐぐぐ…仕方ないわね！今回だけよ、」
新城「それとだ」
曙「何よ、まだ有るの!?」
新城「軍法会議」ボソッ
曙「わかったわよ！何!?」
新城「上目遣いで「お兄ちゃん大好き…だよ？」って言ってでくれ」
曙「なんでそんな事しなきゃいけないのよ！」
新城「軍法会議」ボソッ
曙「ッ！分かったわよ！やればいいんでしょ!?」
新城「賢明な判断だ」
曙「やっやるわよ…おっお兄ちゃん大好き…だよ？」
新城「イヤッフーーーーーーー!!!!!」
曙「うう…頭が…」
新城「何を蹲っている、さぁ、行くぞ！」
曙「わかったわよ！こうなったらヤケだわ！どこまでも付き合ってやるわよ！」

提督業の工廠視察

～～～工廠～～～

新城「ここか…見た目は普通だな」

曙「見た目は、ね」

新城「…中はどうなってるんだか」オジャマシマース

ガラガラ

？「はい！今行きま～す」

新城「お前が明石か？」

明石「はい、そういう貴方は？」

新城「え？伝達行ってなかった？今日着任した新城という提督だが」

曙「…明石さん…今度は何日間引きこもってたんですか？」

明石「４ヶ月」

新城「４ヶ月ゥ!?」

明石「え？普通じゃないですか？」

新城「全然だわ！」

曙「明石さんは機械関係になると時間の概念がおかしいわね…」

明石「えー？流石にひどいですよぉぼのたん」

曙「誰がぼのたんよ！ていうかなんでアンタまで知ってるのよ」

明石「え？他に誰か言ってるんですか？」

新城「奇遇だな、俺もぼのたんって呼んでるんだ」

明石「提督…」

新城「？」

明石「貴方とは仲良くできそうです！」

新城「ああ、俺も今そう思ったところだ、ところで明石」

明石「はい、なんでしょう」

新城「俺たち一応工廠の中を見にきたんだよ」

明石「と、言いますと？」

新城「近く大規模作戦があってな」

明石「なるほど！それで工廠の整備状況の確認ですか！」

曙「ええ、なので中に入れてくれないかしら」
明石「まぁ構いませんが…触れるなと言ったものには触らないでくださいね？死んでも知りませんので」
新城「え？今死んでもって言った？」
明石「お気にせず～、じゃあ行きましょうか」
曙「なんか不安ね…」
ガチャ
新＆曙　オジャマシマース
新城「…意外と片付いてるな」
曙「そうね…でも気をつけましょう、何が有るかわかんないわ」
明石「そんなに警戒しなくても大丈夫ですってば～、そこら辺に兵器が放って有る筈がないじゃないですか」
新城「この魚雷みたいなのは？」ヒョイ
明石「…貯金箱です」
曙「…」ジー
新城「…本当は？」ジトー
明石「クラスター魚雷です…」
新城「うわ！あっぶな！お前なんちゅう物を放り出してるんだよ！」ブンッ
明石「あ！投げちゃダメですよ！」
曙「何やってんのよクソ提督！」
ボンッ　　チュドドドドドドドドドドドド
新城「壁に穴空いたんだけど…」
明石「あ～あ、やっちゃいましたねぇ…」はぁ…
曙「ちょっと明石さん、なんてもん作ってるのよ！あの壁、見た目はレンガだけど戦艦の装甲を超える硬さよ！」
新城「そいつに風穴開けるって…」
新城「…ん？」
曙「クソ提督？」
明石「どうされました？」
新城「明石、こいつ量産できるか？」

明石「勿論ですけど」
曙「どうしたのよクソ提督！…アンタまさか…」
新城「ああ、今度の演習で使う」
曙「正気なの!?」
新城「ああ、別に誰も創作兵器の使用不可なんて言ってないだろ、それに、元帥閣下がそう仰らなかったんだ、誰も文句は言えまい」クックックック
明石「そういうわけでしたら喜んで！」
新城「だが流石に威力は落とせよ？あくまでも演習用だからな」
明石「え～！詰まんないですよそんなの！」
新城「そのかわり後の実戦で…な？」ヒソヒソ
明石「中々話の通じるお方ですなぁ」クックックック
曙「アンタらねぇ…」
新城「後は艦載機や砲弾でお前が開発した物はあるのか？」
明石「そうですねぇ…艦載機はともかくとして砲弾ならいいのがありますよ」
新城「…ほう？聞かせてもらおう」
明石「ここに取り出すは一見普通の一式徹甲、しかし中には…濃硫酸入りでございます」
新城「」ポカーン（。。д。）
曙「」ポカーン（。。д。）
新城「…そいつも量産できるか？」ヒッヒッヒッヒ
明石「勿論でっせ、お代官様」クックックック
新城「ハッハッハッハッハ！」
明石「フフフフフフフフ！」
新＆明「ハーッハッハッハッハ!!!」
曙「アンタらねぇ…」
新城「では頼んだぞ！ではこれで！」
明石「ええ！畏まりました！」
曙「何も見なかったことにしよう…」
～～～その夜執務室にて～～～

明石「提督！完成しました！クラスター魚雷１００００発と硫酸弾１５００発です！」
新城「え？もう？早いな」
明石「速さも売りですから！」
新城「早速明日の選抜隊の演習で試させよう…」
曙「アンタ本気でやる気なのね…」
新城「当たり前だ、あいつらと本気で応援するって約束だからな」
明石「では私はこれで、又のご利用お待ちしてますね！」
新城「おう！世話になるぞ」
曙「もうついていけないから寝るわ、おやすみクソ提督」
新城「いっしょに寝てやろうか？」
曙「いらないわよ！っこの変態クソ提督！」
新城「変態が増えた！」
～～～次の日～～～
赤城「提督はどうされたのでしょうか…演習前に集会なんて」
加賀「どうやら装備換装の指示があるらしいわ」
長門「装備換装だと？」
加賀「ええ、しかも明石さんが作った装備よ」
陸奥「私はまだ死にたくないわ！」
足柄「落ち着いて陸奥！私も一緒よ！」
新城「お、もう集まってたか」
赤城「提督！どのような装備に？」
新城「明石謹製クラスター魚雷搭載艦載機とクラスター魚雷、硫酸弾装備の艦爆と硫酸徹甲弾だ！」
足柄「また聞くからにやばそうな兵器を…」
長門「遺書を書いてきてもいいか？提督」
新城「安心しろって、ちゃんと演習用に威力軽減してある」
赤城「それならまぁ…」
新城「じゃあみんな確実装備換装始めてくれ！もうちょっとで近隣泊地からの演習艦隊が来るから」

提督業の艦隊演習

～～～リンガ泊地、演習待機所～～～
ああ…空はあんなに青いのに…私は不幸だわ…
本当ならば今頃は読書に勤しむ時間だというのに…よりによって他泊地との演習だなんて…
私の不幸が周りに移らなければいいのだけれど…山城…その顔は貴方も同じ事を考えているのね…
ああ、不幸だわ、本当ならば今頃は読書に勤しむ扶桑姉様をゆっくり眺める時間のはずなのに…
ああ、でも海を進む姉様も凛々しくて素敵…もう演習なんてどうでもいいわ…姉様さえいればそれで…
～～～リンガ泊地、執務室～～～
曙「クソ提督、相手方の演習艦隊が待機所に着いたわ、そろそろスタートするわよ」
新城「そろそろか…相手の編成記録を見るに相当だな…」
曙「ええ、特に蒼龍と飛龍、この2人は半端じゃあないわ」
新城「だが扶桑姉様も相当だぞ…この火力値はエグいて」
曙「だけど…変なところでの被弾があるわね…」
新城「不幸ってか？そんな冗談あるわけないだろ」
曙「っさいわね！ほら、もう始まってる、見に行くわよ」
新城「さて…どうなってるんだか」
パンッ
～～～リンガ泊地側～～～
加賀「赤城さん、空砲が鳴ったわ、始めましょう」
赤城「ええ、それに今回も油断は禁物のようですね」
加賀「ええ、蒼龍と飛龍がいますからね」
赤城「第一次航空隊、全機発艦！」バヒュンッ
加賀「うちの子達からだわ、向こうは…！正規空母2隻に加え航空戦艦が2隻!?」
赤城「流石に不味いですね…数の上では航空戦力は向こうが上…な

らば質で勝負するしか無さそうね」
加賀「望む所です」
赤城「入電！第一次航空隊、敵航空戦力突破６割強！航空優勢！」
加賀「敵航空戦力の削減に成功、航空戦艦２隻を中破、正規空母１隻を小破、重巡は被害軽微…やりました」
加賀「対空電探に感有り！来るわ！」
赤城「直掩機！急いで！」
～～～トラック宿地艦隊～～～
蒼龍「ねぇ飛龍、今日は加賀さん達が相手だね」
飛龍「そうね…でも楽しみね」
蒼龍「え～？私はすっごい緊張してお腹痛いけど」
飛龍「強くなった…成長して私達を見てもらえるいい機会じゃない？」
蒼龍「うん、いいね、そう考えようかな！」
飛龍「じゃあ行くよ蒼龍」
蒼龍「うん、飛龍」
飛＆蒼「「全航空隊、全稼働機、発艦はじめ！」
飛龍「自軍航空隊、敵航空隊と接触！…７割落とされてる…」
蒼龍「向こうは６割残ってるかぁ、でも加賀さんだけにしては航空機多くなかった？」
飛龍「え…やっやめてよ蒼龍」
蒼龍「でもこの泊地には赤城さんもいるよ？」
扶桑「２人とも、喋るのはそこまでよ、来るわ！」
蒼龍「直掩機は…間に合わない！」
接触、リンガ泊地側航空隊による攻撃が成功する、明石謹製のクラスター魚雷は想像以上の威力を発揮し、その威力は明確に現れた
扶桑「きゃあ！何よこれ…ただの魚雷じゃないわ…船底の装甲ぬかれかけてる…１発でこれは…」
山城「扶桑姉様も同じですか…爆撃の方は変な液体が入ってただけで威力は全然ないですが…」
扶桑「気を引き締めて行きましょう、どうやら本気でかからねばな

らなそうです」
飛龍「被害報告！蒼龍小破、扶桑、山城中破、最上、三隈は被害軽微！」
蒼龍「相手は…そんな！」
最上「蒼龍さん？」
蒼龍「戦艦１隻小破、以上」
扶桑「圧倒的ね…」
三隈「索敵機より入電！敵艦隊との距離３０００！」
まだ目には見えないが万全の状態で進軍してくる艦隊がいる、既に戦力を４割程削られた艦隊にはそれだけで脅威であり、一種の諦めをも生む
蒼龍「やっぱりかぁ…赤城さんいるし…」
飛龍「じゃあ今の加賀さん…」
蒼＆飛「「無敵モードじゃん…」」
そんな中扶桑は旗艦として仲間に冷静に指示を下す
扶桑「全艦単縦陣にて接敵！距離１２００より砲撃はじめ！」
一同「「はい！」」
～～～リンガ泊地艦隊～～～
加賀「被害は陸奥さんの小破だけね」
赤城「上々ね」
長門「２人ともよくやってくれた！砲撃戦は我らに任せておけ！」
足柄「戦場が…勝利が私を呼んでいるわ！」
長門「しかしこの砲弾は大丈夫なんだろうな…」
足柄「明石さんが言うには特殊製法で艦娘本体への害は無く偽装だけを溶かすそうです、高速で」
那智（それってほぼ解体じゃぁ…）
～～～トラック宿地艦隊～～～
扶桑「変ね…さっきから動作不良が起きてる…特に電探系が酷いわね」
山城「扶桑…姉様、」
扶桑「山城!?どうしたの!?貴女外装殆ど無くなってるじゃない！」

山城「さっきの変な液体を浴びた所から溶けて…」
飛龍「私の飛行甲板もエレベーターの調子が変だわ」
蒼龍「私は通信系の装備が」
扶桑「最上さんと三隈さんは？」
最上「僕は平気だけど…三隈がね…」
三隈「もう…ダメですわ…」
最上「三隈!?」
扶桑「見た感じ大破まで行ってるわね…貴女は山城と共に戦線離脱、港に戻ってなさい」
山城「扶桑姉様！それでは艦隊に影響が…」
扶桑「気にしないで山城、貴女の分まで働くわ…貴女の姉なのよ？」
山城「すみません扶桑姉様、お言葉に甘えさせて頂きます…」
三隈「最上…後は頼みますわ…」
最上「勿論だよ、心配しないでよ」
扶桑（戦況は絶望的…航空母艦として…いや、主力としての火力も期待できない…こんな状況でどうしろと…！）
～～～リンガ泊地艦隊～～～
赤城「敵艦隊は戦列から2隻抜けますね、三隈さんと山城さんです…旗艦は堕ちませんか…」
加賀「敵艦隊の火力を大幅に削げたわ、それだけで十分、」
両者距離１２００に達する、するとリンガ泊地側に水柱が上がる
長門「むぅ…敵は既に気付いていたか…もっと肉薄したかったが仕方あるまい！全艦、砲撃用意！距離１２００！全砲門一斉射！」
長門が指示を下した直後、複数の砲撃音が一塊の轟音となって海原に響く
～～～トラック宿地艦隊～～～
飛龍「！砲撃成功！…されど夾叉！」
扶桑「流石に遠すぎたかしら…」
最上「敵艦隊砲撃！」
扶桑「全体回避行動！」
先程とは逆に扶桑艦隊側に水柱が立つ、

扶桑「被害報告！」
最上「全弾夾叉！」
扶桑「全員無事ね、艦隊全速前進！敵艦隊砲撃しながら距離を０まで詰めます、全艦突撃用意！」
扶桑は大きく息を吸い声を張って命令を下した、この判断が正しいと自分に言い聞かせるためにも…
扶桑「突撃開始！」
その瞬間、トラック宿地艦隊の意思を理解したようにリンガ泊地艦隊も速度を上げ互いに砲撃をしながら距離を詰める、そしてついに距離は０になる
会敵
長門「赤城、加賀は後方から制空権確保に徹しろ！折を見て爆撃も忘れるな！」
赤城「はい」
加賀「了解」
長門「陸奥、足柄、那智の３艦はこの長門に続け！」
その瞬間、両艦隊の交戦が本格化した、砲弾が飛び交い、艦載機は入り乱れる、まるで本物の戦闘の如く

提督業の艦隊演習ー2

距離を詰めた両艦隊、扶桑と長門はそれぞれ距離を詰め、肉薄する、
扶桑が砲撃をしようとした、その瞬間、
長門「でぇりゃあああああああああ！」
長門が扶桑の腹に拳を叩きつけた、
〜〜〜モニター室〜〜〜

新城（。д。）
曙（。д。）

〜〜〜演習海域〜〜〜
扶桑が衝撃で大きくのけ反った、
扶桑（肉弾戦!?にしてもなにこの威力…本当に女性なの!?）
長門がそれを追撃する、低く腰を構え、今度は扶桑の主砲目掛けて主砲の一撃を喰らわす
扶桑は強い衝撃を感じると共に悟った自らの敗北を
長門の絶好の角度から放たれた一撃は見事に扶桑の主砲を貫き一切の反撃を不可能とした
扶桑の大破、それを見た最上は動きを止めた、自軍の旗艦の大破、それが意味する所は敗北、
瞬時にそれを理解した最上は動きを止めた、その隙を見逃す筈もなく、陸奥、足柄、那智の砲撃が最上の薄い胸部装甲を襲う
胸に衝撃を感じたときには既に手遅れで、最上は大きく後ろに飛ばされ、何度も水面に叩きつけられた、
まともに戦艦の砲撃を受けたその華奢な身体は戦闘の続行が不可能であった、即ち最上の大破を意味する
残りの2隻、蒼龍と飛龍はこの現状を見て目を疑った、もはや機動部隊とは言えない程に壊滅させられた艦隊には最早2人を守る者は

いないさらにその事実に追い討ちをかけるように大量のリンガ泊地側の艦載機が向かって来る
蒼龍「飛龍！残りの矢は!?」
飛龍「もう無いわよ！蒼龍は!?」
蒼龍「私ももう無いわ、加賀さん達凄いなぁ…」
飛龍「今回も負けだなぁ、蒼龍、撤退信号打つよ？」
蒼龍「うん、もう出来る事は何も無い、潔く負けを認めるよ」
演習開始から４０分が経過、飛龍からの撤退信号を受け演習は終了、
演習に勝利したのはリンガ泊地艦隊であった、
意外にも明石謹製装備はその実用性を確認され、両装備共に泊地内での本格的な量産が決定される
演習艦隊の帰港、先に帰って来たトラック宿地艦隊をトラック宿地提督と山城、三隈が出迎える
新城「あんなのいたか？」
曙「普通いるわよ、自軍の艦隊の演習なんだから提督位、それと今連絡きたんだけどー」
新城「本当か？」
曙「ええ、あそこにいる憲兵を通してね」
迎えに来た山城、三隈の顔を見た扶桑達は顔を青ざめた、
扶桑と三隈の身体に暴力を受けた跡があったからだ、
扶桑「提督！山城と三隈に一体何を…！」
トラック提督「あぁ!?決まってんだろ！無様に負けた雑魚にお仕置きしてんだよ！安心しろ？後でお前らも同じ目に合わせてやるからよぉ」
扶桑「どうか…どうか罰は私だけにお与え下さい、私の作戦ミスです、他の皆には責任はありません」
扶桑は深く頭を下げた、砲撃を受けた身体に鋭い痛みが走る、だがそんな事は気にしないとばかりに頭を下げる
トラック提督「…わかった、なら今夜俺の部屋に来い、それで許してやる」

扶桑「か…畏まりました…」
扶桑は提督の言葉の意味する所を理解した、それでも、怒りの矛先が仲間に向かうのを避けるために従う、
トラック提督「いい子だ、ちゃんと今夜来いよ？…じゃねぇと他のやつに頼むしかないｋー」
威の言葉を吐こうとしたトラック提督、その身体が吹っ飛んだ、新城が顔面を力の限りの威力で殴ったのだ
トラック提督「痛ぇなぁおい！何しやがんだテメェ！」
曙「ちょっとアンタ！」
曙が慌てて駆け寄る
新城「ちょっとぼのたんは下がっててくれ…」
強い怒気を含んで静かにそう言い放った、これにはさしもの曙も引き下がる
曙「わ、わかったわ」
トラック提督「何しやがんだって聞いてんだよ！」
新城「殴った」
トラック提督「んな事は分かってんだよ！」
トラック提督が新城につかみかかろうとした時、１人の憲兵がトラック提督の腕を掴んだ
憲兵「貴様にたった今辞令が下った、元帥の名において貴様を解任する、とな」
トラック提督「はぁ？なんだよいきなり、解任？ありえねぇよ！」
新城「今日の演習は全て元帥にも見られていたらしくてな、俺もさっき曙に言われるまで気が付かなかった、何もしなくていい所を遂我慢出来なくて殴っちまった。」
トラック提督「本当かよ！でもなんで解任なんだよ！おかしいだろ！これ位のことはみんなやってるだろうが！」
憲兵「それ以上無駄な口答えをすると元帥直々に軍法会議をお開きに成られるそうだ」
トラック提督「じゃあこいつらはどうすんだよ！こいつらの指揮権は俺にあんだぞ！」

憲兵「それも下知が来ている、現時点を持って、トラック宿地を閉鎖、全艦娘、全職員はリンガ泊地に転居、だそうだ」
トラック提督「おい待てよ！そんな事ー」
憲兵「何している！おい、お前らも手伝え！さっさとこいつを大本営に輸送するぞ！」
憲兵ｓ「「了解！」」ズルズル　　オイハナセヨ！オイ！
ウッセエ！トットトアルケ！
新城は元トラック宿地艦隊に歩み寄る
新城「お前たち話は聞いていたな？」
トラック艦隊一同「はい！」
新城「今日からお前らはここの所属になる、既にトラック宿地側にも連絡は行っている筈だ、明日にも続々と艦娘が合流するだろう、お前らはここにいろ、補給とか色々あんだろ？それに、施設内を確認する時間も欲しいだろうからな」
扶桑「いいん、ですか？」
新城「ったりまえだろ、」
山城「まさか扶桑姉様を狙って!?」チャキッ
新城「んな訳ないだろ！てかお前副砲向けんな！危ないだろ！」
ギャーギャー
そこにリンガ泊地艦隊が帰投する
長門「艦隊が帰投したぞ！」
新城「お、お疲れ～、長門」
長門「なんだ提督？」
新城「演習で肉弾戦はないわ…」
長門「っな!?」
陸奥「やっぱり言われてる～」
新城「他のもお疲れ様！ついた順から補給入っていいぞ」
一同「「了解」」ゾロゾロ
新城「あ、そうそう、トラック宿地の艦娘達がうちにまるっと移籍するからそのつもりで」

一同「「　　ん？　　」」
陸奥（今なんか重要なこと言った気が…）
赤城（そんな晩ご飯の献立みたいにサラッと言われても…今夜の献立なんでしたっけ）
加賀（　　）思考停止
長門（補給したら雪風と風呂でも入るか……ん？）
足柄（聞き間違いかしら）
那智（今回の提督はまともな人だと思っていたが…やっぱりどこか悪いのか…）
それぞれが一瞬逡巡した後
一同「「はあああああ!?」」
夕暮れ時の閑静な港に叫び声が木霊した

提督業のお引越し

トラック宿地艦隊との演習が終了し、夕食の時間に、それは発表された、その内容は余りにも衝撃的で、リンガ泊地に激震を震わせた、ある者は自分の耳を疑い、またある者は新城の正気を疑った

天龍「おいおい！本気かよ提督！」

新城「当たり前だ」

吹雪「でも…他の妹達にも会えるかな」

白雪「わかんないけど…多分会えるんじゃない？」

新城「お前の妹って他にも居たのか？」

深雪「あったりまえだよ！結構人数いたんだぜ」

那智「提督…頭の検査をしてきた方がいいんじゃないか？」

足柄「気持ちはわかるけどそれは言い過ぎね」

陸奥「長門はどう思う？」

長門「どう、とは」

陸奥「今回の合併の話」

長門「まぁ…上の意見なら従わざるを得まい」

陸奥「長門がまともな事言った!?」

長門「おい陸奥！それはどう言う驚きだ!?」

新城「それと今から今居る移籍組の自己紹介があるから聞いてやってくれ」

一同「！」

扶桑「えっと…今日からお世話になります扶桑と申します…妹の山城共々宜しくお願いします」ペコ

最上「僕は最上って言うんだ、宜しくお願いしたいな」ペコ

山城「扶桑型戦艦、妹の方、山城です、宜しくお願いします」ペコ

三隈「私は三隈と申します、宜しくお願いしますね」ペコ

蒼龍「二航戦蒼龍です！宜しくお願いします！」ペコ

飛竜「同じく二航戦飛竜です！宜しくお願いします」ペコ

新城「みんな聞いてたなー、宜しく頼むぞ～、後で寮に案内してやってくれ、入居方式はみんなと一緒でな」

扶桑「入居方式？」
新城「ああ、ここの泊地は艦種別じゃなくて艦隊別で部屋割りをしてるんだ、希望があれば変更を加えたりもする」
最上「じゃあ扶桑さんと一緒ですね！」
扶桑「そうね」ニコッ
山城「グヌヌヌヌ、姉様との間に割り込んでくるなんて…！」
三隈「三隈も居ますわ！」
山城「チッ！」
三隈「ヒィイ！」
扶桑「山城！顔が怖いわよ！提督も見てるのに…」
山城「はい！気をつけます！」
蒼&飛「「あの～、提督」」
新城「何かな？」
蒼龍「出来れば私達加賀さん達と同じ部屋に入りたいのですが」
飛竜「お願い出来ませんでしょうか」
新城「それは構わないが…加賀達の部屋の奴らにも聞かないとな、ちょっと待っててくれ」タッタッタッタ
～～～5分後～～～
新城「全員構わないそうだ、良かったな！」
蒼&飛「ありがとうございます！」
加賀「まさか貴方達まで来てくれるとはね嬉しい限りだわ」
赤城「歓迎します♪」
浜風「蒼龍さん！飛竜さん！宜しくお願いします！」ペコ
舞風「宜しくお願いします！」ペコ
野分「宜しく頼みます！」ペコ
新城「お前ら、さすがに7人は手狭だろ？新しい部屋用意するんだがそれまでは分かれて住んでもらってもいいか？」
一同「「はい！ありがとうございます！」」
新城「じゃあ俺は執務室に戻るから、何かあったら教えてくれ」
～～～執務室～～～
新城「ぼのたん、すまないが書類整理手伝ってくれないか？」

曙「っん…」ポー
新城「どうした？ぼのたん様子がー」
曙バタン
新城「ぼのたん!?おい！大丈夫か!?うお！すっげえ熱！」
新城の大声を聞いて艦娘が駆けつける
長門「どうした提督よ、そんな大声を出しー」
新城「曙がぶっ倒れた！どうすればいい!?」
長門「そっそう言う時は明石を呼べばいいだろう、艦娘の病気に詳しいのはあいつだけだしな」
新城「そうか！ありがとう長門、悪いが読んでくる間ぼのたんの事見ててくれないか？」
長門「了解した」
新城「じゃ！」バタン
長門（いつもの気の強い顔も可愛いが熱にうなされる顔も中々、役得役得）
～～～10分後～～～
新城「すまない明石！こっちだ」
明石「執務室の場所くらい分かりますよ～、」
新城「曙！無事か！」パタン
長門「おお！提督か！さっきから曙の様子がおかしくてな、熱に魘されながら何かを呟いててな」
曙「…メ…ズメ」
新城「？」
曙「シ…メ…ズ…」
明石「提督！長門さん！離れて！」
曙「シズメ、シズメ！」
曙がそう声を発した瞬間、曙は大きく目を見開き立ち上がった、だが、その目は紅く染まり、薄紫の美しい艶やかな髪は純白に、柔らかい肌色を持っていた肌は、これも又純白に染まった、美しくもどこか禍々しい、そんな存在になっていた、もう自分たちの知る曙では無い、そう感じた瞬間、曙だった者は声を発した

???「コ　コハ…？」
新城「…リンガ泊地、お前ふざけてるのか？それともタチの悪い悪戯か？曙」
???「ワタシ…ハ、アケボノ？デハナイ」
新城「何言ってんだ！お前は曙だろ！」
???「ワタシハ…ヲ、キュウ」
長門「っな!?」
???「セイキクウボヲキュウ、ソレガ…ワタシニアタエラレタナマエ」
明石「あちゃー、失敗かー」ガッ
新城「おい明石？失敗とは…？」ニコォ
長門ジトー
明石「ナッナンデモナイデスヨー！」
新城「早く観念した方が身の為だぞ」ゴゴゴゴゴ
明石「ヒ！わっ分かりました！話しますからぁ…」ヘナヘナ
明石が説明した事は要約すると
泊地近くで燃料切れのヲ級を龍田達遠征隊が確保、明石がそれを引き取り深海の技術を盗もうと麻酔を打ち偽装解体した所ヲ級の意識が飛んだ、どうしたものかと悩んでいたら提督が来て曙の異常を訴えた、
明石「なので恐らく曙ちゃんの身体にヲ級の魂が憑依している状態かと」
新城「姿まで変わるのか？」
明石「さぁ…前例がないのでなんとも…多分同じ身体に2つの魂の姿は具現化出来ない、その為より強い魂が顕現したのでは？」
新城「…どうすれば治る」
明石「さぁ…お約束通り1度意識飛ばしますか？」
新城「おい！そんな事でいいのかよ！」
明石「だって前例が無いし分かんないし…」
新城「ったくしゃあねぇ、長門、お前は明石と一緒にヲ級本体の所に行ってろ、もし意識が戻っても殺すな、拘束に留めろ、」
長門「了解した…だが提督はどうするのだ？」

新城「艤装が無いんだろ？じゃあ普通の人間だろ」
明石「確かにそうですけど…」
長門「曙を傷付けたら何にもならんぞ！」
新城「軽く首を打撲して貰うだけだ、さぁ、行け！」
長＆明「了解！」
新城「さぁ、行くぞヲ級！」
～～～5分後～～～
新城「くそ…不味いな…普通に強い」
ヲ級「ソンナモノカ？ヨワイ、ヨワスギルゾ！」
～～～さらに5分後～～～
新城「そろそろ着いた頃か…どれ、本気を出すか…」
ヲ級「!?」
新城「あ、あんな所にボーキサイトの山が！」キョロッ
ヲ級「エ!?ドコドコ!?」キョロキョロ
新城「もらったぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」ドスッ
ヲ級「ヲ…ヲミゴト…」ガクッ　　パァァァァァ
その瞬間、ヲ級の意識が消えると同時に身体が曙の特徴を取り戻した、紅い瞳は薄紫に、純白の髪も瞳と同じ薄紫に、純白の美しい肌は薄い肌色の温かみのある色に、新城は曙を抱き抱えると心配そうに顔を覗き込んだ
新城「おい！大丈夫か曙！」
曙は呼びかけに応える様にその双眸を開いた、彼女は薄桃色の小さな唇を開き
曙「何人の顔覗き込んでんのよこの変態クソ提督！」ゴンッ
新城を精一杯罵倒した

提督業の鹵獲艦

新城とヲ級（曙？）の1戦、それが終わると同時に工廠に安置されていたヲ級本体が目を覚ます
ヲ級「ヲ…」
長門「アナコンダバスタァァァァァァァァァァァ！」
ヲ級「ヲフゥ!?」ドサッ
明石「ちょ！何やってるんですか長門さん！」
長門「こいつが何か仕出かさないうちに眠ってもらおうとな」
明石「にしても総計過ぎますよ！」
長門「むぅ…気をつけよう」
新城「お、あいつは目を覚ましたか？」
明石「はい、ですが長門さんがアナコンダバスターをかけて又眠らせました」
長門「わっ私は悪くないぞ！」
新城「長門…」
長門「なっなんだ」
新城「お前そういうところが悪い所だぞ」
長門「…気をつけよう」シュン
新城「頼んだぞ、頼りにしてるんだから」
長門「そうか…私は…」パァァァァァァァ
新城「長門？」
長門「いや、何でもない、ビッグセブンの力、侮るなよ！」
新城「おっおう」
明石「ちょっと2人とも！カップルごっこしてないでこっち来てくださいよ！」
新城「!?」
長門「な!?」カァァァ
明石「この…人？え？なんて言えばいいですかね」
新城「取り敢えず乙とでも呼んどけ」
長門「…ッ…」プルプル

明石「…これは酷い…w」プルプル
新城「え？なんか俺今変なこと言ったか？」
明石「いえ…なんか…放って置いたら娘に花子なんて名付けそうだなぁ、と」
新城「俺そんなか!?」
明石「まぁそれはさて置きこの子を運び出しちゃいましょう、明日の朝には大本営に報告ですね」
新城「あ、それなんだけど報告はしない方向性でいく」
明石「え!?でもそんなことしたら造反行為になりませんか？」
長門「それなりに筋を通さないといけないぞ」
新城「ああ、だから皆んなには黙ってて貰う、」
明石「皆んなは黙っててくれると思いますが…憲兵さん達は？」
新城「あいつらは冷徹な様に見えるが情に暑い奴らばかりでな、基本的に上から何か言われなければ害は起こさないさ」
長門「しかし…」
新城「まぁ俺に任せろ、いい案があるただそれを成功させるには…こいつの意思が必要だけどな」
明石「深海棲艦の意思…」
新城「こいつは朝になるまで俺の私室に寝かせておく」
長門「提督！そんな事して何かあったら！」
新城「覚悟の上だ、お前達の気にする所じゃない、ここからは…俺の戦場だ」
明石「提督、私に何か出来ることはありませんか？」
新城「…では一つ頼む、それはー」
〜〜〜朝〜〜〜
次の朝、講堂に全職員、全憲兵、全艦娘が集められた、
新城「皆んな集まってくれたな、今日は…みんなに重大な発表がある」
ザワザワ
長門「…提督…」
明石「本気なんですか…？」

新城「昨夜、空母ヲ級を鹵獲した」
ドヨドヨ
新城「既に艤装は解体してある、そのヲ級の処遇についてだ」
天龍「提督！そいつをどうするつもりだ？…」
新城「俺としてはこの鎮守府内のみに留め置くつもりだ」
憲兵Ａ「おい新城！正気か貴様！それは大本営…引いては国に対する反逆行為とみなされても文句は言えんぞ！」
新城「ヲ級！来てくれ、お前はこれからどうしたいか、聞かせてくれ」
ヲ級「…」
イツカラダロウ、ワタシガコノウミニ存在シタノハ…キガツケバ…1人ダッタ…還ラナクテハナラナイ場所、深イ、深イ海ノ底…冷タク…暗イ…一切ノ光ノ射サナイ…暗イ、冷タイ場所、
イヤダ…イヤダ…彼処ニハ行キタクナイ…モウ…シズミタク…ない…ミんな…ドこ、いくノ？ワタしは…ココにいる…のに…皆んな…なんでわたしヲ置いて…いくの…？いやだ…いやだ…
ヲ級「もう…1人は…イヤッ！」ボロボロ
天龍「!?」
ヲ級「いやァ！なんで…！何でミんなわタしを打ツ、の？又、ミんなと一緒に…海を駆けたい…ダけなのに…天龍…さン、龍田…さん…私…皆んナと…皆んなと一緒ニイタイ…よ」ポロポロ
天龍「お前…まさか!?…艦娘…だったのか!?」
なんなんだ…？オレ達が戦ったのは…何の為だったんだ？仲間を守る為…その為に戦い、多くの仲間が沈んで、多くの敵を沈めてきた…そういえば何故敵を沈めたら艦娘が浮かび上がってくることがあるんだ？…何故何も無い海域からは出ない…じゃあ…俺は…俺達は…仲間を…この手で…
憲兵Ａ「…だとなれば…そこに居るのは…仲間…か？」
憲兵Ｂ「だとしか考えられん…だが…」
憲兵Ｃ「提督！そいつをこの泊地で保護する為に…材料は揃ってるのか？」

新城「ああ、明石に解体した艤装を調べて貰った、深海艦載機は独特な成分を目から出すだろう?それの発光色によって機種を見分けている訳だが、その成分が一切発見されなかった」
憲兵B「何!?つまり」
新城「そう、こいつは生まれてまだ1度も艦載機を発生させて無い」
新城は大きく息を吸い込み、講堂の中にいる全ての者に語りかけた
新城「お前ら!まだこいつは仲間かどうかは判らない!だが」
ヲ級「ー?」
新城「少なくとも敵でも無い!さぁ!お前らはこれをどう受け止め、どう接する!?俺は、こいつを歓迎する!」
憲兵A「私は…私も歓迎しよう、今日から貴様は…この泊地の仲間だ…」
?
憲兵B「ああ、すまなかった、お前さんを疑っちまった、一生の恥だ、私を…私を許してくれはしないか?」
みんな
吹雪「えっと…なんて言っていいか判らないけど…その…宜しくお願いします!」ペコッ
私は…ここにいて…いいの?
天龍「すまねぇ、オレは多くの仲間を失っちまった、正直お前が誰だかわかんねぇ、だけど…お前はお前として、もう1度一緒にいてくれねぇか?この通りだ!」ガバッ
加賀「貴方が誰だかは判らない、だけど…敵だとは思えないわ」
この瞬間、乙は受け入れられた、形式上の仲間ではなく、本当の意味の仲間になった瞬間だった

提督業の事後処理

乙が泊地に受け入れられたその日、乙は新たな名前を得た、新城の命名だ、暁型5番艦明星、たまたま通りかかった暁を見て発想がついたらしい、愛刀虎徹（新城命名）を持ち、深海艤装の代わりに暁とお揃いの帽子を被ったその姿は正に人だった

暁「えっと…貴女、新しい妹になる…の？」

明星「い、ヤ…？」

暁「そんな事ないわ！勿論大歓迎よ！今他の妹達呼んでくるから！ちょっと待っててね！」

新城「見た目は完全に逆だけどな」

暁「、もう！ぷんすこ！」

新城「あはは、そう怒るなって」

暁「一人前のレディーとして扱ってよね！」

新城「わかったわかった」ナデナデ

暁「頭ナデナデしないでよ！もう！」タタタ

新城「あいつ器用だな…後ろ向きながら走るって…」

明星「…」ジー

新城「ん？」

那覇刀「…」ジー

新城「どうした？」

那覇刀「ワタしも…撫デて…」

新城「いいのか？」

明星「…」コクン

新城「じゃあ失礼して」ナデナデ

明星「フぁ…」カァァァ

新城「ん？」

明星「何でモナい…1ツ…聞いて…イイか？」

新城「何なりと」

明星「何故…ワタしヲたすケてくれた…？ワたシ達は敵だった筈…ナの二ナンで」

新城「最初は大本営に通達するつもりだった」
明星「エ…」
新城「だけど、俺がボーキサイトと言ったら反応しただろ？」
明星「…」カァァァ
新城「それを見てお前は違うな、て」
明星「ワタし…ね？」
新城「ああ、」
明星「少しだケ…記憶が、あルの」
新城「!?」
明星「ぼやけてる視界の中…必死に天龍さんがワタしを砲撃カラ庇ってくれた…そノ記憶ダケ…」
新城「そうか…」
明星「キガツケバ…海ノ上に立ってた…僅カな記憶、ヲ頼りに戻ろうとしタ…ワタしの居場所、天龍さんが居る場所ニ…」
新城「お前はそれから龍田達に鹵獲されて今に至る、てわけか」
明星「…」コクン
新城「経緯はどうあれお前はもうここの仲間だ、残念ながら全任のお陰で沈んだ艦娘が多すぎて特定は難しい、だが、天龍も言った通りお前はお前だ、その記憶を大切に持って、これからここで新しい記憶を作っていけばいいさ」
明星「…」コクン
暁「みんな～、こっちこっち～！」
響「自分より大きな人を妹に持つなんて、不思議な気持ちだね、でも歓迎するよ、私は暁型2番艦の響、こっちは雷、こっちは電さ、宜しく頼むよ」
電「宜しくなのです！」ペコッ
雷「何か困った事があったら私に頼ってくれてもいいのよ！」フンスッ
明星「ヨろ…しくお願イ、シマす」ペコッ
新城「良かったな、今夜別泊地合流組とお前の歓迎会やるから、絶対来いよ」

明星「イい…の？」
暁「もちろんよ！なんてったって、貴女はもう仲間なんだから！」
電「なのです！」
響「私達はもう仲間だと思っているけど、貴女も仲間と思ってくれたら嬉しいな」
雷「もちろん仲間なんだから当然よ！」
明星「ありガ、とウ…お姉チャン…」
暁「さぁ、行くわよ！建物の中案内してあげる！」
明星「ウん…！」
～～～暁姉妹立ち去る～～～
天龍「提督…一つ相談しても良いか？」
新城「珍しいな、なんだ？言ってみろ」
天龍「オレは…オレ達は何と戦ってるんだ？」
新城「お前も気付いたか…」
天龍「ああ、仲間を守る為、仇を取る為に戦って、沈んで、沈めて、沈められて、てな具合に繰り返してきたが…仲間を殺して来たって事だよな」
新城「違う」
天龍「違わない！オレは、あいつらを…この手で…」
新城「俺はこれを呪縛のように思う、だが、この呪縛から抜け出す方法が1つだけある」
天龍「？」
新城「何方かが滅びる事だ」
天龍「っな!?」
新城「なぁ、深海棲艦を倒すと艦娘が現れる事があるだろ？」
天龍「ああ、」
新城「要するにそれは呪縛から解放された、て事じゃないのか？」
天龍「つまり、お前が言う方法って」
新城「ああ、この先だれも沈めずにこの戦いを終わらせる」
天龍「出来んのかよそんな事！」
新城「出来るさ、俺と、お前らならな」

天龍「…信じて良いんだな？」
新城「ああ、」
天龍「なら、オレはお前を信じる、」
新城「おう、どんと構えとけ」
～～～その夜～～～
その日着々と到着したトラック艦隊と明星の歓迎会が執り行われた、トラック艦隊も初めは明星を見て驚いていたが事情を聞くと次第に打ち解けていったようで
？「へ～、明星って言うんだ！あなたみたいな深海棲艦他にもいるの？」
？「こら鈴谷！そう言う質問はやめなさい！」
明星「気二しなイデ…ワタシミタイのは居なかッタ」
鈴谷「ふ～ん、じゃあ明星は何で泊地の近くに？」
明星「…ワカ、らナイ、眩しくテ、アタたかい方二イッタらタドりついた」
？「暖かい？」
明星「…」コクン
？「…貴女意外とロマンチストなのね、仲良くできそうですわ」
鈴谷「私は鈴谷、宜しくね～、こっちは熊野ね、」
明星「すずヤ…クまノ…」
熊野「宜しく頼みますわ」
明石「その節はどうも御迷惑を…」
明星「キニしナいで…」フリフリ
明石「うううう…優しすぎてもう何とお詫びして良いかわかりません…」
加賀「貴女、艤装は使えるかしら」
明星「ギ…ソウ？」コクン
加賀「艦載機を発艦させる機械の事よ」
明星「…多分デきる」
加賀「じゃあ、私の艤装を使って飛ばしてみて、そうね、中庭に向けて」

明星「コ…う？」
加賀「そう、初めてにしては上手ね、そこから指を離してみー」
バヒュンッ　　ババババババババ
明星「こんな感ジ？」
加賀「そっそうね、ええ、上手だわ」
明石「え？対応できるんですか…ふむ…」
加賀「明石さん？」
明石「いえ、少し考え事を」
歓迎会は夜遅くまで続いた、暗くなった部屋で赤く光った明星の目をみて幽霊と勘違いした者以外は平和に終わった

提督業の矛盾点

歓迎会の次の日、長門と加賀が執務室の扉を叩いた、
長＆加「失礼する（わ）」
新城「お、どうした、何か用か？」
長門「ああ、明星について…な」
新城「ん？あいつをこの泊地で保護するというのは決定事項だが」
長門「いや、それに意見があるわけじゃない、別な物だ」
新城「と、いうと？」
加賀「明星は昨夜私の艤装で見事艦載機を発艦させて見せました、それを見た明石さんが別な艦種の装備でも可能か、という実験を行ったのですが…」
新城「が？」
加賀「見事に全艦種の装備を使いこなしてるんです」
新城「器用だなあ」
長門「それで済めば良いのだがな、明石はある仮説に辿りついてな、」
新城「どういう内容だ？」
長門「あるだろう、どの艦種にも該当せず、だがどの艦種の攻撃をも発動させてしまう深海棲艦が…」
新城「…まさか明星を…姫や鬼の類とでもいうつもりか？」
加賀「たまたま、ということもあり得ますが現段階ではこの仮説が1番可能性が大きいです」
長門「正確にはまだ成り切っておらず発展段階らしいがな、あいつが1人だけ記憶を持って深海棲艦となった意味は…そういう意味だったのかもな」
新城「ふむ…ではこうしよう、これ以上明星に艤装を触らせるな、だが、あいつには他の事をしてもらう」
加賀「他の事？」
新城「厨房のお手伝いだ」
長門「はぁ!?」

加賀「何故そのような考えに至ったか聞かせていただいても？」
新城「ここは最近人数が一気に増えてきただろ？だから間宮さんも大変なんだよ、来月から当番制で間宮さんのお手伝いも入れる予定だがそれでも足りないからな」
加賀「しかし、まだ入って間もない…しかも敵性がないとはいえ深海棲艦にやらせるには問題があるのでは？」
新城「それはそうだが…他にいい案はないか？」
加賀「…ないですね」
長門「ああ、ないな…工廠整備とかも考えたが…そっちはもっと不味いな」
新城「なら決定でいいか？」
加賀「仕方ありませんね」
長門「ああ、同意する」
新城「じゃあ間宮を呼んできてくれ」
長門「了解した、だがいっその事こと敷地内にある居酒屋でも手伝いさせてみないか？」
新城「居酒屋…そういえばそんな物もあったっけな」
加賀「あそこですか…まぁいいのでは？女将も艦娘ですし」
新城「え？マジで？」
加賀「ええ、聞いてませんか？鳳翔さんですよ」
新城「ああ、あいつか、今夜辺り行ってみるかな」
長門「執務は大丈夫なのか？」
新城「終わってるさ」ドサー
長門「いつの間に…」
新城「週初めに大体の任務は終わらせるからな」
加賀「ではその時ご一緒しても？」
新城「ああ、構わんぞ、長門もどうだ？」
長門「いいのか？」
新城「勿論だ、酒は大人数で飲んだ方が旨いからな」
長門「では、相伴に預かろう」
加賀「では7時にまた来ます」

長門「そうだな、では間宮を呼んでくる」
新城「おう、頼んだぞ」
ガチャ
曙「本気なの？」
新城「うお！びっくりした…お前いたのか」
曙「いたわよ！秘書艦にくらい気付きなさいよこのクソ提督！」
新城「あんまりにも静かだったのでな、すまん」
曙「まぁいいわ、それより！厨房のお手伝いの当番制って本当!?」
新城「そうだが」
曙「ったくめんどくさいったらありゃしないわね～（まぁカレーで埋めればいいか）」
新城「因みにカレーは金曜日だけな」
曙「ッチ！」
新城「お前みたいに楽しようとする奴が出てくるからだ！、毎日カレーは勘弁だぞ」
曙「それもそうね…あ、それと今夜私もついて行って良いかしら？」
新城「良いが…居酒屋だぞ？」
曙「あそこのカレイの煮付け美味しくて癖になるのよね」
新城「親父か！」
曙「なによ！あの味を知ったらもう戻れないわ！毎日でも食べたいくらいよ」
新城「麻薬かよ！」
コンコン
曙「その位の中毒性はあるわね、それより、間宮さん来たわよ」
新城「お、すまない、どうぞー」
間宮「給料艦間宮、お呼びに預かり参上致しました！」
新城「急に呼び出して済まないな、今日は少し相談、というか頼み事があってな」
間宮「？」キョトン
新城（可愛すぎだろ…）
曙（なにニヤけてんのよこのクソ提督！）ギュゥゥ

新城（痛！お前つねるなよ！）
間宮「提督？」
新城「おう、済まない、少し、な」
間宮「？」
新城「まぁ気にしないでくれ、所で相談なんだが、お前助手を募集してただろ」
間宮「はい、人数も増えてさすがに一杯一杯ですから」
新城「それでだ、明星を助手として師事してやってくれないか」
間宮「それは構いませんが…何故いきなり？」
新城「明星も何もしないと居にくいだろうからな、仕事を与えようと思って、あと鳳翔さんの所にも頼む予定だ」
間宮「了解です、では鳳翔さんには私からも伝えておきますね」
新城「ああ、済まないな、」
間宮「では失礼しますね」
新城「おう、」
ガチャ
新城「ぼのたん、ちょっと明星を呼んできてくれ」
曙「はいはい、ったく、人使い荒いのよこのクソ提督！」
新城「それなんとかならない？」
曙「ならないわ！」バタンッ
～～～明星到着～～～
明星「えッと…明星…キまシタ」
新城「おう、お前料理に興味ないか？」
明星「！」フンスッ
新城「なら良かった、明日から間宮さんの所と鳳翔さんの居酒屋でお手伝いをしてくれないか？」
明星「ワカった…！」
新城「ならありがたい、宜しく頼んだぞ」
明星「マカせテ…！」
新城「おう、別な奴も日替わりで手伝いに入るから楽しんでやれな」
明星「ワカっタ！明日カラ頑張る！」ブンブン

新城「お前が楽しそうで良かったよ」
明星「間宮さんと鳳翔サんに挨拶シてくる…」
新城「おう、しっかりな」
バタン
新城「予想以上に楽しそうだったな」
曙「ええ、楽しそうで良かったわ」
新城「お前はあいつに怒ってないのか？」
曙「全然」
新城「そうなのか？」（意外と優しい所あるんだな…）
曙「だって明石さんのせいじゃん」
新城「…やっぱお前は悪魔だわ」
曙「はぁ!?なによ悪魔って！」
新城「あ、駆逐艦寮の再整備の打ち合わせあるんだった」ソソクサ
曙「おいコラ！逃げるなー！」バタバタ

提督業の酔っ払い

〜〜〜7時〜〜〜

新城「ほえ〜、ここが居酒屋鳳翔か」

長門「ああ、中々立派な物だろう」

新城「ああ、本格的だな」

加賀「さて、早速中にいきましょう」

新城「そうしたい所だが…おい…」

加賀「はい、なんでしょう」

新城「なんで人数増えてるんだよ！」

？「細かい事は気にしない、デース！」

？2「お姉様がいる所に比叡有りです！」

？3「金剛お姉様、比叡お姉様、声が大きいですよ」

？4「榛名、まあ良いじゃありませんか、楽しそうにしてらっしゃいますし…こんなに笑う金剛お姉様をみるのも久しぶりですし」

榛名「霧島…まぁそうですね、笑ってらっしゃるお姉様を見るのは久しぶりですものね…」

金剛「榛名？霧島？何話してるデース？」

新城「おい！お前等も何してんだ…憲兵…」

憲兵A「いっいや！これは…明星が心配で新城のどさくさに紛れて見に来たんじゃないぞ」

憲兵B「そっその通りだ、唯の定時の見回りだ！」

新城「はいはい、お前等も一緒にどうだ？」

憲兵A「良いのか？普通憲兵は嫌われてる物だが」

新城「は？お前等俺に嫌われるような事何かしたか？」

憲兵A「あ、いや、そんな事はしてないが…しかし…」

新城「なら良いだろ、行くぞ、何なら他の奴も呼んでこいよ」

憲兵B「良いのか？」

新城「ああ、酒は大人数で飲んだ方が旨いからな」

憲兵B「じゃあお言葉に甘えさせて貰う」タッタッタッタッタッタ

新城「…俺の財布は大丈夫かな…カード使えるよな？」

加賀「ええ、勿論よ」
金剛「さて、いきマショウ！」
新城「なんか仕切ってるし」
ガラガラ　ヒイフウミイ…３４名デス―
鳳翔「３４!?」
新城「お、入れるか？」
鳳翔「ええ、奥のお座敷なら…」
新城「じゃあ頼むわ」
鳳翔「畏まりました～」
ゾロゾロ
新城「おい、憲兵めちゃくちゃ増えてんな」
憲兵Ａ「ああ、美殊が呼び過ぎたようだ」
新城「美殊？」
憲兵Ａ「ああ、さっきの仲間を呼びに行った憲兵だ」
新城「ああ、あいつか、美殊て言うのな、お前は？」
憲兵Ａ「私の名は蒼鹿だ、宜しく頼む」
新城「うぃー、宜しく頼んだぞ」
金剛「テイトクー！私の名は金剛デース！以後、お見知り置きを、デース！」
新城「お前は…トラック移籍組だったよな」
金剛「知ってたデスカ？」
新城「ああ、一応全員分名簿で頭に叩き込んである」
霧島「…すごい」パリーン
榛名「霧島のメガネが割れた!?」
霧島「ふふ…流石です！でも、私も負けませんよ！」
新城「？」
榛名「お気にせず～、」
新城「お、おう」
金剛「テイトクー、ワタシが食べさせてあげるデース！」
新城「え、いや、それは…」
金剛「金剛のアーン、イヤデスカ？」ウルウル

新城「別に…いやと言うわけでは無いが…」
金剛「なら口を開けるデース！はい、アーン！」
新城「、あ、あーん」
鳳翔「金剛さん～？家は合コン会場じゃ無いんですよ？」ゴゴゴゴゴ
金剛「ｏｈ…ホウショウ…気をつけるネ」
鳳翔「提督もですよ？」
新城「は、はひ」ガクガクガク
蒼鹿「おいそこ！不純異性交遊でしょっぴくぞ！」
新城「誤解だってばー」
蒼鹿「本当か？本当は既にその毒牙に掛けてたりして」
新城「そんなわけないだろ！てかお前酔ってんな!?」
蒼鹿「何を言っている？わらしは酔ってにゃんかぁ」
新城「それを酔ってるって言うんだ！」
曙「おいコォらこのクソ提督～、仕事サボって居酒屋にゃんてくるんじゃにゃいわよ～！」
新城「ぼのたん居たのかよ！お前も酔ってるだろ、誰が飲ませた！」
隼鷹「えへへへへ～誰でしょ～」
新城「お前か！駆逐艦に酒なんて呑ませんな！」
曙「こおらぁ、提督～、そんな口聞いちゃダメでしょ～？ままがメ！してあげるからね～」
新城「へ？」
曙「ほら、膝枕してあげるからぁ、ごろん！」ゴロン
新城（力強！）
曙「もう～、提督ったらぁ、メ！だからね～!?」
新城（酔ったこいつ可愛いな…）
曙「提督～？」
新城「いやなんでも」
加賀「提督、少しお話が」
新城「なんだ？（こいつは酔ってなさそうだ）」
加賀「アンデス山脈を爆撃しようと思うのですが彗星を使って宜し

いでしょうか？」
新城「知るか馬鹿野郎！なんでアンデス山脈なんだよ！お前アンデス山脈に恨みでもあんのかよ！」
加賀「ええ、私の大切な物を奪われたわ」
新城「なんだよ（どうせロクなもんじゃないんだろ）」
加賀「サバの開き」
新城「ほらやっぱりー!!」
長門「加賀！お前酔ってるな？あんまり提督を困らせるな」
新城（ホ、こいつはまだ酔ってなさそうだ）
長門「せめて東京海底谷にしておけ」
新城「馬鹿じゃねえの!?」
長門「な!?」
霧島「提督、少し問題を出しても？」
新城「良いが…いきなりどうした？」
霧島「では始めます」
新城（聞いてねぇ）
霧島「この太平洋にある水の総量を答えてください」
新城「知るか！お前は知ってんのかよ！」
長門「7リットル！」
新城「絡むな酔っ払い！話がややこしくなる！」
霧島「は？わかる訳ないでしょうそんなの、頭大丈夫ですか？」
新城「お前が大丈夫じゃねぇだろ」
榛名「提督？大丈夫ですか？」
新城「こいつらって酔っぱらうとこうなるのな」
榛名「はい…艦娘って酔っ払うとおかしくなる娘が多くて…」
新城「そんなもんか？」
榛名「はい、ですが…お姉様達があそこまで嬉しそうにしてらっしゃるのを久しぶりに見ました」
新城「そうなのか？」
榛名「はい、トラックにいた頃は…人と呼べる扱いをされませんでしたから…」

新城「…そうか…」
榛名「なので…」
新城「？」
榛名「榛名から恩返しさせてくらひゃい！」
新城「お前もか…」
榛名「今夜は～、榛名の事～好きにして貰って良いですよ～？」
新城「寝ろ！」
榛名「は～い」ゴロン
新城「ガチで寝たぞオイ…まぁ助かった…」
ガラガラ
暁「駆逐艦暁！お呼ばれして来たわ！」
明＆間「おじゃまします～」
足柄「私も参加させて貰うわ！」
那智「那智、抜錨する！」
ガヤガヤ
新城「はぁ…もう良いか！酒持ってこいやぁぁぁぁぁ！」
南の海の夜は長い、１２月とは言え赤道近くの泊地にはまだまだ熱気が籠る、はてさて、それは気象なのか、艦娘の熱気なのか

提督業の案件電文

新城達が酒盛りしている8時頃、無人の執務室に電話の音が鳴り響く、元帥からだ、それは留守電に変わり、元帥の声が執務室に響く
「新城君、いないのかね、まぁ留守電だが良いだろう、新城君、次の対戦相手が決まった、舞鶴鎮守府だ、舞鶴鎮守府はシードだったんだが…まぁ心中お察しするよ、精々頑張りたまえ、それと、そろそろ例の五航戦姉妹がつく頃だ、あの姉妹は不誠実なのが大嫌いだからな、間違っても泊地総出で酒盛りとかはしないように、まぁそんな事をする事はないと思うが」
一方その頃新城達は
新城「お前ら呑んでるかぁぁぁぁぁあぁぁぁ!!」
曙「うぇえええええええええええい!!!」
新城「声が小さいぞおおおおお!」
一同「うぇえええええええええい!」
一方敷地内港では
？「翔鶴ねぇ、提督さん遅いね、久しぶりなのに…何かあったのかな」
翔鶴「そうねぇ…では1度上陸して人に執務室の場所を聞いてみましょう」
？「そうだね!あ、ちょうどあそこに賑わってる建物があるから彼処で話聞いてみようよ」
翔鶴「そうね、瑞鶴、では一緒にいきましょう」
瑞鶴「でもあの看板何て書いてあるんだろう…えっとぉ居酒屋…鳳翔?」
一方新城達は
長門「アナコンダバスタァァァァァァァァァ!」
新城「ぐえええええええええ!!」
明石「にしても長門さんはアナコンダバスター好きですね…」
曙「鳳翔さ～ん、お刺身盛り合わせ追加で～」
一方瑞鶴達は

瑞鶴「やっと着いたね、居酒屋鳳翔という事は鳳翔さんいるかなぁ！」
翔鶴「だと良いわね、鳳翔さんのヒラメの煮付けは最高だものね」
「ギャアアアアアアアア！」
瑞鶴「今のは提督さんの声!?」
翔鶴「ええ、間違い無いわ、早く中にいきましょう」
一方新城達は
長門「海老反りいいいいいいい!!」
新城「グハァァァァァ！」
金剛「テイトクー！次はワタシデース！」
明星「ワタしも…」
ガラッ
瑞鶴「提督さん大丈夫!?」
翔鶴「ご無事ですか!?」
新城「え？」エビゾリィ
長門「ん？」ナンダ？
加賀「ッチ！」
明星「提督…コノ人達ダれ？」
瑞鶴（？ω？、）
翔鶴（？ω？、）
新城（・ω・）
長門（＊、Д、＊）
加賀ｏ（、ω、）ｏ
榛名—（「ε：）—スヤッスヤァ
瑞鶴「提督さん大丈夫!?何やってんの!?え？ちょっと理解が追いつかないんだけど」
新城「…プロレス…」
瑞鶴「はぁ!?良い歳こいて何やってんの!?で、そちらの技掛けてた方の戦艦さんは？」
長門「この長門を知らないだと!?偉大なる連合かんｔ「知らないわよそんなの」

長門。。（。´ д、。）。。
翔鶴「でも安心しました、提督が本当に襲われてる訳じゃなくて」
新城「すまん…」
瑞鶴「で、提督さんは私達が来るのを承知でここで酒盛りしてた訳？」メラメラ
新城「いや、それは初耳なんだよ…ぼのたん？
曙「」メソラシ
新城「おーい、ぼのたーん」
曙「」メソラシ
新城「メーデーメーデー、こちら新城、応答願う」
曙「マルデハンノウガナイ、タダノシカバネノヨウダ」
新城「ドラクエじゃねぇんだよ！」
曙「だって疲れてたのよ！」
新城「なら素直にそう言えよ！」ギャーギャー
加賀「貴女達…何故ここに？」
翔鶴「私達はＭＩ作戦のために呉鎮守府から配属されました、又宜しくお願いします」ペコー
瑞鶴「うわあ、１航戦の根暗な方がいる…赤城先輩どこかな～」
加賀「あら、五航戦の礼儀のなってない貧乳ピーマンが居るわね」
瑞鶴「ちょ！言うに事欠いて貧乳ピーマンって、こんの巨乳お化け！デカけりゃ良いってもんじゃ（以下略）」
加賀「あら、貧乳という自覚はあったのね持たざる者は大変ね、余裕が無くて」
新城「加賀がこんなこと言うの初めて見た…」
赤城「まぁまぁ落ち着いて？ね？取り敢えず翔鶴さん達も何か食べましょう！、」
加賀「こんなのと一緒に食べたら台無しだわ」
瑞鶴「ならあんたが消えれば？」
加賀「…」ゴゴゴゴゴゴゴゴ
瑞鶴「…」メラメラ
翔鶴「ずっ瑞鶴、赤城先輩のお言葉に甘えていただきましょう」

瑞鶴「翔鶴ねぇがそういうなら…提督さん隣貰うわよ」
金剛「あ！そこはワタシの席デース！」
瑞鶴「あら、ごめんなさい、なら反対側に…」
加賀「そこは私の席よ」
瑞鶴「退けなさいよ年長者！」
加賀「…あらあら、そんな汚い言葉吐いちゃだめでちゅよ～、早く幼稚園に行ってらっしゃい」
瑞鶴「こんの…！」
加賀「ここは譲れません」
赤城「では私の隣に」
瑞鶴「すみません赤城先輩、お隣頂きますね」
翔鶴「では私も」
鳳翔「はい、お刺身盛り合わせ追加分です、ってあら、瑞鶴さんに翔鶴さん、お久しぶりです」
翔鶴「お久しぶりです、本日付でリンガ泊地配属になりました、又宜しくお願いします」
瑞鶴「お願いしますね！」
鳳翔「あらあら、ご丁寧に、後でヒラメの煮付けでも出しますかね」
瑞鶴「やったぁ！」
翔鶴「ありがとうございます」
瑞鶴「あら？提督さん、その後ろにいる白いロングの人は？」
新城「明星の事か？」
瑞鶴「そんな艦居たっけな…って！提督さん退いて！」
明星「ふぇ…」ビクッ
瑞鶴「なんで深海棲艦がここに…！」
翔鶴「落ち着いて翔鶴、提督のお許し無しに泊地に深海棲艦が居れる訳ないわ、きっと提督の策でしょう」
瑞鶴「そうなの？」
新城「ああ、一応上には言ってないが鹵獲艦だ、勿論この事を言ったら…」
憲兵「「私達が黙ってないわ」」

瑞鶴「わっわかったけど…後で理由だけ聞かせてね」
新城「おう、ついでに、あそこで体育座りして寝転がってるのが家の秘書艦だ、まぁ当番制に変えるけどな」
瑞鶴「へ～」
曙「クソ提督…こらぁ、抱きつくなぁ」ムニャムニャ
瑞鶴（なんて夢見てんのよ…羨ましい）
新城「俺の方も後で呉鎮守府のその後を聞かせてくれないか？」
翔鶴「はい…ですが…」
新城「やっぱり酷いのか…」
翔鶴「はい…島風ちゃんが…島風ちゃんが！」
新城「あの野郎!!!絶対許さん!!」
瑞鶴「生きてはいるけど…右足と左腕が…」
新城「入渠すれば治るだろう!?」
瑞鶴「それすらさせてもらえないのよ…駆逐艦と軽巡は…」グッ
新城「お前等…もうちょっと待ってろ、今歯向っても無駄だ、少し我慢してくれ…だが…後で必ずこの落とし前は付けさせる…！」

提督業の作戦会議

居酒屋鳳翔でどんちゃん騒ぎをした次の日、会議室では対舞鶴鎮守府戦の作戦会議が行われていた

新城「どうする？次の日相手は舞鶴鎮守府だが…状況は絶望的だ」

足柄「そうなの？」

新城「ああ、あいつらは足並み揃った高速移動と高い練度、ほぼ外れることのない砲撃が脅威すぎる」

長門「それに加えて次は夜戦だ、幾ら編成の変更が可能とはいえ流石に難しいぞ」

新城「…駆逐艦達がもうちょっと練度高ければな…」

天龍「まぁ…それは仕方ないだろ…だけど今はそれを恨むしか無いな」

瑞鶴「夜戦行動は空母には不可能だからね、深海棲艦くらいなもんよ」

新城「深海棲艦…！ダメか…上には報告してないし」

長門「むむむ…」

新城「…お前ら、実は秘策があるんだが…かなり卑怯な」

足柄「取り敢えず言ってみなさいよ」

赤城「どのような作戦ですか？」

新城「潜水艦を使ってだな…」コショコショ

長門「それは…」

瑞鶴「流石提督さん！面白い事考えるわね」

赤城「ですが当たったら不味いですよ？」

新城「大丈夫だ、夜のあいつらはほぼ無敵だ」

那智「なら任せてみるのはどうだろう？これ以上いい策はないと思うが」

加賀「ですね、」

赤城「他の皆さんも良いですか？」

一同「「はい！」」

新城「じゃあ潜水艦の子達を連れてきてくれ」

加賀「わかったわ」
～～～10分後～～～
168「潜水艦168、19、8、58、401、26、参上しました」
新城「よく来てくれてな、折を見て訪問しようと思っていたんだがいかんせん行っていいものかどうか迷ってな」
58「なんででち？」
新城「…いや…お前ら水着だから目の遣りどころに困ってな」
168「なるほど」
新城「話は本題に変わるが、次の大演習に出て欲しい」
19「いいのね…でもなんでイク達なの？」
新城「次は夜戦でな、是非お前達の力を貸して欲しい」
8「なるほど…」
401「でも戦略はどうするんですか？」
26「そこが1番重要だよね」
新城「こそこそ近付いて雷撃かまして全力逃走、これの繰り返し」
一同「「うわぁ…」」
新城「え？何か変なこと言った？」
401「何でそんなネチネチした作戦思いつくんですか…」
19「イク、ちょっと引いたのね」
8「まともな人だと思ってたのに…」
新城「酷すぎない!?だがもう1つ作戦案がある」
58「どういう作戦でち？」
新城「相手の射程に入らないように逃げ回りながら相手の射程外から魚雷を撃ち続ける」
26「変わってないよ!?」
新城「…さて、どっちを選ぶ？」
～～～潜水艦達協議中～～～
19「決まったのね！」
新城「どっちだ？」
401「射程外から魚雷を撃ち続けます！」

新城「よく言った！さぁ！これを受け取れ！」
５８「これは？」
新城「明石謹製クラスター魚雷だ」
一同（？ω？、）
新城「まぁ初めて聞いたらそうなるよな」
４０１「クラスターって事は…」
新城「ああ、効果は期待していいぞ」
２６「うちごたえありそう！」
新城「保証しよう…！さて諸君！暁の水平線に、勝利を刻むのだ！」
一同「「はい！」」
新城「じゃあまずはクラスター魚雷になれる為に演習してこい」
５８「魚雷には慣れてるでちよ？」
１６８「イムヤ達のこと舐めてるの？」
新城「違う、射程が他より長いから最大射程をためして欲しくてな」
１９「分かったのね！」
～～～２時間後～～～
新城「どうだった？」
一同「「怪物」」

提督業の夜のお仕事

午後７時、
大演習２戦目、リンガ泊地は舞鶴鎮守府との演習予定海域に到着した、
ｌｉｖｅ室
新城「うわー、今日はＴＶの中継もあるのか…」
曙「軍の支持率を上げようとするわかりやすい手口ね」
新城「機密保持とか大丈夫なのか？これ」
曙「別にいいんじゃない？上の指示だし」
新城「それもそうだな…にしても我ながら英断、今回の相手にまともに立ち向かうなんて愚の骨頂だったな」
曙「ええ、まさか駆逐艦艦隊、しかも全員練度がバカ高いわ…」
新城「駆逐艦の夜戦雷撃はなめちゃあかんよ…」
曙「あら、知ってたのね」
新城「じゃなきゃ駆逐艦だけで敵要地を奪取できんよ」
曙「でも戦艦ぶつけりゃ良かったんじゃない？あの装甲はそう簡単には抜けないわよ？」
新城「…そのそう簡単を超えてくるような相手だからな…」
曙「なら見ものね、アンタがどんな戦法で来るのか？
新城「答えは簡単だ」
そして開始時刻がやってきた、空砲が鳴らされるとー片方の艦隊から爆煙が上がった
新城「甲標的で開幕雷撃して旗艦大破、後は全速力で逃げながら雷撃」
曙「うわぁ…陰湿…」
新城「でも効果的だろ？」
〜〜〜
舞鶴艦隊は混乱していた、見えない雷撃、通常の火力を超える威力の魚雷、開幕雷撃の一つでここまで陥れられていた
睦月「なによこれ…なんなのよこれ…そんな…」

如月「睦月ちゃん…大丈夫、私達で全大破させるから！」
睦月「無理だよ…相手は潜水艦、昼間なら圧勝だけど…夜の潜水艦は…戦艦以上の脅威なんだよ!?」
卯月「睦月ちゃん、私を、私達を信じて？さぁ、手を伸ばして」
睦月「卯月ちゃん…」
弥生「うん…妹を頼るのに気を使わないでくれていい、よ、姉として、旗艦として、敵を打ちのめせ、こう命令してくれれば良いんだよ」
長月「それとも、我等のことをその程度だと思っているのか？」
三日月「何もしないで負けるのは…嫌ですから！」
睦月「じゃあ、姉として、旗艦として命じます、敵潜水艦隊を殲滅せよ！」
一同「「はいー!?」」ズドオオオオオオオン!!
轟音が響く、如月が狙われた、魚雷の射線上にいた卯月も巻き込まれる結果となり
如月「ふぅぅぅ、なんでよぉ～」
卯月「悔しいぴょん…l
三日月「長月、弥生、行きましょう、固まっててもやられるだけ、散開して攻撃をー」
三日月が声を続けようとした時、既に勝負は決していた、弥生と卯月に命中したクラスター魚雷の子弾は長月と弥生の船底にも穴を開けていた、その穴が時間差で効果を表しー
～～～
イク「やったのね！イク、大金星なのね！l
ハチ「はっちゃん、決めちゃった～！」
ゴーヤ「ゴーヤもでち！」
イムヤ「イムヤも負けてないんだから！
シオイ「ほらほら、3人とも落ち着いて？まだ1隻残ってる」
ニム「じゃあ全速力で逃げますか！」
一同「だね！、（でち！）（なのね！）」
イク「きゃー！逃げるのね～！」
～～～

三日月「何で！何で向こうの方が早いの!?船体速度は私達駆逐艦の方が早いはずなのに！」
～～～
新城「やっぱり海中の潮の速さって重要だよね」
曙「当たり前じゃない、それで速度に差が出ることもあるんだから」
～～～
イク「向こうさん躍起になって爆雷投げてるのね」
ゴーヤ「素手でなげてるでち…」
シオイ「そろそろいいんじゃない？」
ニム「そうだね！」
イムヤ「魚雷1番から4番まで装填、さぁ！戦果を上げてらっしゃい！」

午後8時、抵抗を続けていた最後の1隻が大破、轟沈判定を受け、舞鶴艦隊は敗北を喫し、雌雄を決した、その瞬間は民放を始めとして世界中のメディアに捉えられ、人々の記憶に刻まれた、
新城「お疲れさん！予定より早く終わったな」
イク「当たり前なのね！夜のイク達は無敵なのね！」
イムヤ「伊号潜水艦の力、舐めないでよね！」
曙「しっかし、夜のイクさん達が怪物だっていうのはよくわかったわね」
イク「酷い言われようなのね！」
新城「何はともあれ、これで次演習に挑める、感謝する」ペコ
イムヤ「当然なのよ！」
ハチ「提督～？次の子達に伝言頼んでもいいかしら」
新城「なんだ？」
ハチ「無様な負け方したらシュトーレンに入れるから～って」
新城「エグ！」
ハチ「頼みましたね～」
新城「はいはい、」
新城は知らなかった、次の対戦相手が呉鎮守府だという事に、気づ

く由もなかった

提督業の行方不明

舞鶴鎮守府との演習から数日が経過した、執務室には、連日問い合わせの電話が鳴り響き、泊地の前にはＴＶ各局の取材陣がおしよせていた

新城「おいどういう事だよぼのたん…」

曙「知らいわわよ！」

新城「へ？」

曙「だーかーら、知らないわよ！」

新城「電話の電源切っていいんじゃねぇか？」

曙「ダメよ…大本営からの伝達もあるもの」

新城「せめて外の取材陣だけでも追い返したいが…」

曙「それもできないわ、大本営からの通達で取材陣は追い返すな、て」

新城「そんなにイメージアップに繋げたいか…」

曙「まぁこの間の大演習の作戦と結果のせいもあるんだけどね」ジトー

新城「いやぁあの時は勝てればいいかな～、何て思ってたし」

曙「打ち合って無駄な被弾出すより一方的に攻撃して終わらせるやり方に国民の闘志に火がついたとからしいわ」

新城「どこ情報だ？」

曙「お昼のニュースよ、昔の大艦巨砲主義と変わったらしいわね」

新城「いや、正確には割合の変化だな、まだ見た目だけなら大艦巨砲主義のやつも多い、だが今は戦術がどうのとかもあるからな、そっちでの人気もあるだろうなぁ…」

曙「ネットでアンタの評価凄いことになってるわよ、そこのパソコンで見てみなさいよ」

新城「どれどれ」パコパコ

新城「なんじゃこりゃあ!?」

曙「まぁ心中お察しするわ」

新城「頭は切れるが卑怯で陰湿な人間像…て何でこんな考察出てん

だよ！」
曙「国民の目にはそう映ってるみたいね…」
新城「ったく…とんでもねぇな…ん？お前も載ってるぞ」
曙「え？」
新城「うわぁ…ファンクラブ出来てるし…この国大丈夫か…」
曙「うっさいわね！この私の魅力に世間が追いついてきたってことよ！」
新城「評価点、ツンデレ、ツンデレ、ツンデレ、ツンデレ、まな板…ッ…」プークスクス
曙「な!?」
新城「大層な魅力をお持ちですなｗ姫ｗｗｗｗ」
曙「やめなさいよ！てか何よ姫って!!」
新城「そうカッカしなさんな、ひ、め、さ、まｗｗ」
曙「こんの…！」
新城「何かな～？もっと大きな声で言ってみよう！」
曙「クソ提督が！図に載るんじゃ無いわよ！」ガンッ
新城「おオゥ：顔面は流石に殴るなよ…」
曙「いいのよ！このクソ提督が！」ゲシゲシ
新城「俺上司…」
曙「っさいわね！私は休憩するから！アンタはそこで書類まとめてなさいよ！」パタン
～～～外庭にて～～～
曙「ふぅ、ここなら人も居ないわね、ったくあのクソ提督ったら、碌な事しないんだから！」
？「…の…ん。」
曙「ん？」
？「曙…ゃん」
曙「誰か読んだかしら？」
？「曙ちゃん」
曙「きゃ！誰よアンタ！」
曙が前を後ろを振り向くといつの間に近づいたのか、見知らぬ男が

立っていた
曙「何？なんか用事でもあんの？」
？「そんなこと言わないでよ、ほら、俺達とちょっとドライブしようよ」
曙「達!?」
？「ああ、気付いて無いかもしれないがここは既に囲んでるぜ」
曙「何が目的??
？「いやぁ、ちょ～っと俺達と一緒に来て欲しいんだわ」
曙「断ったら？」
？「無駄だと思うぜ？だって、既にお前の後ろに居るし」
曙「な!?」
？「安心して、殺しはしないから、ただちょっと楽しい事しようか、」
次の瞬間、曙の視界から光が消えた
～～～3時間が経過～～～
新城「すまない、ぼのたん見てないか？」
吹雪「いえ、見てませんが」
新城「ぼのたん見てないか」
長門「いや？知らないな」
新城「ぼのたんが邪魔して無いか？」
明石「いえ、来てませんね」
最上「提督！」タタタッ
新城「なんだ？」
最上「外庭で曙の髪留めと靴が…」
新城「何だと!?それは本当か!?」
最上「はい、どうしますか？」
新城「…尺だが上に報告しろ、部外の第三者に駆逐艦が誘拐された可能性があるとな」
～～～リンガ泊地より離れた某所～～～
？「曙ちゃん、俺らのスイートホームにようこそ」
曙「何がスイートホームよ！アンタ達の家何て知った事じゃ無いわよ！このロープは何よ!?はずしなさいよ!?

？「あ？外す訳ねぇだろ、それに何言ってんだ？俺らって言ったらお前も含むだろうがよ！」
曙「!?」
？「俺の名前は佐伯、佐伯正次、この名字聞いた事あんだろ？」
曙「まさか!?」
曙の顔から血の気が失せる、身体中に冷たい気が走る、
正次「叔父貴から写真見せられた時に俺ら一目惚れでなぁ？拘束した後は好きにしていいって言うからよ」
曙「このケダモノ！近寄んな外道！」
正次「こええこええwおいお前ら、ロープ外さねぇでひん剥け、まずはおねだりから教えねぇとなぁ!!」
曙「ちょ!?やめなさいよこのゴミ共！」ジタバタ
正次「いってぇなぁ…ざっけんじゃねぇ奴隷がよ！」ゴスッ
曙「が、あ!?」
正次「お前まさか殴られないとか思ってねぇよな？んな訳ねぇだろうが！お前は今日から俺達の奴隷なんだからよ、もちろん、奴隷はご主人様にご奉仕するのは当然だろ？」
暗い室内に下卑た笑い声が響く、そして正次は言葉を続けて
正次「奉仕は得意分野だろ？伯父貴にさんざんやらされてたんだからよ！」
曙の頭の中に暗い記憶が蘇る、最初は無理矢理だった、だが抗う事を諦め、全てを受け入れて、感情を必死に押し殺そうとした暗い
過去の記憶が
曙「あ…あぁあああああああああ!!!!」
正次「こいつ壊れやがったwおいお前ら、ヤるぞ、」
返事は来ない、だが代わりに何かが床に落ちる音が聞こえた
正次「何だこれ!?おい！お前がやったのかよ！」
新城「だったら何だ…」
正次「テメェ・どうやってここが分かった？」
新城「簡単な話だ、あそこは外庭とはいえそれなりに警備は厳重だ、それを掻い潜る可能性のある人物、それは泊地の全設備、警備を知り

尽くした唯一の人間、提督だ、さらに俺や艦娘に最も悪意を持った提督、そこからは簡単だ、付近のそいつの所有物件やら何やら全部見て回ればいい」

正次「…」

新城「流石にお前みたいな親類がやったとは考えなかったがが…もうじき憲兵達も来る、曙を返してもらうぞ、」

正次「させるかよ！んな事されたら…俺が伯父貴に消されっちまうわ！」

言うと正次は大振りの一撃を繰り出した、当たれば大きい、その一撃が首に突き刺さる、その瞬間

新城「知ってるか？提督は銃火器の携帯が認められてんだよ！」

パンッ！パンッ！

乾いた音と、男の悲鳴が暗い室内に響く

正次「ギャアアアアアア!!待て、殺すな！分かった、何でもする！もう2度と手ぇださねぇ、だからー」

さらに1発、乾いた音が響く返り血が飛び曙の体に付着する

新城「佐伯はこの事は公にはできねぇからなぁ…わりぃが…まだ虫が治まらねぇんだよ…消えろ下衆が…！」

悲鳴が消え、部屋は空調の音が聞こえるほど静まり返った、ただ1つ、曙の声を除いては、ただそれは曙では無い、まるで抜け殻のような、曙であって曙じゃない、そんな声で

曙「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいなさいごめんなさいご

めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさい」
新城「おいぼのたん！もう終わったぜ！」
曙「いやぁぁぁぁぁぁ！来ないで！いや！又ひどい事するんでしょう！もう許して！」
新城「ぼのたん！落ち着け！俺だ！新城だ！おい！」
曙「ひぃぃ！来ないで！許して！ごめんなさい…ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
新城「誰に謝ってんだよ！おい！ぼのたん！」
その瞬間、到着した憲兵で編成された救助隊が玄関のドアをこじ開けて侵入して来る、憲兵達が見たのは、返り血を浴びて泣き叫ぶ曙と、その曙を抱きしめる新城の姿だった

提督業の泥濘

曙は救助された後意識を失い、すぐに軍の直属病院に入院した、肉体的な面は問題は無い、問題があるのは、傷付き、ズタボロに引き裂かれた心だった、新城は担架に乗せられ、運ばれていく曙を見て気がついた、体中にある無数の傷を

～～～泊地～～～

執務室に複数の艦娘が招集された

新城「あれは…どういう事だ…」

加賀「…提督、これからするお話は決して生易しいものではありません、ですが…聞きますか？」

天龍「やめるなら今の内だぜ」

新城「いや…何か知っている事があるなら話してくれ…」

加賀「分かりました、貴方にそこまでの決心があるのならば…いいでしょう、事は前の提督、佐伯の時です、当時佐伯は自分の出世の為になんでもしました、その影響の1つを貴方はすでに見ています」

新城「ああ、最初来たときは驚いたよ」

加賀「ですが、もう1つの影響がありました、中々上がらない戦果に怒りが頂点に達したのでしょう、駆逐艦に暴力を振るうようになりました、」

新城「なら他のやつにも傷はあるのか⁉」

加賀「いいえ、彼女だけです、」

新城「何故だ…まさか!!」

加賀「はい、その通りです、彼女は全駆逐艦の暴力を一身に受けるという申し出をしたのです…良心から出たのでしょう、しかし、暴力は変わっていきました、体罰的な暴力から、自らの性欲を満たす、吐口に」

新城「あの野郎…ろくな事しねぇなぁおい！」

加賀「彼女は夜な夜な提督私室に呼び出されて、色々とヤらされたようです…それも、自尊心を打ち砕くような物を中心的に、後半は拷問同然な物を…」

天龍「…認める、オレ達は何も出来なかった…」
新城「いい、お前達を責める気はない…あいつは背負いすぎた…もう…休ませてやりたい…普通の女の子としての幸せを手にしてほしい…」
加賀「…」
天龍「…」
新城「加賀、お前には秘書艦を頼みたい」
加賀「畏まりました」
新城「もう一つ頼み事をしたい、」
加賀「なんでしょうか」
新城「ぼのたんの病室に行く時、一緒に来てくれないか?」
加賀「構いませんが…何故?」
新城「俺が正気を保てない様な状況になったら1発ぶん殴ってくれ」
加賀「…了解しました」
新城「すまない、感謝する、こんな事、他の奴には頼めないからな…」
加賀「お気になさらず」
コンコン
蒼鹿「失礼する、先程入った情報だ、曙が目を覚ました…だが…」
新城「本当か!?すぐに行く!」
蒼鹿「待て!彼女は我々やお前が知る曙では無い、だが…それでも行くのか?」
新城「当然だ」
蒼鹿「そうか…なら良い…止めはしない」
新城「すまない、」
蒼鹿「だが、現実から目を逸らすなよ…」
新城「…ああ、すまない加賀、一緒に来てくれ」
加賀「…はい」
〜〜〜病室前〜〜〜
新城「ここか…」

加賀「そうね」
コンコン
新城「お邪魔する」
加賀「失礼するわ」
中は地獄の有様だった、ベッドの上で暴れる曙、それを取り押さえる看護婦と医者、別な看護婦が鎮静剤打とうにもこれでは危なっかしくて打てないだろう
曙「来ないで！いやぁぁぁぁぁ！もう、もうしませんからぁ！やめて！痛いのは嫌！ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいなさいなさいごめんなさい」
新城「ありかよ…こんなのってありかよ！なんでだよ！なんで駆逐艦ばっかりがこんな目に遭わなくちゃいけないんだよ！」
加賀「…」
看護婦Ａ「提督ですか？」
新城「ああ、そうだ、どうだ？」
看護婦Ａ「…ショックで大部分の記憶を無くしてしまったらしいのです…それだけならまだしも残った部分が辛い部分だけ…何かあったんでしょうか…あそこまで酷いのは初めてです」
そうこう話している間に、曙は鎮静剤を打たれ、眠りについた
新城「治るんですよね？」
看護婦Ａ「前例はが無いのでなんとも言えません、状況が特殊すぎます、見守るしかありません、」
新城「そう…ですか…」
加賀「…」
新城「こんな時に言うのも何だが…良い寝顔してるよな…」
加賀「そうね」
新城「お前…あんな辛い目にあってたのな…ごめんな…気付いてやれなくて…！」
加賀は目を見開いた、初めて、男の、それも提督の泣いている所を見た、普段は不適に笑い、粗暴な口調の新城のこの様な姿は、加賀に衝撃を与えた、加賀は咽び泣く新城の頭を抱き寄せると

加賀「貴方はあの子の過去を知った…でもこれは他の人間が口を出して良い問題じゃ無いわ」
新城「…？」
加賀「あの子自身が乗り越えていかなければならない問題、周りは手を貸す事はできる、でも立ち上がるのはあの子よ、今はそっと見守ることにしましょう、」
新城「そう…だな…」
それから数ヶ月が経った、大演習は棄権、ＭＩ作戦に向けての大本営の準備も着々と進められていて、翔鶴姉妹を始めとした選抜艦隊がリンガ泊地に到着、新城の指示の下で訓練を開始していた、それでも新城は合間合間に加賀と共に曙の見舞いに行った…新城夫妻として

新城「よ！ぼのたん！調子はどうだ？」
加賀「私も来ました」
曙「まぁまぁです」
少しずつ落ち着き、今はようやくまともに話せる段階にまでなった、だが目に光がない、いつも新城をクソ提督と馬鹿にしていた頃からは考えられない程大人しくもなった
新城「今日はプリンを持ってきたんだ、」
加賀「今日のはていと…お父さんが選んだのよ」
新城「じゃ、皆んなで食おうぜ」
加賀「頂きます」
曙「いただきます」
そのまま時は流れ４０分が経った頃、
新城「すまない、どうやら時間がきっちまったみたいだ」
加賀「また来るわ」
曙「はい又ーカハッ」
曙の呼吸が乱れる、発作が始まった、曙は暗い過去を思い出す、断片的に埋め込まれた、暗い、光の届かない記憶を
新城「ぼのたん!?ぼのたん!?」
曙「…！あ、すみません…」

新城「気にすんな、前より随分と軽くなってる、進歩だな！」
そう言って新城は曙の頭を撫でる、彼女は少し顔を赤らめ、機嫌が上機嫌な事を伺わせる
新城「おっと、もうこんな時間か、又な、」
加賀「又来ます」
そう言って新城達は病室を出る、
新城「良く笑う様になったな…」
加賀「そうね」
新城「これもカウンセリングの先生のお陰かな」
加賀「そうね…」
新城「…彼女はもう二度と辛い目には合わせない、他の奴もだ…そうして盤石にしたら…次は…次はあいつをこの手で…！」
加賀「…」
沈黙が廊下に響く誰もいない、薄暗い廊下を2人は歩く、まるで2人のこれからを表しているかの如く先の見えない闇を、2人は歩き続ける

提督業の艦隊指導

大本営の選抜艦隊は結成され、リンガ泊地に集結されていた、新城は忙しそうにしていたが、どこか寂しそうで

ある時は

新城「そこ～！動きが硬い！本当に無駄打ち誘いたいならもっとスムーズに、お前は装甲が薄いんだから避ける事が大切だ、肝に免じておけ」

又ある時は

新城「もっと良く狙って！敵艦隊は練度が馬鹿高い！もっと良く狙わないと当たんないぞ！」

さらに又ある時は

新城「瑞鶴！もっと気をつけて発艦させるタイミングを見極めろ、そうしないと今みたいにすぐ矢が無くなるからな！機動部隊の要のお前たちが直掩機あげられなくなったら絶対に勝てないぞ！」

加賀「動きが甘いわ、五航戦の俎板ワカメ」

新城「加賀さん言い過ぎじゃあ…」

加賀「何か？」ギロッ

新城「いえなんでもー」

赤城「ははは」

新城「うお!?魚雷来たし！」ガガガガガガ

？「すみませ～ん」

？「当たりませんでした～？」

新城「気をつけろよ…流石にクラスター魚雷は扱いにくいか？」

？「いえ、私は、ただ北上さんは…」

北上「私は平気さぁ、大井っちの方がキツいんじゃない？」

大井『私は平気です！」

新城「取り敢えず、扱いにはなんとか慣れてもらう、頼んだぞ」

北上「は～い」

金剛「テイトクー！」

新城「はいはい、なんでしょ」

金剛「間宮が呼んでるヨ」
新城「お、そうか、すまないな、」
金剛「いいって事デース！」
新城「行くか、」
加賀「ええ、」
金剛「グヌヌヌヌ、加賀にも誰にも提督は渡さないデース！」ムフー！
～～～厨房にて～～～
新城「間宮、呼んだか？」
間宮「はい、これ、苺のゼリーです、曙ちゃん好きだったでしょう？今日行く時持っていってあげて下さい」
新城「すまないな…」
間宮「いえ、私にできることはそれくらいですので」
新城「午後に行く予定だから、その時に持ってくわ」
加賀「お世話になってます」
間宮「いえいえ、」
新城「じゃあ俺は指導に戻るな、」
間宮「はい、頑張ってください！」
そう言って新城と加賀は廊下に出た、
新城「すまないな…妻のふりまでさせてしまって」
加賀「いえ、これで執務に支障が出ないのであれば特に問題はないかと」
新城「…なぁ加賀、もしも…」
加賀「？」
新城「いや、なんでもない、すまないな」
～～～
新城「おし、これで午前中は終わりだな～、皆休憩はちゃんと取れよ、」
一同「「は～い」」
加賀「では」
新城「ああ、行こうか」スタスタ

大井「あの二人休憩時間になるといつもいなくなるわよね」
北上「さてさて～、何があるのかねぇ」ニヤニヤ
瑞鶴「…貴方達、そんなこと言うのは少し不謹慎よ」
大井「瑞鶴さん？不謹慎てどう言う？」
瑞鶴「あの二人はいつも休憩時間になるといつも隣の軍病院に行ってるのよ」
大井「え!?じゃああの二人ってそう言う仲なの!?」
北上「そういう仲？」
大井「ほら、妊娠とか」
瑞鶴「ちゃんと聞いて！そんな訳ないでしょ!?…見舞いに行ってるのよ」
北上「見舞い？」
瑞鶴「ええ…提督さんの前の秘書艦さんのね」
大井「前の？」
瑞鶴「…駆逐艦曙…この泊地の仲間よ、あの子さえ戻ってくれれば…」
北上「くれれば？」
瑞鶴「提督がもっと笑ってくれるのに…」
大井「…艦娘が入院なんて普通しないわよね？何があったの？」
北上「ちょっと大井っち！」
瑞鶴「いいのよ…あの子は…心が壊れちゃったのよ…」
北上「!?」
瑞鶴「まぁいろいろあってね、あ、勿論提督さんが悪い訳じゃないわよ？…もう前の曙ちゃんには会えないのかな…」
そう言った瑞鶴の表情は寂しそうで、何処かかつての喧騒を愛おしむような、懐かしむような表情で提督達の消えていったドアを見つめていた
～～～曙病室前～～～
新城「ふぅ～、やっぱりこの瞬間が一番緊張するな」
加賀「？」
新城「又前に戻ってないかって、つい勘ぐっちゃってな…」

加賀「大丈夫です、悪いようにはなりません、あの子の強さを信じましょう」
新城「だな、」
そういうと新城はドアをノックして病室に入る、偽りの笑顔を取り繕い、偽りの身分で接する、罪悪感が浮かぶが本当の身分を明かせば辛い記憶を思い出してしまうかもしれない、艦娘だった頃を思い出してしまうかもしれない、そう考えると、どうしても踏み出せない
新城「よ！ぼのたん！今日は苺のゼリーだぜ！」
加賀「貴女好きだってでしょう？」
曙「あ、ありがとうございます」
新城「はい、おしぼり、」
曙「すみません、ありがとうございます」フキフキ
加賀「さて、頂きましょう『
新城「いただきま～す」
曙「いただきます」
加賀「頂きます」
曙「美味しい…これだけは味がします…」
新城は一瞬言葉を失った、曙を、一人の少女の味覚を奪ったその所業、創造するだけで身震いが起きる…ある人物に対しわき起こる殺意と、並々ならぬ怒りを無理やりねじ伏せ
新城「それは良かった、又持ってくるな」
曙「本当!?」キラキラー
加賀「ええ、きっと」
新城「しかし本当の好きだな」
曙「はい、このゼリーは唯一覚えてる味です、砂じゃなくて、ちゃんと味わえる…それに、何か思い出せそうなんです、事件で失った記憶を…」
新城「…」
加賀「あなた、そろそろ時間よ」
新城「お、そうか、ありがとう、すまないなぼのたん、またくるよ」
曙「はい、お待ちしてます」

加賀「ではこれで」
新城「又な」パタン
未だ昼時とはいえ病棟の廊下にはその光が届かない、その光の届かない、泥濘のような闇を進む

提督業の復活祝い

その知らせは朝早くに伝えられ、それは新城の耳にも届いた
新城「加賀！本当か!?」
加賀「らしいです」
新城「ぼのたんの記憶が戻ったたって聞いてスッゲェ安心した」
加賀「どうされますか」
新城「早速いくに決まってるだろ」
～～～病室前に着く～～～
新城「」カチコチ
加賀「提督？」
新城「」カチコチ
加賀「…フンッ！」ばごぉぉぉぉぉぉぉぉん
新城「ｂｒｊしｈｒｈｄｂｆｋｓ!!」ゴロゴロゴロゴ
加賀「大丈夫ですか」
新城「死にかけたわ！どんだけ腕力強いんだよおい！」
加賀「緊張は解けましたか？」
新城「あ、そういえば…」
加賀「せっかくあの子は記憶を取り戻したのに貴方がそんな風だと曙さんもがっかりするわ」
新城「そうか…すまない、ありがとう！」
加賀「いえ、」（チョロ…）
新城「失礼する！ぼのたんはどこじゃあああああああああ！」
曙「きゃあああ!??」
？「!?!?!?」
加賀「フンッ！」ドガッ
新城「おぉぉぉぉぉおう…頭がぁ…われるぅ…」
曙「あ！やっと来たのね、このクソ提督！」
？「曙さん!?」
加賀「大淀さん、もう大丈夫なんですか？」
大淀「はい、カウンセリングももう大丈夫です！」

新城「こちらの方は？」
大淀「軽巡洋艦大淀です！以後よろしくお願いします！」ペコ
新城「おう、よろしくな」
曙「いつまで喋ってんのよこのクソ提督！」
新城「それを聞くとやっと調子が出るな」
曙「ドＭなの!?」
新城「そう！その調子だ！もっと俺を罵れ！」
曙「え、」
新城「さあ！」
曙「ちょっ」
新城「さぁ!!」
曙「は、っちょ」
新城「もっと俺を罵ってくれ！さぁ、早く！」
加賀「やめなさいみっともない！」バギィ
新城「背骨がぁ！折れルゥ！」
曙「折れればいいのよそんなもの！」プンスコ！
新城「は、話は変わるがもう大丈夫なのか？」
曙「あったりまえよ」
新城「…佐伯の記憶は…大丈夫なのか？」
曙「もちろんよ」
新城「本当にか？」
曙「ええ」
新城「本当に本当なんだな？」
曙「しつこいわね！大丈夫って言ってるでしょ！」
新城ダキッ
曙「ちょっ!?クソ提督!?なに…を」
新城「」
曙「て、提督？」
新城「ｈｓｈｓ」
曙「？」
加賀「？」

大淀「？」
新城「ぼのたんじゃあああああああああああああああああぼのたんｈｓｈｓ！ｈｓｈｓ！」
加賀（イラッ）
曙「あぁあもう！離しなさいよ！こんのぉ…クソ提督!!」ジタバタ
大淀「Σ（゜д゜ｌｌｌ）」
新城「俺は一体何を!?」
瑞鶴「提督さ～ん！お見舞いに来たよ！」
大井「私達も」
北上「来たよ～」
瑞鶴「あ…」
大井「…」
北上「あちゃー」
新城「違う！これは誤解でぇ！」
加賀「提督の本性を知られてしまいましたか…」
新城「!?」
曙「そうなの…実はここに入院してるのも実は妊娠で…」
新城「!?」
曙「何て嘘よ嘘、」
新城「心臓に悪いからやめろ！」
曙「だって…クソ提督の慌てる様が面白くってｗ」
加賀「そうね」
新城「認めんなし！」
瑞鶴「あ～、びっくりした」
大井「演習サボっていちゃいちゃしてるのかと思いました」
北上「大井っち～、後ろに般若が見えるよ～」
瑞鶴「まぁでも戻って良かったわ～」
新城「だな～」
曙「そうなの？」
加賀「ええ、貴女が居ない間提督は死んだ目をしていたわ」
曙「」ジー

新城「？」
曙「やっぱりクソ提督にはこの曙さんがいないとダメね！」
新城「はいはい、それでいいよ」
曙「ったく、素直じゃないんだから」
加賀「話は変わりますが…いつ頃戻れそうですか？」
新城「俺としてはお前には普通の女の子として暮らしてほしいんだがな…」
曙「クソ提督…」
新城「曙…」
曙「馬鹿なの？」
新城「人が心配してやったというのにお前という奴は…」
曙「普通の生活を送るとしてどこの誰を頼ればいいわけ？」
新城「それは…」
曙「それに、逃げたら散っていった仲間への裏切りだもの、そんな事出来ないわ」
新城「いいんだな？」
曙「ええ」
新城「それがお前の意思なら尊重しよう、」

提督業の大晦日

新城「…気がつけば今年も後僅かだな」
曙「何でアンタがここにいるのよ！」
新城「別によくね？」
曙「こんな時間に艦娘寮にいるのよ！」
新城「年越しのどんちゃん騒ぎしようって言ったら許してもらえた」
曙「ったく…」
新城「それにほら、他の奴らも居るし」
金剛「テイトクの隣はワタシデース！」グイグイ
新城「ちょっお前きついって」
金剛「テイトクはワタシが嫌いデスカ…？」ウワメヅカイ～
加賀（イラッ）ガッ
金剛「ちょっ加賀～？ナニスルデース？」
加賀「金剛さんは私の隣です」ズルズル
金剛「テッテイトク～！助けるネ～！」
新城「すまない…金剛、お前のことは忘れない！」
金剛「そっそんな～」ズルズル
鳳翔「今夜のお料理は腕によりをかけて私と間宮さんと作りました！味わってくださいね～」
一同「「は～い」」
～～～小一時間後～～～
天龍「酒がやりねぇぞおおお！」
龍田「天龍ちゃん～？呂律回ってないよ～？」
天龍「うるへ～！」
新城「お前ら呑んでるかぁ！」
隼鷹「あ～い!!」
明星「ヲ～う」
新城「声が小さいぞぉぉぉっぉぉぉ！」
長門「ぅおおおおおおお！」

～～～2時間後～～～
新城「ふっふっふっふ、長門君！君のアナコンダバスターは既に見切ったのだよ！」
長門「何!?だが…」
新城「プギャー！」ｍ９（・∀・）９ｍ
長門「いくぞ！」
陸奥「ええ！」
長＆陸「ツイン海老反り!!」
新城「何故陸奥まで!?」
～～～3時間後～～～
足柄「提督～、私ならぁ…提督と結婚してもいいわぁ～」ヒック
加賀　ピクッ
金剛　ピクッ
足柄「だからぁ～え？なにこれ？金剛？加賀？目が怖いわよ」
加賀「ちょっと執務室裏まできてただけるかしら」
金剛「ちょっと頭冷やすネ～」
足柄「そっそんなぁ～、提督！後でカツ揚げるからぁ～！助けて～!!」
新城「ドナドナドーナ」
～～～日付が変わる頃～～～
曙「提督～、こらぁ～、ままがメっしてあげるからね～？」
新城「おい！誰だ酒飲ませたの！」
隼鷹「さぁ～？誰でしょ～」
新城「又お前かぁぁぁぁぁ！」
曙「も～ままの言うこと聞かない子は～」
新城（なんやかんだで酔った曙はかわい）
曙「ままが滅してあげるからね～！」
新城「くねー！離せお前！おい！主砲構えるな!!」
曙「あ、こら～、逃げるなぁ！」
～～～新城はベランダに逃げる～～～
新城「ふ～、危ねぇ…お？北上かなぁ…よし…」

新城「お～ぃ」
北上「？提督？どこだろ？」
新城「お～ぃ」
北上「え？どこ？」
新城「ここだよ～！」
北上「うきゃあああああ!?!??なっなんで下から出てくるのさ！」
新城「お前こそなんでこんな所に」
北上「いや～、２０１９年の海も見納めかな～って」
新城「ほうほう（全く分かってない）」
北上「まぁ分かってなさそうだけどさー」
新城「今年も後３分かぁ～速いもんだな」
瑞鶴「だよね～、提督さんはどんな年だった？」
新城「お、瑞鶴か、そうだな～まぁ色々あったな」
北上「普通すぎて詰まんないな～」
新城「まぁな～」（佐伯とか佐伯とか佐伯とか佐伯とか色々あったよ畜生）
新城「後１分だな～、そろそろ戻るか」
北＆瑞「「は～ぃ」」
暁「司令官！年越しなのよ！」
電「なのです！」
響「だね、」
雷「来年はもっと私を頼っていいのよ！」
新城「うぃ～」
ゴ～ンゴ～ンゴ～ン
新城「除夜の鐘か…」
曙「こら～！」
新城「!?」
長＆睦「「まて！」」
天＆龍「「提督ー！」」
新城「おい！刃物振り回すなふふ怖姉妹！おい！聞いてんのか！こっち来んな危なっかしい!!」

金剛「テイトクー！」
新城「やべ！こうなったら…逃げるが勝ち！」ピュー！
一同「「まて！」」
新城「殺す気か！」
一同「「提督！」」
新城「何だ！」
一同「「来年も、私達艦娘を、どうぞ宜しくお願いします！」」
新城「…おう！」ピタ
龍田「ふふふ…」
新城「ん？」
金剛「捕まえた！デース！」
新城「あぁあぁあぁああああぁぁああ!!」
新年はどのような年になるのか、艦娘達の戦いはどうなるのか、新き年に募らせる祈りは如何なるものか

提督業のお正月明け

正月の休暇を利用し実家に帰省していた新城だったが、ふとしたことで話題が新城の仕事の話にかわる

母「そういやあんた、もう２４だけどさー、少しは浮いた話でもないの？」

新城「と、言うと？」

母「結婚とかさ、真面目に考えてる？もう２４だしこのままってのは無いだろう」

新城「ああ、ちゃんと考えてるって」

兄「ああ、こいつはこう見えてちゃんと考えてるよ」

新城「兄貴…」

兄「だって鎮守府とか言う女だらけのハーレム状態だし、こいつ、興味ないように見せといてなかなかやるぜ！」

母「そうね…」

新城「おいクソ兄貴ー!!!」

父「ほう…新城、お前誰にも手を出して無いのか？」

新城「ったりまえだろ！なに考えてんだ！いい歳こいて！」

父「ちゃんと既成事実を作らんか!!!」

母「お正月で一族郎党集まってる席でんな事言わないで！」ゴン

父「ぁぁぁぁぁぁぁ!!」

新城「何故俺まで…」

兄嫁「でも、新城さん優しいんできっといい人見つかりますよ！」

母「…そうね、じゃあこうします、お正月明け、貴様と一緒にリンガ泊地に向かいます」

新城「!?」

母「ええ、親族特権と…ＯＢ特権を使ってね…」

新城「でも母さんが元帥補佐だったのはもう１０年以上前だぜ!?」

母「だ～れ～が～貴様を軍に入れてやったと思っている？」ギロッ

新城「あれは選択の余地が無かっただろ！大学も決まってたのに急に「軍に入れ」って言って挙げ句の果てに「私に打ち勝ったら勘弁し

てやろう」とか言い出して俺を半死半生にしてその隙に入軍届出して元帥推薦枠で試験無しで士官校に入れてなし崩しで！」
母「なんのことだ…？」
新城「だ、か、ら！」
母「上官には敬語を忘れるな！この中佐風情が！…あれ？アンタ昇格した？」アラヤダモー！オセキハンタカナクチャ～！
兄「この流れ見てて飽きないわ～」
父「だな、誰かが下らないことの犠牲になってるのを見ると実に気分が良くなる」
兄嫁「流石に言い過ぎじゃあ…でも…」
兄「でも？」
兄嫁「私も大好きです！」ブンブン
兄「はっはっはっはっは」
父「流石お前が選んだ娘さんだ、」
兄＆嫁「「はっはっはっはっはっはっは!!」」
父「さて、矛先がこっちに向く前に逃げるぞ」ササッ
兄＆嫁「「は～い」」ササッ
～～～翌日、リンガ泊地～～～
新城「じゃあ母さん、これから朝礼で母さんが来ることを伝えるから、ここで待ってて」
母「結構、私は居ない体で良いわ…さて、艦娘がどう接してくるか…楽しみね」
新城（頼むから誰も余計な事しないでくれー!!）
母「では、私は清掃員の振りして遠くから見ている、余り気にするな」
新城「はぁ…」
母「さて…楽しく見させて貰う」
新城「へ～い」
母「返事！」
新城「はい！」ピシッ
母「宜しい」

新城（体が勝手に…）
～～～朝礼終わり、執務室にて～～～
曙「ちょっとクソ提督！何よ、私に用事があるんでしょ！早く言ってよね！」
新城「…今まで黙っていたが…」
曙「？」
新城「そのクソ提督って呼び方やめてほしい」
曙「はぁ!?クソをクソ呼ばわりして何か問題でもある訳？」
新城「…」カリカリ
曙「何よ紙に書いて…!?」
新城「いいな？これをみんなに伝えろ、そして、今日1日だけで良いからまともな挙動をしろと回してくれ」
曙「わかっt…失礼しました、了解いたしました、」ペコッ（言ってくりゃ良いんでしょ言ってくりゃ）
新城「宜しい…」（ああ、そうだ）
曙「失礼します」ペコッ（んじゃ行って来るわ）
新城（理力が伴に在らんことを…！）グッ
曙（理力が伴に在らんことを！）グッ
パタン
母「ふむ…まぁ礼儀作法に問題はあるまい…」
新城「どっから入ってきたおい！」
母「窓からだ」
新城「にしても異常だ！」
母「軍人だから普通だ」
新城「ここ3階！」
母「気にするな…」
新城「はいはい…」
母「では掃除に戻るとしよう、下水の詰まりが酷くてな」
新城（本職かよ！）
コンコン
新城「はいどうぞ」（又案件じみた奴が…）

母「」シュタッ
金剛「テイトクー！ヴァァァァァァァァァァにんぐぅ！ラァァァァァァァァァァブ!!!」ダキッ
新城「!?!?!?」（こいつ確信犯か!?）
金剛「ちゅっちゅっ！」（テイトクマザーのお墨付き貰うのはワタシネ！）
新城「落ち着け金剛！どうした！」
金剛「テイトク…その…前から言いたかった事がありマス…」（テイトクは悪い人じゃ無いケドきっとドーテーネ！ドーテーはイチコロデース！）
新城「何かな？」（頭大丈夫かよこいつ…）
金剛「その…大好き…デス…（上目遣い）ワタシは…テイトクと一緒に居たいデス…！」（上目遣い／涙目／普段は気さくなオンナノコの恥じらい、カットイン発動ネ！さぁ、これでｆｉｎｉｓｈｅｄ、デース！）
新城「ドコカワルイミタイダナ、ウンソウダ、ドコカワルインダナ、憲兵！」
蒼鹿「は！いくぞ！」
憲兵ｓ「は！さ、行きますよ」ガッ
金剛「そんなぁ～！このワタシが…夜戦に持ち込ませられないなんて！嘘デース！」ズルズル
新城（本音出てるぞ本音…）
新城「…まぁ良い、この事は忘れよう」

次話に続く　後書き欄必見

提督業の地雷除去《甲》

母「あんた…大変な思いしてるのね…」
新城「ご理解頂けて何よりです…」
コンコン
母「」シュタッ
新城「はーい」（飛び降りた!?）
加賀「失礼するわ」
新城「おう、どうした」
加賀「艦隊の帰投の報告よ、それと、今回で練度が最大になったわ」
新城「お～、おめでとう、流石加賀さん、何かご褒美をやらねばな」
加賀「！」
新城「何か欲しいものとかあるか？」
加賀「…わ…」
新城「？」（こいつまさか…）
加賀「ゆ…わ…」
新城「おー、すまない、最近耳がわるくてな」
加賀「ゆ…びわ」
新城「アア、琵琶カ、ガッキガスキナンダナー」（逃げるか）
加賀「え？」
新城「果物ノホウノ琵琶カ、ワカッタ、アトデヨウイシテオコウ」
加賀「指輪です！」
新城「ユスリカ？」
加賀「」ピキン
新城「ドコデウッテルカナー」スットボケ
加賀「指輪って言ってんでしょうが！」キリキリ
新城「落ち着け加賀！弓を構えるな！おい！聞いてんのか！それにその言葉遣い、お前らしくないぞ！」
加賀「私らしいって何!?いつも鉄面皮な顔して黙って五航戦ｄｉｓるのが私だと思ってるのかしら」
新城（うん、そうだよ）

加賀「私だって…」ウルウル（ギャップ／涙／震え声／最高のカットイン発動です、流石に気分が高揚します）
新城「お、おい、どうした」アセアセ（少し乗ってやるか）
加賀「一人の女よ…」ウルウル（さぁ、早く堕ちなさい）
新城「そうか…すまなかった…加賀、実はずっとお前に渡したいものがあったんだ」
加賀「…？」（勝ちました）
新城「これ…開けてくれるか？」
加賀「はい…！」パカッ
新城「今までお前が間宮で食い倒した請求書だ、期日までに頼むぞ」（甘いわ加賀よ！）
加賀「」Σ（・□・；）
新城「うん、一緒に食べることはあっても誰も奢りとは言ってないからな」（流石に気分が高揚します）
加賀「」サァー（こ、ここは1度引くべきね）
新城「おっと加賀さん、先程のご褒美、内容は問うてないぞ？」
加賀「…分かったわ、それで良いわ、」（これは…してやられました）
新城「じゃ、あとは用はあるかな？」
加賀「いえ、失礼するわ、」
新城「後で赤城を呼んできてくれ」
加賀「？」
新城「お前の倍額たまってるからな」
加賀「」？（。Д。）
〜〜〜
母「…お前…また仕送り再開するか？」
新城「いえ、大丈夫です、流石に気が引けます」
母「そうか…何かあったら連絡するといい、多少なら貸してやれるぞ…」
新城「何かありましたらお願いします…」
コンコン
新城「またか…」

母「気丈にな…」シュタッ
新城「は～い、どうぞ」
羽黒「あの…羽黒です…失礼します」
新城「おう、どうした」（良かった、まともそうな子だ）
羽黒「艦隊の再編成の件なんですが…」
新城「意見があれば聞かせてくれ」
羽黒「はい！」
～～～３０分経過～～～
新城「分かった、お前の意見も参考にしてみるよ」（まともな話が出来るだけで好きになりかけるって…俺の周りは…）
羽黒「では失礼します、あ、その前にお茶お入れしますね」
新城「あ、頼めるか？じゃあお願いしようかな」
羽黒「はい！」キラキラー
新城（いい子…すこだわ）
羽黒「あ、」ポロッ
新城「ん？」

「明石謹製惚れ薬」

羽黒「…」
新城「」（＊゛ー゛＊）
羽黒「今何か見ましたか？」ジロッ
新城「ヒィ!!」ビクゥ
羽黒「み、ま、し、た、か？」
新城「いいえ、何にも見てないですぅ、はい！」ガタガタ
羽黒「なら良かったです、じゃあ、これで失礼しますね…」ニコォ
新城「ハーイ、」
バタン
新城「怖えええええ!!!」
母「お前…暫く実家に帰ってるか？」
新城「いや、大丈夫です、今日はちょっとおかしいだけで、明日になればちゃんと変わります！」

母「だといいのだがな…」
コンコン
新城「もういやぁぁぁぁぁぁ！」ダキッ
母「落ち着け！私も見ている、何かあったら駆けつけるから」
新城「本当？」
母「ああ、」
ダンダンダンダンダン
新城「どっどうぞー」
響「響だよ、司令官」
新城「お、おう、どうした」
響「うん、それでねー

提督業の地雷除去《乙》

新城「で？どうした？お前が用事なんて、珍しいな」
響「うん、ボルシチを作りすぎちゃったから食べて欲しいんだ」
新城「お～、そんな事ならお安い御用だ」
響「ありがとう…」フラフラ
新城「どうした!?大丈夫か？」
響「ああ、なんて事ないよ、ただの貧血さ」
新城「貧血？じゃあ後で美味いレバー食わせてくれる店に連れてってやるよ」
響「それは…嬉しいな、スパシーパ」
新城「ん？それにこの傷はどうした？包帯を巻くほど大きな怪我なんて…ドッグにはちゃんと入ったか？」
響「大丈夫さこれくらい」
新城「ダメだ、ドッグ手配しとくから後でちゃんと入るんだぞ～」
響「わかったよ、じゃあ温めて持ってくるね」
新城「おう！期待して待ってるぞ」
～～～
響「お待たせ、ついでにピロシキも持って来たよ」
新城「お、気が利くな～！サンキューな！」
響「暑いから気をつけてね」
新城「お、これは美味いな～、少し鉄の匂いが強いが……ん？」ピクッ
響「」ギクッ
新城「響さ～ん？ナニを入れたんですか～？」
響「なんでもないさ」メソラシー
新城「その傷はまさか…」
響「…」
新城「頼むからこういう真似はしないでくれ、お前達の体が心配だしこういう事をされて喜ぶ捻じ曲がった人種じゃないからな」
響「…わかった」

新城「でも味は美味いな！今度混入物無しの手料理を食わしてくれよ」
響「良いのかい」パァァ
新城「当たり前だ、寧ろこっちから頼みたい」
響「わかったよ、いつでも言って、じゃあ司令官、私はこれで」
新城「おう、ドッグには入れよ～」
響「了解した」
～～～
新城「駆逐艦怖ぁ!!!!え!?何あれ!?え!?」
母「…気の毒にな…」
新城「母上、これでよくわかったでしょう!?当分は結婚とか無理ですよ…」
母「ああ、私も考え直す必要があるようだ、それと、元帥からお前宛に電文だ、極秘だから絶対に漏らすな」
新城「はぁ…」
母「じゃあ、私はこれで、達者にな！」
新城「母さんもな！」
母「貴様に言われるほど落ちぶれちゃいない」シュタッ
新城「消えた!?」
ガチャッ
曙「クソ提督！元帥から電文よ！それが…」
新城「どれどれ…今回の作戦は艦娘擁護主義者の要請もあり、わざと仕組まれた事である、今回招集された艦娘は全て人道に反する行いをしている鎮守府から集められた者である、彼等を失脚させる為にもわざと負けることを厳命す、成功は許されない、絶対に出撃を失敗させよ、尚この文書は存在しないものとし、最高責任者が読んだ時点で効力を持たない紙屑とす、」
曙「…本当かしら」
新城「…あの元帥…中々良い事考えるじゃねぇか…」
曙「あの佐伯もこれで終わりね！」
新城「ああ、さすがの佐伯もこれで終わりだろうな」

曙「で、どうするの」
新城「…深海棲艦と手ぇくめないかな」
曙「出来る訳ないでしょ！何考えてるの!?」
新城「…いるじゃないか、うちには」
曙「へ？…あ…」
新城「明星を呼んできてくれ」
曙「…わかったわ」
〜〜〜
明星「提督…なニ？」
新城「他の深海棲艦とコンタクト出来るか？」
明星「多分デキる」
新城「…じゃあ向こうにこう伝えてくれないか？我々はリンガ泊地艦隊、貴艦隊と交渉の意思あり、とな」
明星「…ジャあ浜辺ニ行ってくる」
新城「…頼んだぞ」
明星「任せて…」
〜〜〜
明星「了解…って言ってた、こっちニ武装解除シた艦隊を遣すからそれを通じて交渉スルみタい」
新城「…そうか、曙、全艦に通達、近海で敵艦隊を見かけても向こうから打ってこない限りは打つなとな」
曙「わかったわ」
〜〜〜
曙「クソ提督、来たわよ、発砲厳禁とも通達してあるわ」
新城「おお〜、どれどれ…!?港湾棲姫!?え!?おまけに太平洋棲姫!?…まともにやり合ったら負けるだろ…」
曙「随伴艦も全部エリート以上…」
新城「じゃあ行くか、ぼのたん、ついて来てくれ」
曙「仕方ないわね、良いわよ！」
交渉が始まった、さて、

提督業の極秘交渉

新城は深海棲艦の一行を来賓室に通し、先ずはもてなした
新城「えっと…太平洋棲姫さん、港湾棲鬼さん、初めまして、ここの責任者で今回の交渉の発案者の新城だ、宜しく頼む」
太平洋「宜シク頼ム…」
港湾「同ジク」
瑞鶴「えっと…一応護衛役の翔鶴型２番艦の瑞鶴…です、」
ヲ級「護衛役ノヲ級ダ…」
新城「…じゃあ始めさせて頂きます、今回の交渉の内容はＭＩ海域と当泊地近海に置いての作戦行動についてです」
港湾「ＭＩ海域ヲ渡セトイウノナラムリ」
新城「いや、そうじゃない、近々ＭＩ海域に連合艦隊が行くが」
太平洋「ガ？」
新城「唯の張りぼて艦隊だ、こちらとしては攻略する気など毛頭無い、適当に夾叉程度の砲撃をして追い返してくれないか？もちろんこちらも夾叉程度の砲撃を２～３発して帰る、」
港湾「ハ？ナニカ意味ガアルノカ？」
新城「此方の内情でな…あまり深くは聞かないでくれ…そのかわり打つ砲弾にはありったけの嗜好品を詰め込もう」
港湾「ソンナコｔ「ノッタ」
瑞鶴「ブッフォ」
太平洋「コーヒーハ必須ダゾ」
港湾「正気カ!?」
太平洋「別ニ実害無イシイイダロ」
宿地「ダガ…」
太平洋「ジャアナカニチョコレート入ッテテモイラナイナ」
港湾「!?」
太平洋「サァ、ドウスル、フタツニヒトツ」
港湾「今回ダケダゾ…」
新城「じゃあ一つ目の交渉は成立だな、もう一つある」

太平洋「ナンダ？」
新城「我々人類と深海棲艦とはまだ深い確執があり、文化の理解もままならなく、当然終戦も見えない」
太平洋「ダナ」
新城「そこでだ！我々リンガ泊地と深海棲艦で文化と人員の交流をしないか？」
ヲ級「！？」
瑞鶴「！？」
新城「勿論、この対価として深海では採れない嗜好品等を毎月一定量譲渡しよう」
港湾「…イイダロウ…ダガ具体的ニハドノヨウニ交流スルンダ？」
新城「深海側から何名か留学艦を出して貰い、相互理解を深めると共に、終戦の糸口を探していく」
太平洋「留学艦ノ安全ハ保証サレルノカ？」
新城「勿論、軍の名にかけてな」
港湾「分カッタ、マズハ駆逐艦ヤ潜水艦、軽巡カラ始メテ最終的ニ姫ヲ派遣シヨウ」
新城「ありがたい、ではこれでいいか？何か意見等があれば忌憚なく頼みたい」
太平洋「大丈夫ダ、コレデイイ」
港湾「アア」
新城「じゃあ成立だな…誓約書を作りたいがいいか？」
太平洋「アア、問題無イ…コチラニハこぴーヲ頂コウ」
新城「分かった、ではこの紙に判子…あれ？判子もってる？」
港湾「血判デイイダロウ」
新城「…わかった、では曙、小刀を持ってきてくれ」
～～～
曙「はい、これでいいの？」
新城「ありがとう、じゃあ俺から…はぁ！」タンッ
太平洋「次ハ私ダナ…セイ！」タンッ
港湾「カセ、…」タンッ

新城「じゃあこれでいいな、茶でも飲むか?良いのがあるぞ」
太平洋「イヤ、結構…コレデ失礼スル」
新城「そうか…じゃあ見送ろう、」
港湾「結構ダ」
新城「…そうか…ではここで失礼しよう、」ペコッ
ガラッ
太平洋「デハマタ」
港湾「」ペコッ
ヲ級「ヲ…」
ドボーン
一同（窓から行くんだ…）
新城「怖かったよおおおおおおおおおお!」ダキッ
瑞鶴「てっ提督さん!?何してんの!?///」
新城「殺されるかと思った…」
瑞鶴「わからなくもないけど…ほら、曙ちゃんも見てるから!」
曙「」ゴゴゴゴゴゴゴゴ
新城「」ヒィ!
曙「艦娘襲ってる暇あったら仕事しろ!クソ提督!」ガッ
新城「すみませんでしたぁ!」ズルズル
瑞鶴「あはは…」
〜〜〜数分後〜〜〜
長門「提督よ!さっきの深海棲艦は一体なんだ!」
新城「ああ、そうだ…これから放送でみんなに説明するから、取り敢えず部屋に戻ってろ」
長門「…?」

提督業の留学艦

ピンポンパンポーン

新城「提督の新城だ、各員そのままでいいから話を聞いてくれ、本日我々リンガ泊地と、該当地域に展開する深海棲艦勢力の間で停戦条約が交わされた、大本営も既に認知している、今月末より深海棲艦勢力より留学艦がやってくる、終戦に向けて互いに糸口を見つけ合おうと言うことだ、今後、当海域での許可のない発砲は厳禁だ、それと最後に、ＭＩ攻略組はすぐに執務室に来てくれ」

〜〜〜

長門「イマナニカキコエタカ」

陸奥「」ポカーン

〜〜〜

明石「深海の技術見れるかな!!!!!」

〜〜〜

暁「ぴゅや！」

響「大丈夫かい暁」

〜〜〜

赤城「あらあら、深海の食べ物は美味しいかしら」キラキラ

加賀「…」

〜〜〜

コンコン

瑞鶴「提督さん、瑞鶴よ、入るわ」

新城「お〜う、全員そろったな〜、ＭＩ海域攻略に関する大本営からの厳命が来た」

北上「どんな感じなのさ」

新城「攻略しないで失敗した振りで戻ってこい、ていう命令だ」

瑞鶴「はぁ？どういうこと？」

新城「上官命令でな、あまり詳しいことは言えない、ついでにお前らにも情報秘匿管理の対象となる、絶対に口外するな」

翔鶴「はぁ…それはよろしいですが…」

新城「みんな必死に演習したのにすまないな…だがこれも終戦に向けた必要な手段だ」
瑞鶴「それで終わり？」
新城「ああ、そうだ…え？軽くね？」
瑞鶴「何が？」
新城「いやだって普通ここはもっと抵抗するでしょ」
瑞鶴「大本営の命令なんでしょ？それに、提督さんがいうんなら間違いはないし」
新城「お前…」
北上「私らも信頼できない人間には命を預けられないからねぇ～、ね！大井っち」
大井「はい！北上さんのいう通りです」
新城（こいつは違うな）
瑞鶴「とにかく！信用してるんだから…じゃ、私らはこれで、いくわよ！」
一同「は（ー）い！」
バタン
新城「ぼのたん…」
曙「何よ…みんなそれだけアンタを信頼してるってことよ、裏切ったら承知しないんだから！」
新城「デレちゃって可愛いなぁもう!!!」ギュー
曙「こらぁ！抱きつくなぁ!!」ゴンッ
新城「あ…頭がぁ、割れルゥ…」ゴロゴロ
曙「割れなさい！このクソ提督！」
～～～数日後、留学艦到着
新城「…ぼのたん…これはどう言う事だと思う？」
曙「」（（（（；。Д。））））））
新城「なんでだ…」
曙「なんで…」
新＆曙「「なんでこんなに溶け込んでるんだよ!!」」
加賀「あら提督…このヲ級さん、中々話の分かる艦よ」

ヲ「ヲ！」
新城「お前ら話し通じてんのな!?」
長門「提督！深海棲艦も悪い奴だけじゃないみたいだな！」
戦艦水鬼「ナグリアイノシガイガアル」
新城「なんで鬼がいるんだよ！最初は駆逐艦じゃないのかよ！ん？お前今殴り合いって言った？」
駆逐棲姫「アナタガココノシレイカン？」
新城「あー、駆逐艦だー、っておい！駆逐艦の種類が違う！」
イ級「呼ンダカ」
新城「そうそうお前みたいなのが～ってお前普通に海から出れるのな！」
イ級「貴様ラガソウキメツケテルダケダゾ」
新城「あらまー、勉強になりますー」
暁「あ、貴方がりゅーがくかんの人？ね、私は暁、レディーとして扱ってよね！」
イ級「レディー…ッフ」
暁「鼻で笑われた!?」
響「…」
タ級「…」
新城「？」
響「スパシーパ」
タ級「スパシーパ」
新城「!?」
響「司令官、このタ級はロシアの海域から来たらしい」
新城「なんで分かるんだよ！」
南方棲戦鬼「ワタシノコロッケハ…ホンモノヨ…」
足柄「っく…！私のカツも美味しいわよ！」
新城「お前ら一体何で張り合ってんだよ…」
曙「ねぇクソ提督」
新城「なんだ？」
曙「賑やかになりそうね…」

新城「そう…だな…」

提督業の歓迎会（上）

新城「取り敢えず深海達も艦娘も集まったな？諸君らに集まってもらったのは他でもない……！」
ヲ級「…」ゴクッ
瑞鶴「…」ゴクッ
新城「新しい仲間が来たよ！歓迎会しよ！」バチコーン☆
ヲ級（・ω・）
瑞鶴（・ω・、）
戦艦棲鬼「オマエラノ司令官大丈夫カ？」
長門「多分…きっと…常人だったはずだ…」
榛名「でも提督らしいじゃないですか！」
曙「で、準備は」
新城「それはだな…仲間意識を高めるために全員で行う！だがそれまで…」
一同「…」ゴクッ
新城「将棋でもするか」
一同「はぁ!?（ハァ!?）」
新城「え？嫌い？」
戦艦棲「ソウデハナイガ…」
新城「ならよくね？」
長門「もっと有意義なことをだな…」
新城「殴り合いは有意義とは言わんぞ」
長門（・ω・、）
戦艦棲（、・ω・）
新城「よし！じゃあ2人1組作れ～、詰将棋だ」
～～～
長門「そこだぁあああ！王手！」
戦艦棲「ム！甘イゾナガモン……！」
長門「ナガモンって呼ぶな！」
新城「そうかっかすんなってナガモン」

長門「提督まで…！」
タ級「オウテ…！」
扶桑「不幸だわ…」
タ級「ジコショウカイカ…？」
扶桑「え？」
タ級「フコウ型戦艦一番艦フコウダロ？」
扶桑「…」
タ級「ドウシタ？フコウ…」
扶桑「どうせ私は不幸ですよ!!!」（；ω；）
タ級「ドッドウシタ」
新城「うん…ちょっとこいつそう言うのに敏感だから…」
タ級「ヨクワカンナイガ…」
天龍「おっしゃあ！」
リ級「ム…ヤルワネ…モウ一戦ダ」
天龍「おう！いいぜ！」
響「むむ…」
イ級「…」
新城「？」
〜〜〜
長門「まだおわらん」
戦艦棲「モウオワラナイカ…」
扶桑「…」
新城「どうした？」
タ級「アレカラ全勝」
新城「あ…」
扶桑「ふふふふふふふふふふふふ」
新城（怖！なんかお岩さんみたい…）
天龍「くっそお！」
新城「おう!?どうしたお前…そんなでかい声出して」
天龍「こいつが強えんだよ！」
リ級「フフフ」

新城「両方共頑張れ～」
響「むむ…」
新城「どうした…？前来た時も唸ってただろ」
響「ああ司令官、最初の一手は悩むものだよ」
新城「まさか…あれから一手も打ってないなんて事ないだろ？」
イ級「アレカライチドモウッテナイゾ」
新城「…は？」
イ級「我モ後手デナヤムモノダ…時間ハイクラアッテモイイ」
新城「うわぁ…頭が良いってある意味災難かも…」
響「む…見えた！そこだ！」
イ級「ソコカ…ナラ…」
響「甘いさその手は見えていたよ」
イ級「ソレモオミトオシダ」
響「それもさ！」
新城「天才って天災だな…」
～～～
新城「大体終わったか～？」
戦艦棲「何故…」
長門「何故終わらん…」
新城「お前ら何やってんだよ！…あれ？お前ら一手も打ってないじゃん」
長門「何を言っている？打っているぞ」
新城「は？」
戦艦棲「ホラ…コウヤッテ」
新城「王を進めたり戻したりすな！馬鹿か！」
長門「な!?」
扶桑「ふふふふふ」
新城「ヒエ!?どうしたこいつ！」
タ級「アレカラマワリ将棋ニシタラフソウガゼンブミスシテタ…」
新城「筋金入りだな…」
天龍「ぐぬ…」

新城「？」
天龍「こいつ強すぎて手も足も出ないんだよ！」
リ級「…」
新城「お、おう…飲み込み早いんだな！」ナデナデ
リ級「フニュ…／／／」ヘナヘナ
新城「？」
天龍（。д。）
リ級「ナンデモ…ナイ」
新城「お…おう…」
イ級「…マケダ…ミトメヨウ…」サァァァァ
響「ああ、君の事は忘れないさ…」
新城「これただの将棋だよね!?」

提督業の事前準備

新城「よ～し…お前ら、将棋も終わったし歓迎会の準備に入るぞ～」
ヲ級「…」コク
明星「…」コク
一同（違いがわからん…）
瑞鶴「それはいいけどどこでやるの？流石に鳳翔さんとこも一杯よ？」
新城「いい事に気がついたな瑞鶴君…はい！提督シール一枚進呈！」
瑞鶴「え？何これ」
新城「１０枚集めるといいことがあるよ！」
瑞鶴「いい事？」
新城「敷地内や対象のお店で免税してくれる」
瑞鶴「地味！だけど役立つ！」
新城「一応軍の公認だからな～、デザインも自由だし一般の見学客からもコレクター性があるって人気があるぞ」
瑞鶴「世も末ね…」
新城「話題を戻すが…部屋が無理なら単純な話だ…敷地内全部使えば良かろう!!」
一同「「はぁ!?／ハァ!?」」
新城「取り敢えず港はバーベキュー！中は茶会やスポーツなどのイベントを予定している…」
金剛「ティータイムデス!?」
新城「いやか？お前なら乗ってくれると思ったんだが…」
金剛「そんなことないネ！ワタシ、頑張るから！期待してネ！」
新城「おう！そうするぞ～、」
戦艦棲「スポーツハ何ヲ予定シテイル？」
新城「サッカーと野球、リレー、あとは…ドッジボールとかだな、希望はあるか？」
戦艦棲「…ナラ…ドロケイハドウダ？」

新城「ドロケイ?まぁいいが…理由を聞いても?」
戦艦棲「ソレナラ駆逐艦タチモ単純二楽シメルダロ?」
新城「うん、そうだな!じゃあそうしよう!いいかな?皆んな」
一同「「は～い／ハ～イ」」
新城「じゃあそうしよう、歓迎会は今日抜きで3日間で予定している、今日中にちゃちゃっと終わらせるぞ～!」
～～～
新城「どれどれ…バーベキュの機材は…これでいいのかな?」
明石「はい、これで大丈夫です!」
新城「お前がいうと心配だな…」
明石「酷!」
新城「だって爆発しそう」
明石「しませんよ!じゃあ火をつけてみますか!?」
新城「じゃあやってみろ、俺は離れてみてる」
明石「逃げないでくださいよ!人を焚きつけて置いて!」ガシッ
新城「あ!こら掴むな!」
明石「あれ?つかないな…着火剤が悪いのかな?」ゴソゴソ
新城「お前何漁ってる!?止めろ!まだ死にたくない!」
明石「大丈夫ですってばも～、心配性なんだから、あった、前に作った着火剤、これでっと…ありゃ…」
新城「おい!なんだ明石!今のありゃ、はなんだ!?おい!」
明石「提督…」
新城「え!?何!?頼むから離して!」ジタバタ
明石「死ぬときは一緒です」トオイメー
新城「ちょ!?ー」
ドゴオオオオオオオン!
明石「…」アフロォ
新城「…」コンガリヤケマシターー!
吹雪「すごい音しましたけど…って司令官さん!?明石さん!?」
明石「何でもない…よ…」
新城「あぁ…」

明石「じゃ…私はこれで…」
新城「おっと待てよ？この後片付けがあるぞ？」
明石「怠…」
新城「俺も手伝うから！とっととやるぞ！」
吹雪「私も手伝いますから！」
新城「いい子だな…」アタマポンポン
吹雪「ふえ…／／／」
新城「ん？」
明石ジトー
明石「提督…」
新城「ん？どうした？そんな怖い顔して」
明石「ジゴロの才能ありますよ…」
新城「!?!?!」

泊地事変編

雑音

ここは呉鎮守府、かつては新城という提督が指揮していた場所だ

？「提督、本日のご予約は」

佐伯「そんなものわかっている、いちいち言わないでいい大和」

大和と呼ばれた艦娘、その目には光が無かった、あるのは虚空、闇だ、もう何度殴られたのだろう、その体には痛々しい痣が見える、

大和「失礼致しました…　それと、電文が届いております」

佐伯「それを早く言わぬか！この大飯ぐらいの鉄屑が！」

強い罵声と共に蹴りを入れる

大和「…」

いつだろう…　この鎮守府に光が消えたのは、この男が来たのは…　かつては別の男がいた気がする…　思い出せない、妹もまだ生きていた頃の話だ…　武蔵、あちらの世界はどうかしら…　私達艦娘は偶に生まれ変わるらしい…　別な艦娘として…　記憶を無くして…　それは艦娘なのかしら…　或いはー

佐伯「次から気をつけろ！どれ…　おお！古谷君か！久しぶりだな！元気にしていたか？…　そうか、ならいい、ところで、例の計画は順調かね？…　順調なんだな？なら問題は無いな、ようやくだ、ようやく成就する…　各同志に伝えてくれ、ＭＩ作成発動中に…　計画を実行だ、あの狸元帥を…　潰せ！元帥側に付く恐れの有る鎮守府や泊地も全てだ！」

そこでひと段落置くと、佐伯は呟いた

佐伯「ようやく成就するぞ…球磨…我が唯一無二の妻よ…」

お前が居なくなってどれ程の時が流れただろう…あれから幾星霜の刻が流れたか…その時間はあまりに長く、あまりに残酷だった…国はあの出来事をひた隠しにし、作戦自体を葬り去ろうとしている…お前の生きた証…お前の意志を…俺がこの手で刻んでやる…我が６３年の人生お前といた時間だけが輝いていて、暖かくて…お前を失った

時、その喪失の大きさに、気がくるいそうになった…ほかの艦娘に当たり、忘れようとした…何度も何度も建造した…お前を呼びたかった…もう一度一目会いたかった…でも結果は残酷だった…神はいない、そう思わせる内容で、でも諦め切れなかった…ならばそこに力を注ぐのをやめよう…お前の恨み、悲しみ、その全てをぶつける槌となろう…俺がお前を風化させない、いや、１０７部隊、あの部隊にいた全員を忘れない、風化させない、例え俺が地獄に落ちようとも、あの安寧の日々を奪った奴らから全てを奪い尽くす…俺がこの手で…あいつらを…

闇が覆う、とある鎮守府を、暗い、暗い闇が覆う、その闇は全てを飲み込む…護国の剣さえも

回想

新城「今日で休みも終わりかー、短かったな」
曙「あんだけ休めれば十分よ」
新城「それもそうか～」
曙「あんた大丈夫？なんか疲れてる？」
新城「今夜出発するＭＩ艦隊の指導してて…疲れた…」
曙「全く…今日は最終日なんだから、少しはあんたもたのしみなさい」
新城「そーするかな…うん、そうする」
金剛「テイトクー！そんなとこでナニしてるデス？」
新城「ああ、最終日どうするかな～って」
金剛「予定ないデスカ？」
新城「バーベキューも食い過ぎたしドロケイも足が死んでるしな」
曙「あんたすごい逃げ足だったわよね…」
金剛「オリンピック選手かと思いましたネ…」
新城「ああ…士官校時代に扱かれたな…」
金剛「テイトクの士官校時代デス？」
新城「ああ…気になるか？」
曙「まぁ少し気になるわね」
金剛「もちろんデース!!」
新城「じゃあ…少しだけだぞ、思い出したくもないからなぁ…あれは高校終わって大学の入学を控えた頃、当時海軍の関係者のコネで母親に無理矢理士官校に入れられてな…色々あって半殺しの目にあった」
曙「出だしがすでに不安要素しかないわね…」
新城「ああ、嫌なら力で抗えって言われてな…フルボッコだった」
曙「うわ」
金剛「ｏｈ…」
新城「でもまぁそんなこんなで入学したわけよ…」
～～～

新城「ここが海軍士官校か…見た目は普通、だな」
？「お前結局きてんじゃねぇか」
新城「ああ武田…俺は逆らえなかった」
武田「お前の母親…元帥の補佐だもんな…」
新城「ああ…試験で落ちる事も叶わなかった」
武田「まぁ頑張れ、提督になれば一応公務員だし給料も凄いぞ」
新城「そんなもんかね…」
〜〜〜入校式
校長「諸君らには立派な士官としての〜」
〜〜〜
新城「すっげぇ暇だった」
武田「お前いい寝顔だったぜ」
新城「やめてくれ恥ずかしい」
武田「やっべ！もうちょいで最初の講義始まるぞ！」
新城「うわ！マジじゃん行くか！」ドタバタ
〜〜〜
新城「うわ…もう始まってる」
武田「ここが講義室か…以外に一般的だな」
新城「前にいるのが教官か？女性なんだな…あれ？軍服じゃないぞ」
武田「あれ、艦娘じゃないか？」
新城「そうか？あれが？」
武田「じゃないと軍の施設に私服でいられる理由が無い」
するといきなり後ろから
？「あら、遅刻ですね…初回なので見逃します、次はありませんよ？」
そういうと彼女は少し苦笑いをして近づいてきた
新城「了解です」
武田「はい！」（うわー、すっげぇ美人…）
？「私は大和、戦艦大和です、前にいる妹の武蔵と共に皆さんの戦術、状況判断、艦娘と接する上でのメンタルケアを担当します、」

新城「メンタルケア？」
大和「はい、鎮守府は性質上提督以外全員女性です、その…間違いが起こらないようにです」
武田「え…ダメなんすか？」
大和「ダメに決まってるでしょう…互いに好き合って一緒になる人もいるみたいですが」
新城「いるのか～」
大和「では二人とも、席に座ってください、講義の最中ですので」
新＆武「「は～い」」
～～～
新城「まぁこんな具合に入学した訳だ」
曙「驚いた…あんた大和さんに会ってたのね」
新城「知ってたのか？」
曙「当たり前よ、大和さんと武蔵さんと言えば初号作戦の後の海域拡張作戦で猛威を振るった艦娘よ！」
新城「…まぁそれは知ってるけどよ…」
金剛「前の初号作戦ってどういう作戦デシタ？」
曙「それまで防衛に徹していた海軍がついに反撃に出た作戦よ、戦争前の領海とほぼ同程度の海域の奪取に成功、それと共に鬼や姫の存在やレ級の様な怪物を初認識した作戦だったはず」
新城「正解だな、じゃあ話は戻るぞ、それから時期は進んで夏の候補生の武道祭というイベントだな」
～～～
新城「もう武道祭か～、結構時間が進むの早いな…」
武田「そうだな…次はルール無しのタイマン戦だぞ…お前が出るんだよな？」
新城「ああ…母親に扱かれたからな…腕がなる」
武田「母親ってところが泣かせるな」
大和「まぁ…でも新城さんのお母様はこの武道祭の最優秀選手に選ばれた方ですし…」
新城「ほえー、結構うちの母親に詳しかったり？」

大和「武蔵と一緒によくお酒を飲んだり稽古してましたし、結構一緒にいました」
新城「武蔵さんか～、ちょっと前に練習で手合わせしてもらった時フルボッコにされたが…どこかうちの母親に型が似てると思ったらそういう事か」
武田「武蔵さんと組合!?」
新城「え？何か問題でも？」
武田「いや…相手は女性であってだな…」
新城「あ…」
武田「すいません！すいません！こいつわざとじゃないんです！」
大和「心配しなくて大丈夫です、武蔵はよく男性教官の方とも稽古してますから」
武田「へ…そうなんすか？」
大和「何でも負けたくない戦艦がいるとか、確か…長…そこから先が思い出せませんね…でも今年で私と武蔵はここを離れて鎮守府の方に向かいます、それまでの訓練ですね」
新城「あの武蔵さんが負けたくない相手…相当な猛者か…」
大和「あ、次出番ですよ、そろそろ行かないと…」
新城「あ…本当だ…死んでくる！」
武田「骨は拾ってやる」
大和「死なないでください！」
～～～
生徒Ａ「貴様…名前は…新城とか言ったか…面白くもないな…聞いたところ授業でも試合は全て放棄しているそうじゃないか」
新城「」ピクッ
生徒Ａ「そんな奴に模擬戦評価Ａの俺が負けるはずがねぇ、木刀使うが我慢しな！」
新城「武蔵さんと…」
生徒Ａ「？」
新城「武蔵さんと取っ組み合いするのがどれだけ命懸けか知らんからだろうがぁあああ!!」

生徒Ａ「!?」
新城「木刀の構えがちがう！あまいわぁ！」ドゴォ
生徒Ａ「ぁ…がぁ…」
新城「どうした！武蔵さんは腹パン一髪で休ませてくれるほど甘くないぞ！」ゴスン
生徒Ａ「降参！降参だ！」
新城「あまったれてんなぁあああぁぁぁあああ！」
生徒Ａ「!?」
～～～
新城「こんな感じでイベントは終わった」
曙「…あんた本当に人間？」
金剛「ちょっと引くネ…」
新城「酷くない!?」
曙「まぁそれはいいから、さっさと次行きなさいよ！」
新城「へいへい…、後は…卒業後、最初に着任した鎮守府かな」
曙「一気に飛んだわね…卒業式とか無かったの？」
新城「インフルエンザで欠席してた」
金剛「ｏｈ…」
～～～
新城「何故だ…」
憲兵Ａ「私も驚いたよ、卒業したての新人が呉鎮守府を指揮するとはな」
新城「手違いじゃないんですか？」
憲兵Ａ「いや、元帥直々のご判断だ、新しい風を入れたいそうだ…着いた、ここだぞ」
新城「うわ、本当に呉鎮守府だ…」
憲兵Ａ「じゃあしっかり励んでくれ、私はこれで」
新城「ありがとうございました～」
？「…貴方がなぜここに？」
新城「え？…大和さんこそ何故ここに」
大和「私は秘書艦として新しい提督をお呼びに」

新城「それ…俺…」
大和「はい？」
新城「俺です…」
大和「!?」
新城「デスヨネー」
大和「とっ取り敢えず中へ、講堂で皆さんお待ちかねです」
新城「あ、はい…大和さんがいるってことは武蔵さんも？」
大和「はい、武蔵もここにいますよ」
新城「　」マッサオー
大和「大丈夫ですって！上官を相手にはないと思います！多分！」
新城「今多分って言った!?言ったよね!?」
大和「さ、さぁこちらです」
新城「逃げないで！」
～～～
新城「後は適当に指示してたら来賓として来てた佐伯ぶん殴っちゃって今に至る」
曙「あんた…一部気になる課程をすっ飛ばしたわね…」
新城「そうかな…」
明石「提督提督～!!大変です！」ドタバタ
新城「どうした？」
明石「工廠にいる妖精さん達が急に大型建造し出して…」
新城「!?嘘だろ…貯まった資材が…」
曙「取り敢えず、行くわよ」
金剛「どうなってるネ…」
～～～
明石「あ…建造終わってた…」
新城「誰くるんだ…」
曙「大型建造だし…心配になるわね」
金剛「変ですネ～、妖精さん達が何の指令無しに建造なんて前例ないデース」
明石「あ…ドアが開きますよ」

パアアアアア！

武蔵「私は…丘にいるのか？確かに…敵の攻撃を受けて沈んだ筈だが…お前は…新城？」

事変

新城「…武蔵…お前なんで建造されてんだよ…お前は呉にいただろうが！」
武蔵「私は…駆逐艦を庇って…敵の攻撃を受けて沈んだ」
新城「そんなこと言ってんじゃねぇ！佐伯の野郎は大破進軍してやがったのか!?」
武蔵「ああ…勝ち目の無い戦だったがな…あの佐伯とやらは…無能としか思えん…」
新城「んな事は分かってんだ！…まぁいい…お前がここで建造された事は極秘だ…それと、お前に一つ注意してほしいことがある」
武蔵「…？」
明石「言っちゃうんですか？」
金剛「いつかは言わないとノー、ネ」
新城「この泊地の敷地内や担当海域の深海棲艦は戦闘禁止だ」
武蔵「まぁ…わかっt…ん？貴様今」
新城「さーて執務に戻るぞ～」
曙「そうね」
明石「え？ちょ」
金剛「演習の時間ネー」
武蔵「…まぁ事情は聞くまい、戦闘を望んでいるわけではないからな…それにお前であれば軍への造反はあり得まい」
ガチャ
長門「提督よ？響を見なかったか？可愛い服を見つけてー」
新城「あ、こらバカ！」
長門「…？そこの戦艦はどうしたのだ？」
武蔵「貴様…私を覚えていないのか？」
新城「えっと二人とも！お茶でも～」
長門「…誰だ？」
武蔵「…艦種別格闘技大会決勝戦で貴様に負けた…！」
長門「あ～！思い出したぞ！」

新城（本当だな？）
長門（ああ…）
長門「お前は…」
武蔵「お前は？」
長門「日向だろう？貴様の背負い投げは見事だった」
武蔵「む、さ、し、だ！貴様ぁあああああ!!」
長門「…やば…て、提督よ、私はこれで失礼する、演習の時間だ」
新城「今日は予定はないぞ」
長門「!?」
曙「そうね、長門さんはもうすでに最高練度じゃない」
長門「そっそう言えば装備の整備が」
明石「入ってないですよ」
長門「金剛から茶の湯に～」
金剛「呼んでないデスヨ？」
武蔵「提督よ、」
新城「ん？」
武蔵「長門を借りてもいいか？」
長門「!?」ビクゥ
新城「いいけど何でだ？」
武蔵「深海から上がったばかりで体が馴染んでいなくてな…体を鳴らさなければ」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
長門「提督よ…」
新城「いいぞ、長門、付き合ってやってくれ」
長門「な…」
武蔵「よし、じゃあ行くとしようか」ガシッ
長門「提督よ！助けろ！」ズルズル
新城「ドナドナドーナー」
長門「恨むぞぉおおお！」ズルズル
～～～執務室にて～～～
曙「クソ提督、おかしいわ」
新城「どうした？ぼのたん」

曙「近隣泊地…それに大本営との連絡が取れないのよ…朝も無言の電話が入ったくらいにして」
新城「…年の為友好的な拠点にも連絡を、それと戦艦水鬼を呼んできてくれ」
曙「分かったわ」
〜〜〜
戦艦「…ナニカ用カ？」
新城「そちらの方で進行中の作戦はあったりするのか？」
戦艦「ナニモキイテイナイゾ」
新城「…そうか…」
ガチャ
曙「おかしいわ、どことも連絡が取れないのよ」
新城「……各員に通達、本日の遠征、演習行動は中止、ＭＩ出撃も見合わせだ、島の近海に索敵を送り続け、厳戒態勢を敷く」
曙「どうしたのよ？急に」
新城「いや〜な予感がする…一応憲兵隊にも泊地の敷地内や要所の警備を増やしてもらう…」
戦艦「ワレワレハシランゾ」
新城「軍も組織である以上一枚岩ではいかない…敵は深海だけだと思っていたのが裏目に出たか…」
曙「まさか…」
新城「すまないが深海の方でもこれから指定する拠点の偵察をお願いできないか？」
戦艦「…イイダロウ…」
〜〜〜
コンコン
戦艦「ハイルゾ…偵察ニ行ッタ別地域ノ者ニヨレバ、交戦ヲ確認シタソウダ、実弾ヲ使用シタ、丘ト海上、両方デ戦闘ガ行ワレテイタラシイ…」
新城「ビンゴだな、只今より泊地を放棄、予定されていた緊急時マニュアルに沿って行動する、そちらの受け入れは大丈夫か？」

戦艦「イツデモ可能…ダガホカノ鎮守府ノ者ハドウスル？」
新城「俺から各提督個人宛に電話を送る、深海側は交戦している友軍の撤退の援護に回ってくれないか？」
戦艦「カマワナイ…イイダロウ」
〜〜〜
新城「これから敷地内一括で指示を出す、みんなそのままでいい、よく聞いてくれ、現在非常事態が起こっている、緊急時マニュアルに沿ってＭＩ海域の深海側拠点に総員で撤退する」
長門「…？」
武蔵「まさか…」
新城「第一艦隊から撤退を始め、潜水艦隊と第２機動艦隊に殿を務めてもらう、総員直ちに出港を始めろ、入居中の艦娘には拘束修復剤を手配した、工廠も停止、補助艦、職員も含め全員で撤退する」
曙「私達はいいけどクソ提督はどうするのよ!?」
新城「高速船を用意してある、深海側の攻撃もあり得ないしそれで移動する」

蜂起

新城「ぼのたん、そっちの棚の書類は全部燃やす、持って来てくれ」
曙「こんなゆっくりしてて良いの？」
新城「元帥承認とはいえ深海棲艦と繋がってたなんて知れたら…それこそ言い逃れできないぞ？」
曙「それもそうね…はい、これで最後よ」
新城「お、ありがとう…皆んなの退避はおおよそ完了したか？」
曙「ええ、後は憲兵さん達と殿を勤める艦隊、それからクソ提督と私だけよ」
新城「なら良い…じゃあ今からー」
俺達も逃げよう、そう言葉を続けようとしたその瞬間、激震と共に、爆音が響いた
それと共に誰かが執務室に駆け込んでくる
蒼華「新城！敵襲だ！海上戦力として艦娘を使ってくるあたり…」
新城「ああ…佐伯だ…ビンゴだな、じゃあお前達も早く船に乗り込め、俺も今行く航空艦隊と潜水艦隊で無理やり突破する」
蒼華「了解した…憲兵もまさか味方と戦う羽目になるとはな…」
新城「勿論だ…じゃあ行こう」
曙「非常用通路で港まで行った方がいいわね…」
そういうと曙は執務室の書棚をどかし、鉄の扉を露わにした、
新城「そんなものあったのか…」
曙「あったわよ、最初から」
新城「知らなかった…」
曙「当たり前じゃない、言ってないんだから」
新城「お前…」
蒼華「話すのもそこまでだ…急ぐぞ」
曙＆新「「うぃ～」」
～～～
曙「ここね…」
新城「まさか生け垣の下に出るとはな」

蒼華「そうね…そういえば昨日用務員のおばさんが堆肥を散布していたが…」
新城「…」
曙「…」
蒼華「きっきにしたら負けだ！急ごう！もう少しー」
港の方を振り向いた蒼華が言葉を続けようとした…が続けられなかった、陸軍の銃撃と艦娘の爆撃、この二つが交差していた、陸で戦う事に慣れていない艦娘達はそれぞれ負傷しているらしい、腕を庇うようにしながら弓を射る赤城、それを庇うように戦う加賀、その加賀も足に血が滲んでいる…新城に気付いた赤城が新城に促す
赤城「提督！早く、私達は殿、提督達の後に出ます」
新城「しかしだな」
加賀「いいから早く！私も赤城さんも海上で戦う分の艦載機を残してはそろそろ限界…もうそろそろジリ貧よ…」
曙「クソ…いえ、提督、ご判断を」
蒼華「新城…」
新城「…すまない…赤城…加賀…行くぞ！」
そう言って新城を先頭に走り出した、後ろからは相変わらずの銃撃音と爆撃音が聞こえる
走り始めて5分後、船が見えて来た、他の憲兵や職員は既に乗り込んでいるらしい
後数歩…そうだ、この船は軍仕様で防弾加工も凄まじい、この船に乗り込めば後は逃げるだけでー
タァン
新城がそう考えた瞬間、乾いた音が港に響く、その音は後方から聞こえ…振り向けば蒼華が崩れ落ちる瞬間であった、
新城「蒼華！」
曙「そんな…」
蒼華「早く行け…！私は…大丈夫だ…それよりも早く行け！」
新城「んな訳ないだろうが！おら！後もう少しだ、そんぐらい俺が」
蒼華「他の皆を犠牲にする気か？」

新城「それは…」
蒼華「私は…大人しく投降する…気に…するな」
新城「無理はするなよ、絶対に生きろ、」
蒼華「ああ…それと新城…」
新城「…何だ？」

紡ぎ

蒼華「提督…」
新城「…何だ？」
蒼華「　　」
新城「……すまない…それには…答えられない」
蒼華「かま…わない…さ…も、ういけ…」
新城「又いつか会おう、」
蒼華は応えなかった…否、応えられなかった、その腕は力無く崩れ落ち、漆黒の軍服は紅黒く染まる…目は次第に虚になり、光を讃えたその目は闇を讃えた、
新城「行こう…曙…」
曙「えぇ…提督」
乗り越えて進む、その道には累々と屍と闇、悲哀が積み重なっている茨の道…その道はいつか花を咲かすのだろうか…
新城「あそこで今海原を進んでいるのは赤城…それから加賀か…急ぐぞ…」
曙「クソ提督、危ない！」
曙が新城を跳ね飛ばす、そのはずみで新城は船内に放り投げられる、だが曙は
曙「っあああああああああああああああああああ!!」
新城「ぼのたん！オイ！」
曙「右目一つ、でなら…やす、いものよ…」
曙がそう呟いた瞬間、船が進みはじめた、中には憲兵も乗っており、新城を敵から隠すように中へ連れ去った
新城「ぼのたん！早く来い！ぼのたん！」
曙「　　」
何か言っている…だが聞こえない…曙がこちらに手を伸ばす、微かに薄桃色の薄い唇が動くそこから紡ぎ出された言葉は
生きて
新城は脱力感と絶望感の海に放り出された…何も出来ずにそのま

ま崩れ落ちる…船のハッチが閉じるその間際新城は確かに見た…敵陸軍兵に確保される曙を…抵抗を試み、無事な左目を潰され、右手足を折られ絶叫を上げる曙を
「いゃあああああああああああああああああああああ!!」
「…提督、こちらへ、」
必死に感情を押し殺した声で憲兵が新城を船内に促す
〜〜〜
赤城「提督達は無事出港したわね…じゃあ私達もいきましょう…舞風さん、浜風さん、野分さんに肩を貸してあげられますか？」
舞風「もちろんです！」
野分「ごめんね…舞風ちゃん浜風ちゃん」
浜風「気にしないで、早く行こう」
加賀「そうですね…艦載機も出来るだけ回収は出来ました、いきましょう」
そう言って海へと飛び降り、動力部に熱を入れ海原を進みだした
海上では、リンガ泊地の艦娘が時間稼ぎの戦闘を繰り広げていた
長門「でぇぇぇぇぇい！」
「がぁ…!?」
武蔵「はぁぁぁぁ！」
「うぁっ」
長門「まさか艦娘相手に実戦で武術を使うとは…」
武蔵「仕方ないだろう…あれは…提督の脱出艇か…我々もそろそろ離脱しよう、十分時間は稼いだ」
「そう簡単にはいきませんよ」
海原に凛とした声が響く、抑揚のない声でそう告げた
長門「…大和か…」
武蔵「大和！久しいな！無事だったか！」
大和「煩いですよ、紛い物が」
武蔵「…な、何を言っている？私は武蔵だ、ほら、ここにいるだろう」
大和の鋭い視線が武蔵に刺さる、光のない、深い闇を孕んだ視線が

駐留

新城「一応ここが予定されていた集合地点…だよな…？」
戦艦「アア…聖地ＭＩダ…貴様等ニカヲ貸スノハカマワナイ、ダガ一ツ約束シロ」
新城「内容は」
戦艦「我々トノ終戦ヲ約束シロ」
新城「…元からそれを目的にしてるんだが…」
戦艦「ソウカ…ナライイ…」
太平洋「新城…西ノ港ニ貴様等ノ仲間ガ到着シテイル…イッテヤレ」
新城「すまない…助かった…」
～～～
西ノ港に着くと多勢の、提督と思わしき人物や艦娘達が互いの安否を確認し合い、生存を確かめて喜び…死を確かめて嘆き合っていた
その中には当然新城の知る人物もいて
元帥「新城君、君との打ち合わせ通りで助かったよ」
新城「いえ…万が一を考えるのは軍人として当然ですので」
武田「お前～、元帥の前だからってそんな恭しくしちゃって～、お前がやってるの見るとなんか笑えるな」
新城「お前がゆるすぎるんだよ！元帥の前だぞ!?」
元帥「気にするな…今は元帥ではない…ただの老木だ、タメ口で構わんよ」
新城「元帥、佐伯の野郎がやろうとしている事は一体なんなんだ？俺個人を潰そうとするならわかる、だが多勢の提督を敵に回してまで行動する意味がわかんないな…」
元帥「奴の…妻の事があるのだろうな…」
新城「妻？彼奴の？」
元帥「ああ…艦娘でな…球磨という軽巡の娘だったか…」
武＆新「「艦娘!?」」
元帥「ん？何を驚いている…」

武田「いや…あんな艦娘に人権が無いとか言ってる奴の奥さんが艦娘って…」
元帥「ああ…奴は最初からあんな輩だったのでは無い…妻を失った…それが原因で変わった…
新城「……失礼…俺の記憶に間違いがない限り球磨は初号作戦の旗艦を務めた艦娘…だよな？」
元帥「ああ…そうだ…戦には勝った…だが多くを失った…球磨の所属していた艦隊で帰って来たのは大和と…武蔵…そして響という駆逐艦だけだ…」
新城（響!?うちの泊地のか…？やけに一人だけ練度高いと思ったが…そういう事か？）
元帥「択捉島と南鳥島、与那国島…そして沖ノ鳥島の４島を同時攻略、奪還したその作戦群を一括りで初号作戦と言うが…沖ノ鳥島の奪還部隊は壊滅…勝ちはしたが痛手が大きかった…」
武田「それで彼奴はブチ切れてあんな奴に成り下がったと？」
新城「だろうな…」
元帥「彼奴は球磨にベタ惚れだったからな…呼び方なんて「球磨お嬢」だ…」
新城「うわぁ…」
武田「想像できねぇ…」
元帥「それだけ大事な存在だったという事だ…」
新城「なんかもう一回彼奴をぶん殴りたくなって来た…事情はあるかも知れんが他の艦娘に当たってんじゃねぇよ…」
武田「お前の所の憲兵さんから聞いた…お前の所の秘書艦…大変だったんだな」
新城「…ぼのたんの身体と心…両方から光を奪った彼奴は…絶対に許せん…」
元帥「…ふむ…では策を練らんかね？」
新城「策？」
元帥「ああ…幸か不幸かここには多くの艦娘と提督が集まっている…彼奴の軍部内での支配機構が根付く前に反抗せねばなるまいよ」

新城「なるほどな…じゃあ呼び掛けてくれないか？俺が言っても集まらなそうだし…」

元帥「それもそうだな…ではそうしようか…」

篝火

元帥は、その老いた体に鞭を打つようにして大きく息を吸い込み、大きな声で語りかけた

元帥「諸君！皆も知っている通り我々は今窮地に立たされている、その窮地を掻い潜り、佐伯に牙を打ち付けるには諸君らの力が必要だ…我々は多くを失った、仲間を失った、ならばその墓前には何も手向けずにここで死にゆくつもりか？違うだろう…生きて仲間の墓前の華を手向けるだろう！立ち上がれ！諸君らが仲間と築いた絆はその程度か!!一度砕かれて終わる絆なのか!?証明して見せろ！諸君らが、諸君らの絆が不滅であると!!」

元帥の一喝はそれぞれの胸に響き、小さな炎を生み出した…闇の中に浮かぶ炎、まるで篝火のように燃えた炎は友を思う、仲間を想う、艦娘を想う、提督を想う各々の心の現れであった、

「そうだ…俺達は負けてねぇ…あいつにもう一度会うまでは…死ねねぇ！」

「鬼怒…もう一度…貴方に会いにいいっていいかな…？」

「憲兵隊の誇りを失った憲兵には…鉄槌を食らわせねばな…！」

「提督…提督…うえぇ…」

「北上さん…仲良くできなかったけど…今となっては」

「勝手に殺すな」ゴスッ

「お…おおう…」プルプルプルプル

武田「すげぇなあのおっさん…あの歳になってまだこんな演説できんのか」

新城「おっさんじゃねぇよ…だが同感だな…俺も、どこか見縊っていたのかもしれない」

元帥「私に出来ることはこれくらいだ…」

新城「元帥…あんたやっぱりすげぇな」

元帥「よく言うわ、若造が次は君の番だ、新城くん、当然反撃の策はあるのだろう？」

新城「もちろんです…！」

新城はそう言って元帥と位置を変わり、全員に見える位置に立った
新城「聞いたなみんな！俺達はこれから反撃…いや、攻撃を行う、これからここにいる提督と姫クラスの深海棲艦に作戦を話すつもりだ、ちょっと集まってくれ」
そう言って呼び寄せると
新城「これから反撃の作戦について話す…元帥、あの情報は本当ですよね？」
元帥「ああ…あいつは1ヶ月後4月1日にここＭＩ諸島に攻略作戦を展開する、これは佐伯に潜らせたネズミから得た情報だ…実際にそれに沿って動いている」
新城「ん？スパイ潜らせたなら今回の襲撃も防げたんじゃないのか？」
元帥「ああ…そのネズミも伝えてくれた…だがそれより遥かに大きな作戦が展開された、あいつは数名に作戦の要項を伝えておき、どうやらネズミが捕まえた情報と違う作戦が展開されたらしい」
新城「…スパイはバレているのか？」
元帥「さぁな…だが今となってはそれを信じる他ない、信じて裏切られても滅び、信じないで動かなくても滅びるのだ…」
提督ａ「…ならかけてみるのも手じゃないですか？」
武田「？」
提督ｂ「何もしないでこのまま負ければそれこそあいつらに失礼だ…そのスパイを信じよう、それしか道はない」
新城「…だな…！元帥、いいか？」
元帥「ああ…かまわんよ」
新城「じゃあ俺が作戦を言う、だがその作戦には深海棲艦の助力が必要だ」
戦艦「ン？ナンダ？」
新城「ＭＩ防衛艦隊の編成についてだ…最初の防衛艦隊に全力を注いで、出来るだけ粘ってくれないか？」
戦艦「ホウ…姫ヤ鬼ヲスベテ最初ノ防衛線ニダスト…」
新城「ああ…失礼だが今まで通りだと多分攻略されるだろうな…ど

うだ？」
戦艦「イイダロウ…ソレヲ試シテミルトシヨウ…」
新城「意外にすんなり承諾してくれたな…ありがとう…」ペコ
戦艦「カワラナクテハナラナイノハ其方ダケデハナイ…ソレニ、ソレナリニハ信用シテイルトイウコトダ」
武田「お～、お前信用されてるんだねぇ」
新城「揶揄うな！…次行くぞ…敵主力艦隊が深海艦隊に手間取ってる間に敵要地を襲撃、目釘付けにし、大本営で佐伯の斬首作戦を起こす…大本営の場所は呉鎮守府の隣だ、斬首作戦は憲兵隊に頼んでいいか？」
憲兵ａ「それはかまわないが…艦娘達は仲間を襲うのか…？」
新城「あくまでも施設のみの破壊だ…相手の艦娘も仲間とは戦いたく無いだろうからな…それでも出てくるやつには…交戦するしか無いが…」
提督ｂ「ああ…だが流石に沈め無くていいよな？戦闘不能に追い込ませれば…」
新城「ああ、もちろん、そのつもりだ…ここまで聞いて何か質問の有る奴はいるか？」
そこには手を挙げるものは居ない
新城「なら…確自用意してくれ…あいつらに度肝を抜かせよう…！」

開戦

「新城…貴様ラノ推察ドオリノルートデ敵ガ現レタ…作戦通リデイイナ？」
「ああ、取り敢えず追い払うぞ、それを気付かれない様に追跡、良いな」
「「はい!!」」
「シカシ…」
「ん？」
「敵モ高練度ノ筈…上手クイケバ良いイガ」
「なぁに、心配すんなって…あいつらも中々の物だぞ」
「…ソウカ…オ前ガソレナラバイイダロウ…」

～～～

「目標のＭＩ諸島沿岸まで接近、敵艦隊発見！艦影６、…なっ!?!?」
「どうしたの？天城」
「不味い…伊勢さん…姫４隻、水鬼クラス２!!」
「!?」
「これは…伊勢、撤退しかあるまい」
「でも日向、出来るだけ削って帰ったほうが次来る時楽だよ」
「ここで沈んだら意味がないだろう！」
「へいへい…撤退の準備はいい？」
「私は大丈夫、そっちはどう？綾波」
「私もです」

～～～

「全艦…砲撃…開始」
戦艦戦鬼の一声で砲撃を開始する艦隊、爆音と共に飛沫、水柱が立つ

～～～

「敵艦隊砲撃開始!!」
「くっ…全体回避行動!!」
ジグザグに航行し、被弾率を下げようと懸命に撤退する
「きゃああ！」

「天城!!!!…葛城!!索敵機を飛ばして!近くの諸島を抜けて目を眩ませながら撤退!」
「はい!」
〜〜〜
「敵…艦載機ノ発艦ヲ確認…集中砲火デオトスゾ」
圧倒的な弾幕が艦載機を狙い、艦載機は黒煙を上げながら墜落する
〜〜〜
「!?艦載機撃墜!!敵艦隊、尚も向かってきます!!」
「なんだと!?」
「…!敵艦隊回頭!撤退していきます!」
「…?ここまで迫って置いて…か?」
「間もなく諸島到達します!…?これは…救難信号…?」
「なんだと!?…この海域に遭難した艦娘は居なかった気もするが…取り敢えず向かうぞ」
「「はい!!」」
〜〜〜
「ヨテイドオリ敵ハ諸島ニハイッタ、アトハ頼ンダゾ」
「おう!協力、ありがとうな!」
「カマワンサ…アノ光…ソノ下デスゴセルノナラバナ」
「……尽力する、この戦いを終わらせて、終戦に向ける、」
「期待…シテイル」
「存分にしとけ!さて…そっちの準備は良いか?」
そういうと新城は無線を入れる
「提督…問題はありません、強いて言うと五航戦の濡れワカメが煩いくらいかしら」
「誰が煩いですって!?」
「ほらほら二人共〜、落ち着いて〜!」
「戦前に喧嘩をしている場合ではないぞ…!折角大破した際の服装なんだ、負傷兵っぽくせねば!」
「そんな元気な負傷兵居ないってば長門」
「ヤラレター、イタイヨーオッカサンー」

「あははっはははははは!!」
「ちょ！長門さん…ひひ…お腹痛い…w」
「大井っちー、こう言うの得意そうだよね」
「北上さんこそ～」
「お前ら～、そろそろ敵艦隊が着くぞ、ちゃんと負傷者の真似しとけー」
「「はーい」」
～～～
「信号はここら辺から出てる…はず…」
「あ！日向、あれじゃない？」
「どれだ…あれは…!!」
伊勢が指を指したた方角、そこを見ると
「おのれぇ…おのれレ級!!!」
「イタイヨータスケテー」
「北上さぁあああああああん!!死んじゃいやぁあああああああ!!!」
「大井っち……後は…頼んだ…よ」
「どうしたの瑞鶴濡れワカメを頭に乗せて俎板は無いわ…あ、その胸の俎板で切るのね」
「むきいいいいいいいいい!!このホルスタイン!!」
「頭に来ました」
「上等よ！さっさと艤装だしなさい！フルボッコにしてやるわ！」
「なぁ伊勢…あれはなんなんだ？」
「怪我人…多分」
「長門に加賀…新城のとこの……」
「とにかく話聞いてみようよ、本当に怪我して隠れたのかもしれないし」

追い剥ぎ

「ふむふむ…裏切った新城達を説得しようとしたら奴等に襲われて軒並み大破、それで一時的にこの諸島に逃げていた、と」
「新城って人、もうちょっとまともだと思ってたのにー」
「どうした伊勢…残念そうな顔して」
「扶桑達を助けた提督って言うからてっきり今回の離反も何かわけがあったんだと思いたかったけど…」
「あぁ…伊勢はあの泊地から転属になったんだな」
「そう…だからさ…」
「あのー！伊勢さん！それに他の皆さんも！新城側の保持する戦力やその基地を纏めたファイルをあの洞窟に隠したんです、怪我をして動けないので…取ってきて頂けませんか？」
「ファイルだと…？本当か？瑞鶴、ならば…戦局は随分と優位になれるだろうな…場所は？」
「こっちです！他の皆さんも来てください！」
「どれどれー？随分と暗いな…本当にここに？」
「はい、あ！あそこ!!」
「どこ？」
「皆さん、もっと奥のあの………よし今だ縛って服を剥ぎ取るわよ!!」

「「「は？」」」

伊勢達の艦隊メンバーの素っ頓狂な声が流れる、一瞬頭が思考を停止する、そうしていると
「でぇえええええい!!」
一同は後ろから襲ってきた長門に気絶させられる
〜〜〜
数十分後、伊勢達が目を覚ますと
「何これ!?」

衣服が剥ぎ取られ椰子の木に縛られていた、そこに瑞鶴達の姿は無く書き置きの紙があるばかりで

後で迎え寄越すから心配無用よ！

と描いてあった

「やられちゃったな～……」

とてつもない脱力感が日向を襲う

～～～

「いやー！上手くいってよかったわね！」

「流石瑞鶴だわ」

「え～？それほどでも～、あるけど～♪」

「あそこまでの演技、私にはできないわ、山賊の才能がありそうね」

「むきー!!!」

「まぁまぁ二人とも～、にしても長門さんの肉弾戦の凄まじさ…」

「あぁ…敵6人が一瞬だったもんね～」

「長門のむさ苦しい格闘技も無駄じゃなかったみたいで良かったわね」

「な!?陸奥…流石にその言い方は傷つくぞ!!」

「さて…速度上げて本土に一気に近づきます、私達の任務は出来る限りの撹乱と敵戦力の削減、別働隊と合流して空襲を行います」

「わかったけど…別働隊のメンバーは？」

「確かに、気になるところはあるな」

「提督からの指令に書いてありましたが……やっべ」

「どうしたのよ加賀さん、珍しく真っ青な顔して」

「それになんか話し方がいつもと違うぞ…？」

「なんて書いてあったのよ…どれどれ～……あ……」

「陸奥さんまで～!!なんて書いてあったんですか！」

大井が陸奥の手に握られた紙片を覗き込む、そこに書いてあったのは

扶桑、山城、阿武隈、木曽、大鳳、翔鶴

「あー……大事な作戦前にはあまり見たくないメンツね……」

外話
提督業のクリスマス

新城「あー、今年ももう年の瀬か…色々あったなぁ…元帥に深海棲艦食べさせられたり元帥に空飛ばされたり、元帥にリンガ泊地に飛ばされたり…あれ？元帥しか無くね？別な事は…佐伯の野郎ぶん殴ったか…あの快感は忘れまい…」

新城はリンガ泊地の敷地内にある訓練用ジョギングコースを歩きながらそう呟いた

新城「にしても…ここは本当に冬なのか？まだギリギリ薄着でいられるよな…」

タッタッタッタッタ

新城「ん？誰か来るか？こんな時間にトレーニングかな…」

天龍「お？提督かよ」

新城「おー、お前か天龍、今日は龍田は一緒じゃないのか？」

天龍「あいつは間宮さんの手伝い…じゃなかった、部屋で本読んでるってな、オレみたいにクリスマスまで訓練すんのは嫌だとよ」

新城「それは…龍田らしいな」

天龍「だろ？ったく、弾薬切れたら何で戦うんだっつの」

新城「は？」

天龍「あ？刀だろ刀！」

新城「…もしかしてその為に刀剣類なんて持ってるのか？」

天龍「おう、まぁ殆どつかわねぇけどな」

新城「それってただ邪魔になるだけじゃないか？」

天龍「んなこたぁねぇよ！もっとこう、なんていうか」

新城「何ていうか？」

天龍「浪漫だろうが！」

新城「…ッ…」プルプルプルプル

天龍「何笑ってんだよ！おい！」

新城「すまんｗついなｗ」

天龍「まぁでも感謝してんだぜ？」
新城「感謝？」
天龍「ああ、ここは少し前までまともな場所じゃなかったからな、やっとオレたちが本領を発揮出来る、もう2度と仲間の涙を見ないで済む、そう考えるとな、それに、感謝だけじゃねぇんだぜ？」
新城「？」
天龍「っその…えっと…」シドロモドロ
新城「よく分からんが…来年も宜しく頼むな、頼りにしてんだからよ」
天龍「ったりまえだろ！」
瑞鶴「あれ？提督さんじゃん、どうしたのこんな艦娘しか来ないような場所に」
歩きながらをしているといつのまにか瑞鶴が後ろに来ていたらしい、瑞鶴は提督の方に歩み寄ると
瑞鶴「提督さん、昨日はいろいろと大変だったね」ニヤニヤ
新城「ハンセイシテマス」
天龍「あー、そういやそうだったな」
瑞鶴「あの後曙ちゃんが提督に抱きついたり長門さんがそれを止めようとするどさくさで曙ちゃんに抱きついたりと」
新城「そうだったっけな…何も覚えてねぇ…」
瑞鶴「それも提督さんらしいけどねー、まぁお酒は程々にね」
新城「身に染みさせるよ…」
瑞鶴「にしても曙ちゃん張り切ってたな～」
新城「曙が？」
天龍「なんでもない!!!何でもないからな!!」
新城「？そうか…」
天龍（何やってんだよ！バレたらどうすんだよ！）
瑞鶴（ごめんごめん、すっかり忘れてた）
天龍（気をつけろよ）
瑞鶴（ええ、もちろんよ）
新城「お、裏門が見えてきたな、」

瑞鶴「そうね」
天龍「おう」
新城「…さて、ここからはやる事があるから、俺は執務室に戻る…今日は絶対に執務室に入るなよ？」
瑞鶴「わかったわ」
天龍「おう」
瑞鶴「さて、いきますか！準備のお手伝いに」
天龍「そうだな、駆逐艦達が妙に張り切ってたしな」
瑞鶴「そうねぇ、やっぱり駆逐艦の笑顔を見てると癒されるわよね」
長門「そうだな！瑞鶴も分かるか！」
瑞鶴（うわー、出たよ面倒くさいのが…）
天龍（意味が違うだろ意味が…）
瑞鶴「そっそうね、長門さんもお手伝いに？」
長門「ああ、勿論だ、駆逐艦達の企てたパーティーだ、全力で後押しせねばなるまい」
天龍「そーかいそーかい」
瑞鶴「さて、着いたわよ…今日だけは…ここも戦場ね…！」
長門「ああ、ビッグセブンの力、侮るなよ！」
天龍「厨房の前で騒ぐなよ長門…」
長門「なっ!?」
～～～執務室～～～
新城「クックックックック…全ては整った！全ての準備は今日この日のために…！某ネット通販で購入したサンタ帽、サンタ服、サンタ髭…そしてプレゼント!!完璧だ！あいつらの喜ぶ顔が目に浮かぶようだわ！ハッハッハッハッハ！ハーッハッハッハッハ!!」
～～～その日の深夜～～～
サンタ？「さて…行動を開始するか…全照明は消されてるから暗視ゴーグルを着けてっと、顔バレ防止のプロレスマスクも着けてっと、よし、これで駆逐艦達の夢を壊す心配はない…軽巡以上は流石にわかってるだろうがな…おっと、サンタ服を着るのを忘れていた、サンタが制服で現れたら1発で誰だか分かるしな…これも保険でで制服

とは正反対の黒色だ、我が計画に抜かりはないぞぉぉぉ！」
スタスタスタ
不審者サンタ「さて…つくな…全員同じで中身はケーキ…財布には響くが…笑顔には変えられん…」
００１
不審者サンタ「合鍵を使って、と、よし、いくぞ」メリークリスマース
「この部屋は…浜風達か、という事は赤城達もいるな…ここが寝室だな…プレゼントを置いて、っと」コソコソ
「完了、にしても良い笑顔で寝てるな…この笑顔を守るためにアイツをぶん殴ったと思えば後悔はしないよ…」
～～～
不審者サンタ「次の部屋は…吹雪達か、…どれどれ」メリークリスマース
「何か質素だな…もうちょっと全部屋で家具を揃えてやれると良いんだがなぁ…お、よく寝てる…仕事がしやすいぞ…」コソコソ
「さて、行くか、」ゴンッ
「やば！」
吹雪「ふぇ～？…ふっ不審者です！起きてください皆さん！」
不審者「やば…！」スタコラ
吹雪「にっ逃げた…？」
深雪「どうしたってんだ吹雪」
吹雪「えっっとねー」
～～～
不審者「危ない危ない…次はこの部屋か…さっきの騒ぎで起きてないと良いが…」メリークリスマース
「あれ？誰もいないな…まぁプレゼントだけ置いてくか…」
～～～しばらく経過～～～
不審者「おかしいなぁ…無人の部屋が多すぎる…一体…ん？あそこに居るのは暁か…おーい！暁～！」
暁「へ？ふゃあああああああああ!?!?!?みんな！不審者が出た

わよ！」
響「本当かい」
雷「みっみんな！しれーかんに報告よ！」
電「そうするのです！」
暁「でもまずは…逃げるわよ！」
不審者「え!?おいお前ら！俺が提督なんだが！」
暁「そんな嘘ついたって無駄よ！あんたなんかがしれーかんなはずないじゃない！」
不審者「そっそんなぁ」↑自分の格好を忘れている
不審者「俺なんかしたか…まぁいい、次だ次…ん？厨房が明るい…だれかいるのか？…もしや不審者か!?」
～～～厨房前～～～
サンタっぽい不審者「さて、ついたわけだが…艦娘だったらまずいな…いや、せっかくサンタの格好をしているんだ、メリークリスマーッスで行こうかな」ウーン
～～～厨房の中～～～
天龍「もうちょっとか？」
間宮「はい、もうちょっとでケーキのスポンジが出来ます、後はそれをデコレーションするだけです」
雪風「やっと完成しそうです！」
長門「そうだな！皆よく頑張った！」
時津風「きゃぁ！」アシヲスベラス
～～～厨房の外～～～
不審者「今のは時津風の悲鳴!?もう悩んでる暇は無いな！いくぞ！」
「メリークリスマーッス」バゴォォォォン！
一同「きゃあああああああああああ！」
長門「おのれ不審者！駆逐艦達が作った料理は渡さんぞ！」
天龍「お前ら下がってろ！間宮！こいつらの事頼むぜ！」
瑞鶴「艦載機全機発艦、目標、目の前の不審者！」
不審者「ギャアアアアアアアアア!?なんで艦載機出すんだよ！お前

頭やばいだろ！」
瑞鶴「不審者に言われたく無いわ！」
長門「逃げたぞ！」
天龍「逃すか！」
～～～
新城「なんでだ…なんで不審者なんで言われにゃあかんのだ…ん？…」←やっと自分の服装に気付く
「…気にしたら負けか…でもあいつら何作ってたんだろ…」

続く

提督業のクリスマス甲

次の日の夕方、新城は廊下を歩いていた
新城「昨日は酷い目に遭った…あんな格好してたら当たり前か…」
トボトボ
長門「提督！この辺りで不審者を見なかったか？」
新城「…いや見てないが」
長門「明石が言うにはまだ敷地から出た痕跡が無いらしいが…」
新城「そっそうなのか」
長門「時に提督よ、昨日は夜中何をしていた？」
新城「なっ何もしてないぞ」
長門「…そう隠さなくても分かる、昨日の不審者は提督だったのだろう？」
新城「…なぜ分かった…」
明石「防犯カメラ」
新城「……そんな普通な…」
長門「さて、事情を説明して貰おうか」
新城「」カクカクシカジカ
明石「ふーん」
長門「提督…」プルプル
新城「ん？」
長門「来年からは混ぜろ」
新城「まぁいいが」
長門「それでいい…だが何故逃げたんだ？」
新城「だって打ってくるし…」
長門「それは仕方ないだろう！こっちも驚いたんだ」
新城「まぁお互い様って事で」
長門「そうだな」
明石「提督、仕事のお話なんですが」
新城「なんだ？」
明石「潜水艦の装備の一新が終わりました」

新城「そうか、又後程向かうよ、今日は出撃を入れてないから明日みんなに試してもらうか」
明石「提督…」
新城「？」
明石「明石にクリスマスプレゼントは!?」キラキラ
新城「物欲で今日一目を輝かせるなよ…すまん、忘れてた…」
明石「なら…仕方ないですね…」シュンッ
新城「すまない、その代わり、出来ることなら何でもしよう」
明石「今何でもと言いましたね？」
新城「ああ、言ったが…無茶な事はダメだぞ」
明石「なら…今度の休日明石とデートして下さい！」
新城「その程度なら構わんが」
長門「…」
新城「長門？」
長門「何でもない、余り風紀は乱すなよ」
明石「当たり前ですよぉ！ちょっとくんずほぐれずするだけですから～♡」
新城「却下」
明石「そんなぁ…」
新城「デートだけだぞ」
明石「はい…」トボトボ
長門「全くあいつは…」
新城「まぁいいさ、それも個性だからな」
浜風「提督～！こっちきて下さいー！」
新城「お？いまいく～」
長門「…大人の対応してやれよ、提督」
浜風「提督！こちらです！」
浜風は半ば強引に提督を食堂前まで連れてきた
新城「？食堂だがどうかしたか？」
浜風「取り敢えず入って下さい！」グイグイ
新城「？なんだぁ…ってこらすげぇ!!」

新城の目に飛び込んできたのはつい数時間前に昼食を採りにきた普段の食堂ではない、壁一面に手作りと思われる紙の花や様々な色紙を使っ
て作られた紙のチェーン等のあしらわれた色彩豊かな食堂だった、中には艦娘達がいて
天龍「提督！今日はクリスマスだぜ！」
吹雪「みんなで飾り付けしたんですよ！」
瑞鶴「みんな頑張っちゃって、すっごい張り切ってたんだから！」
他にも様々な言葉がかけられる、ーそうか、昨日の夜中にやってたのはこう言う事だったのか、新城はすぐに察すると
新城「お前らすげぇな！よくやるもんだ！」
龍田「提督～？もしかしてクリスマスを完全に忘れてた～？」
新城「…はい…」
赤城「提督、どうぞこちらへ、」
新城「すまないな」
赤城が新城を椅子へと誘う
新城「しかしお前ら休日にこんな事やって休めたのか？」
吹雪「確かに疲れましたが、楽しかったです！」
新城「…そうかい、なら良いんだがな」
隼鷹「さて、主賓も来た事だし、ぱぁ～っと行こうぜ！ぱぁ～っとなぁ！」
飛鷹「こら隼鷹！はしたないわよ！」
那智「では提督、乾杯の音頭を頼む」
新城「俺で良いのか？」
曙「あんた以外に務まらないでしょ！察しなさいよこのクソ提督！」
新城「ぼのたん…」
曙「何よ」
新城「もっとデレてくれても良いんだよ？」
曙「誰がデレるか！このクソ提督！」ゲシゲシ
新城「痛!?お前脛蹴るなよ！」ギャーギャー

加賀「落ち着いて下さい提督、それに曙さんも、」
新城「そうだな、すまない」
曙「そうね、少し騒ぎ過ぎたわね」
新城「では改めて、乾杯！」
一同「「乾杯！」」
金剛「テイトクー！ワタシへのプレゼントを出すのデース！」
足柄「クリスマスにはやっぱりカツよ！聖夜に勝つ！これよぉ！よ～し！揚げるわぁ!!」
飛龍「うんうんクリスマスねぇ、ケーキに七面鳥も…う～ん！美味しいわぁ！あれ？瑞鶴？何で怒ってるの？」
隼鷹「酒がうまいぜぇ！鳥もうまいぜぇ！ヒャッハー！最高だー!!」
各人それぞれ、親しい仲間と語り合いながら杯を交わす、又1年、生きながらえたとばかりに、それを見た新城は声を張って
新城「諸君、食事をしたままでいい、聞いてくれ、今年途中からだが大変世話になった！こうしてここで年末を迎えられたのもお前らのお陰だ！又来年も、宜しく頼む！」
その返答は迷い無く返された、1つのまとまりとなって
一同「「こちらこそ！宜しくお願いします！」」
リンガの夜は長い、遠い水平線に夕日が沈むのが見える、南の海の聖夜を満喫する声が、夕暮れ時の海原に響く